

伏見城跡発掘調査報告書

2 0 2 3

株式会社 文化財サービス



1. 調査地遠景 1 (調査地上空より大阪方面を望む)



2. 調査地遠景 2 (調査地上空より京都方面を望む)



1. 2区南北断割り東壁断面（西から）



1. 2区南北断割り東壁断面（北西から）



2. 2区東西断割り南壁断面（北西から）



1. 1区全景（北から）



2. 2区全景（北から）



1. 郭I全景（北西から）



2. 出土金箔瓦

例 言

- 1 本書は、京都市伏見区桃山町島津76、51-2、53-4、54-4、55-1で実施した、伏見城跡の発掘調査成果報告書である。(京都市番号 22F219)
- 2 調査は、株式会社アールライフ(代表取締役 皇甫 樹)による宅地開発に伴い実施した。
- 3 現地調査は、株式会社アクセス都市設計より株式会社文化財サービス(以下、「文化財サービス」という)に委託され、大西晃靖、菅田 薫、早見由槻(令和5年3月31日まで)、和氣清章(令和5年4月1日以降)(文化財サービス)が担当した。
- 4 調査期間は令和4年11月24日～令和5年6月12日である。
- 5 調査面積は2,892.1㎡である。
- 6 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高はT.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 7 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 本書の執筆は大西、和氣が行い、担当は文末に記した。編集は大西、和氣、中西佳奈江、吉川絵里(文化財サービス)が行った。
- 9 現地での記録写真撮影は大西、菅田、早見、和氣が行い、出土遺物の撮影は写房楠華堂(内田真紀子氏)に依頼した。
- 10 現地での重機掘削は株式会社一誠建設に依頼した。
- 11 調査に係る資機材のリースおよび仮設工事は株式会社Soidに依頼した。
- 12 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下、「文化財保護課」という)が保管している。
- 13 発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 田中慎一、小林一浩、上田智也、清須慶太、吉岡創平、中 優作(以上、文化財サービス)、作業員(株式会社京カンリ)

〔整理作業〕 田邊貴教、望月麻佑、多賀摩耶、森下直子、中 優作、野地ますみ、神野いくみ、上野恵己、内牧明彦、甲田春奈、後藤佳菜、下市沙耶香、鈴村 巴、西尾知子、溝川珠樹、若山美帆(以上、文化財サービス)
- 14 自然科学分析については、株式会社古生態研究所(辻本裕也氏)、中塚 良氏(公益財団法人向日市埋蔵文化財センター)に依頼し、附章にまとめた。
- 15 出土遺物の年代観は、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
中世土器研究会「新版 概説 中世の土器・陶磁器」真陽社 2022年に依った。

16 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。

(敬称略)

山田邦和(同志社女子大学)、森島康雄(公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)、
鈴木久男(京都産業大学)、南 孝雄・柏田有香・松吉祐希・三好孝一・中谷俊哉・
渡邊都季哉(公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所)、奥井智子・鈴木久史
(京都市文化財保護課)、魚島純一(奈良大学)

目次

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	4

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	5
2 歴史的環境	5
3 既往の調査	8

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	13
2 検出遺構	13
(1) 郭の構成	13
(2) 伏見城期の遺構	17
(3) 廃城後の遺構	26
3 出土遺物	33
(1) 土器・陶磁器類	34
(2) 瓦類	39
(3) 金属製品	40
(4) 石製品	40

第Ⅳ章 まとめ

1 遺跡の変遷	43
2 屋敷地の復元	47
3 伏見城下町の都市計画	49
(1) はじめに	49
(2) 伏見城下町の造営	49
(3) 伏見城下町の都市計画	51
(4) 成果と課題	52

附章

1 伏見城跡の盛土堆積物に関する検討	58
2 木幡山伏見城周辺地域の地形面区分・変動地形条件と人間活動	79

図版目次

- 巻頭図版 1 1. 調査地遠景 1 (調査地上空より大阪方面を望む)
2. 調査地遠景 2 (調査地上空より京都方面を望む)
- 巻頭図版 2 1. 2区南北断割り東壁断面 (西から)
- 巻頭図版 3 1. 2区南北断割り東壁断面 (北西から)
2. 2区東西断割り南壁断面 (北西から)
- 巻頭図版 4 1. 1区全景 (北から)
2. 2区全景 (北から)
- 巻頭図版 5 1. 郭I全景 (北西から)
2. 出土金箔瓦
- 図版 1 遺構 調査区陰影図 (1 : 300)
- 図版 2 遺構 1・2区東壁土層断面図 (1 : 100)
- 図版 3 遺構 2区東西断割り南壁土層断面図 (1 : 100)
- 図版 4 遺構 2区断割り断面オルソ画像 (1 : 100)
- 図版 5 遺構 1区南壁土層断面図 (1 : 100)
- 図版 6 遺構 1区北・中央断割り土層断面図 (1 : 100)
- 図版 7 遺構 2区北壁土層断面図 (1 : 100)
- 図版 8 遺構 1区東部南壁、3区北・東壁土層断面図 (1 : 100)
- 図版 9 遺構 塀110平面・断面図 (1 : 100)
- 図版10 遺構 柱列111・112・113平面・断面図 (1 : 100)
- 図版11 遺構 建物650、柱列654平面・断面図 (1 : 100)
- 図版12 遺構 柱列651・652・653平面・断面図 (1 : 100)
- 図版13 遺構 柱列810・811平面・断面図 (1 : 100)
- 図版14 遺構 伏見城期土坑平面・断面図 (1 : 40)
- 図版15 遺構 伏見城期土坑、ピット平面・断面図 (1 : 40)
- 図版16 遺構 廃城後土坑平面・断面図 1 (1 : 50)
- 図版17 遺構 廃城後土坑平面・断面図 2 (1 : 50)
- 図版18 遺物 出土遺物 1 (伏見城以前、伏見城期 1 1 : 4)
- 図版19 遺物 出土遺物 2 (伏見城期 2 1 : 4)
- 図版20 遺物 出土遺物 3 (江戸時代 1 : 4)
- 図版21 遺物 出土遺物 4 (軒瓦、道具瓦、金箔瓦 1 : 4)
- 図版22 遺物 出土遺物 5 (丸瓦 1 : 4)
- 図版23 遺物 出土遺物 6 (金属製品、石製品 1 : 4 1 : 2)
- 図版24 遺構 1. 2区全景 (上が北)
2. 1区全景 (上が北)
- 図版25 遺構 1. 塀110、柱列112・113 (南から)

- | | | |
|------|----|--|
| 図版26 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 柱穴68 (西から) 2. 柱穴32 (西から) 3. 塀110北面、柱列111 (東から) |
| 図版27 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. ピット19断面 (北から) 2. 土坑14 (南から) 3. 土坑28 (北から) |
| 図版28 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 1区南西部 (郭G・H) 全景 (西から) 2. 1区南西部 (郭G) 北側拡張後全景 (南西から) 3. 柱列651・652 (東から) |
| 図版29 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 建物650、柱列653・654 (西から) 2. 土坑610 (北から) |
| 図版30 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2区北西部 (郭I) 全景1 (北から) 2. 2区北西部 (郭I) 全景2 (南から) |
| 図版31 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 柱列811 (南から) 2. 柱列810 (西から) 3. 土坑784 (東から) |
| 図版32 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 郭E・I間通路状遺構の状況1 (南西から) 2. 郭E・I間通路状遺構の状況2 (西から) |
| 図版33 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2区断割り後全景 (南から) 2. 1区断割り後全景 (北から) |
| 図版34 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2区南北断割り東壁断面 (西から) 2. 2区南北断割り南端部 谷斜面の状況 (北西から) |
| 図版35 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2区東西断割り西半 北壁断面 (南東から) 2. 2区東西断割り東半 北壁断面 (南西から) |
| 図版36 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2区北部 (郭D) 第1段階造成土上面の状況 (南西から) 2. 2区北西部 (郭I) 東西セクション (北から) |
| 図版37 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 1区南壁 郭F・G間段差の状況 (北から) 2. 1区断割り後の状況 (北東から) |
| 図版38 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 土坑10・17 (南西から) 2. 土坑775・776・777・779・799 (南から) 3. 土坑431 (南から) |
| 図版39 | 遺構 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 3区全景 (西から) 2. 3区北壁断面 (南から) |
| 図版40 | 遺物 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 出土遺物1 (古墳時代土師器・須恵器、鎌倉時代土師器) 2. 出土遺物2 (土師器皿) |
| 図版41 | 遺物 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 出土遺物3 (土師器) 2. 出土遺物4 (焼締陶器) |

図版42	遺物	1. 出土遺物5 (青磁、白磁) 2. 出土遺物6 (唐津) 3. 出土遺物7 (瀬戸) 4. 出土遺物8 (染付・表裏)
図版43	遺物	1. 出土遺物9 (施釉陶器) 2. 出土遺物10 (江戸時代後半)
図版44	遺物	1. 出土遺物11 (土製品) 2. 出土遺物12 (瓦質土器) 3. 出土遺物13 (染付) 4. 出土遺物14 (染付) 5. 出土遺物15 (銭貨) 6. 出土遺物16 (道具瓦)
図版45	遺物	1. 出土遺物17 (軒丸・軒棧瓦、道具瓦) 2. 出土遺物18 (軒平瓦)
図版46	遺物	1. 出土遺物19 (道具瓦) 2. 出土遺物20 (丸瓦・表裏)
図版47	遺物	1. 出土遺物21 (金属製品) 2. 出土遺物22 (石製品)
付図	遺構	調査区平面図 (1 : 150)

挿図目次

図1	調査地位置図 (1 : 2,500).....	1
図2	調査経過写真	2
図3	調査区地区割り図 (1 : 600)	4
図4	調査地周辺図 (1 : 20,000)	7
図5	天明八年「伏見御城郭并屋敷取之絵図」(京都市歴史資料館蔵) 調査地周辺部分	9
図6	既往調査位置図 (1 : 5,000).....	10
図7	柱状図 (1 : 100)	14
図8	郭復元図 (1 : 600)	15
図9	伏見城期平面図 (1 : 300)	19
図10	郭E・I間切岸状遺構 上位造成土内粘土塊検出状況 (北東から).....	23
図11	断割り後平面図 (1 : 600)	25
図12	廃城後平面図 (1 : 300)	27
図13	2区北西部東西セクション・南壁土層断面図 (1 : 100)	32
図14	金箔瓦 (102~104) 蛍光X線分析結果	41
図15	環状不明品 (114)、鉄砲玉 (107・108) 蛍光X線分析結果	42

図16	調査地周辺旧地形推定図（1：5,000）	43
図17	調査地周辺地形分類図（1：10,000）	44
図18	調査地周辺地質柱状図	45
図19	島津屋敷地推定復元図（1：2,000）	48
図20	伏見地割図（1：10,000）	51

表目次

表1	既往調査一覧表	11
表2	遺構概要表	13
表3	遺物概要表	34
表4	周辺調査地の地山標高	46
表5	伏見城関連年表	50
表6	遺物観察表	54

第 I 章 調査の経緯

1 調査に至る経緯（図1）

京都市伏見区桃山町島津76他に株式会社アールライフによる宅地造成が計画された。当該地は伏見城跡に位置し、絵図に「嶋津右馬頭」と記載されることから、初代佐土原藩主である島津以久の屋敷地跡に比定される。開発に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）により試掘調査が実施され、伏見城期の造成土や遺構が確認されたため発掘調査が指導された。調査は株式会社アクセス都市設計から株式会社文化財サービスに委託された。調査面積は当初2,454.0㎡であったが、調査の進展に伴い協議の上調査区を拡張した結果、最終的には2,892.1㎡となった。

2 調査の経過（図2）

調査は令和4年11月24日から開始し、まず敷地内の環境整備及び仮設作業を行った。それと同時に調査区の設定を行い、文化財保護課の検査を受けた。敷地内に残土仮置き場を確保するため、調査区を南北に2分し南側を1区、北側を2区とし、1区から調査を開始した。

1区は同年12月5日から重機により表土（第1層）及び近代盛土（第2層）を掘削し、以後は人力による調査を行った。調査地は東西で約5mの比高差のある斜面地であるが、ひな壇状の平坦地を造成し、各平坦面に柱列や土坑などの遺構が配される状況が確認された。検出した遺構の掘り下げ、記録作業を行った後に、重機による断割り調査を実施し、断面観察及び下層遺構の確認を行っ

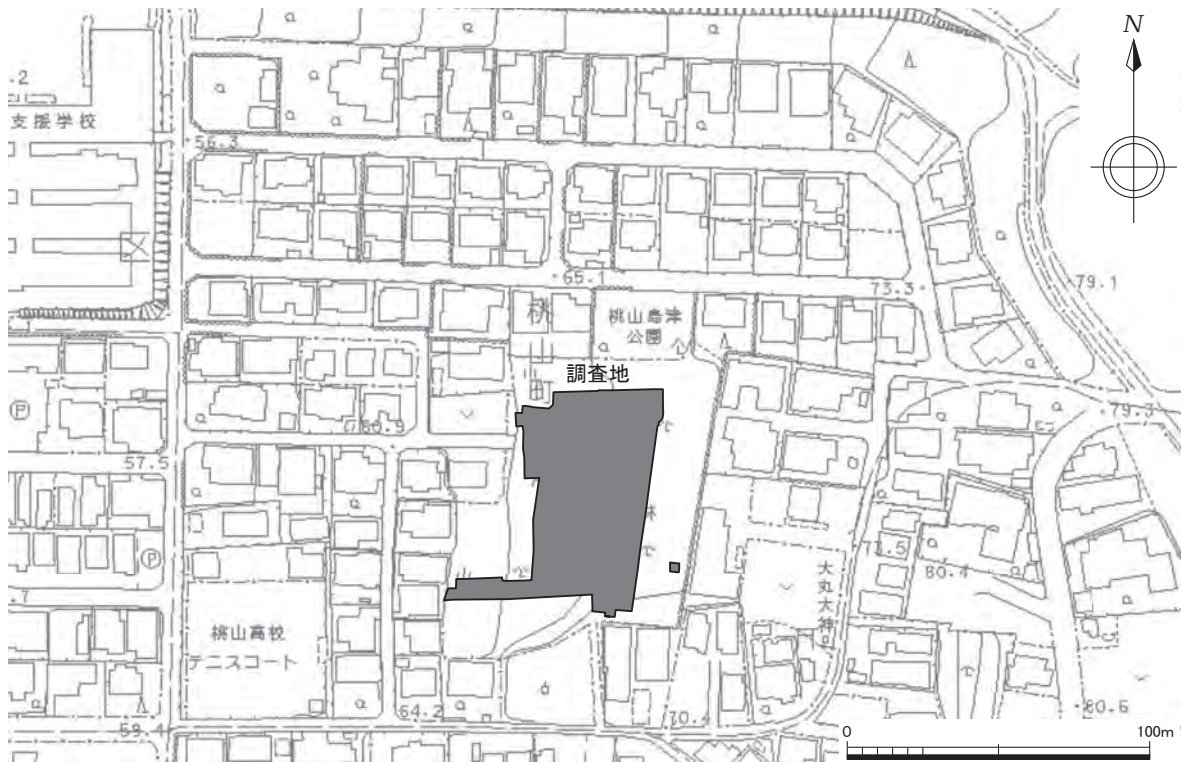


図1 調査地位置図（1：2,500）



1. 調査前（北東から）



2. 1区遺構掘削作業（北から）



3. 1区断割り作業（西から）



4. 2区表土掘削作業（西から）



5. 2区調査状況（北から）



6. 2区東西断割り壁面精査（北西から）



7. 2区埋戻し作業（北から）



8. 調査終了後の状況（北東から）

図2 調査経過写真

た。その結果、1区では地山上面が遺構面である地区が大半で、伏見城造成土は主に北側で0.3～0.5mほどの厚さで堆積していた。

1区での作業が終了後、令和5年3月6日より重機により1区の埋め戻しと2区の掘削を開始した。2区も1区と同様に表土（第1層）及び近代盛土（第2層）を重機により掘削し、遺構検出及び遺構掘削は人力で行った。1区と同様にひな壇状の平坦地を確認したが、西半で確認された切岸状に構築された段差や郭状の区画をより明確にするため、調査区の西側を拡張し補足調査を実施した。また、1区で検出した塀とみられる柱列が敷地東端の段差際まで延びているかの確認をするため、段差際の柱列延長位置に3m四方のトレンチを設定し、このトレンチを3区として調査を行った。平面調査終了後、重機により断割り作業を行い、断面観察及び下層遺構の確認を行った。断割りは地山上面まで掘り下げる予定であったが、伏見城造成に伴う土層が厚く確認されたために、安全面から現地盤上面から5m下位の造成土2段目下部までの掘削に止めた。断割り調査の結果、本調査地では、旧地形の谷埋めを行う大規模な造成工事が行われたことが確認された。

すべての記録作業終了後、重機により埋め戻しを行った。断割りを行った箇所は、沈下を防止するため埋土の改良を行った。埋戻しと並行して資機材の搬出を行い、6月12日に現地作業を終了した。

調査時には写真撮影及び図面作成による記録作業を実施した。写真撮影機材は、35mmフルサイズ一眼レフデジタルカメラ、35mm白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成は手測りによる実測と写真測量を併用した。

現地調査においては、適宜、文化財保護課の検査および指導を受けた。また、令和5年5月15日に文化財保護課により設立された本調査の検証審査員である山田邦和氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。また、5月18日に大阪大学教職員及び学生約70名、5月25日に京都女子大学学生約60名による現地見学を受け入れた。

3 測量基準点の設置と地区割り（図3）

測量基準点は、VRS測量により調査地敷地内にT.1、T.2を設置し、その2点からトータルステーションによりT.3～T.6を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

T.1	X = -117,759.777 m	Y = -20,794.473 m	H = 65.162 m
T.2	X = -117,763.868 m	Y = -20,760.864 m	H = 67.567 m
T.3	X = -117,804.050 m	Y = -20,771.290 m	H = 68.060 m
T.4	X = -117,799.511 m	Y = -20,791.598 m	H = 65.624 m
T.5	X = -117,800.651 m	Y = -20,815.582 m	H = 63.001 m
T.6	X = -117,734.511 m	Y = -20,795.611 m	H = 65.378 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して4mグリッドを設定した。Y軸にアラビア数字を西から東に、X軸にアルファベットを北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。地区名は、グリッドの北西角を基準とした。

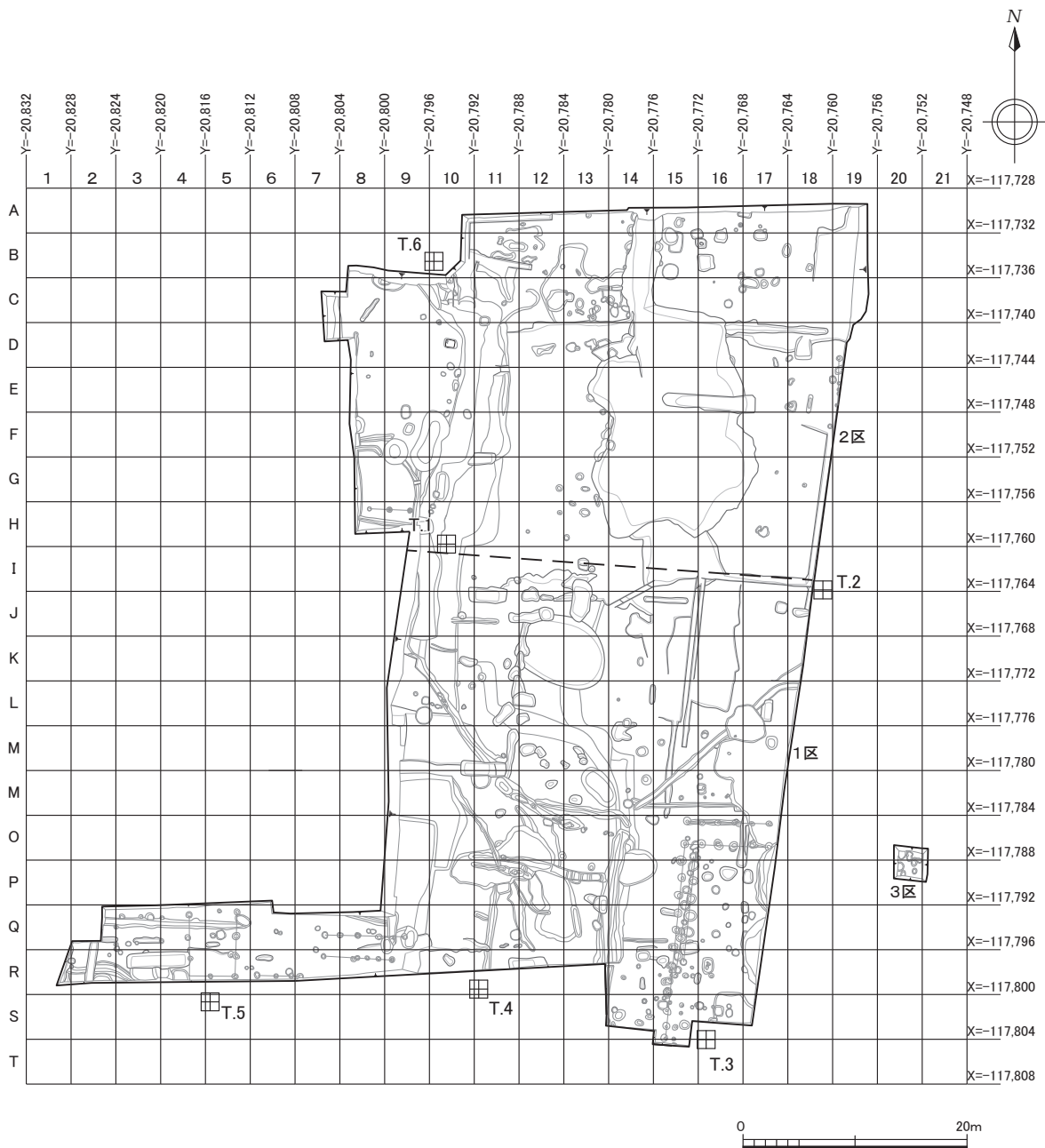


図3 調査区地区割り図 (1 : 600)

4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元を行った。また、出土した鉄砲玉・金箔瓦・金属製品の理科学分析には、奈良大学文学部文化財学科魚島純一教授の協力を得た。報告書の執筆は調査を担当した大西・和氣、編集作業は中西佳奈江・吉川絵里が担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。(大西)

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境

調査地が所在する桃山丘陵は、京都盆地と山科盆地の間に細長く南北に延びる比叡山地から派生する丘陵の南端に位置する。桃山丘陵の西縁を花折断層帯南部の桃山断層、東縁を花山・勧修寺断層、南縁を宇治川沿いの宇治川断層が確認され、その全長は南北約8km、東西約2kmである。桃山断層は東山山地隆起に伴う、東山山地西縁の逆断層として知られる断層であり、丘陵の最高所は清水山（標高242.3m）である。本調査地に位置する木幡山周辺は豊臣期における大規模な地形改変が著しく、本来の旧地形の詳細は不明である。調査地の標高は66m余りであり、伏見城下町の中央部を流れる新高瀬川との比高差は約50mである。全体の地形は木幡山の標高99mを最高所とし、西に傾斜した地形に位置する。この丘陵の西側には木津川や桂川、調査地南東で宇治川が流れ、本調査地の整地層で確認された砂層や、整地層に含まれる小礫などの供給を担っていた可能性が想定できる。

桃山丘陵の地質は、日本列島の成立の主な地質帯として知られる、美濃・丹波帯に含まれる中生代の海洋堆積層からなる砂岩・泥岩・珪質泥岩・チャートなどで構成されるが、こうした河川堆積物とその内丹波帯Ⅰ型地層群は、その両側には新生代更新世の大阪層群でも最も新しい深草層上部が堆積している。調査地の周辺の地形は、下部では丘陵上の堆積層である深草層に南西・西から深く入り込んだ、更新世高位段丘堆積物が堆積し、高位段丘や埋谷段傾斜地として分類された谷状地の存在が確認される。本調査地断割り部でその時期に属すると想定される埋谷の谷頭が確認でき、秀吉の造成以前の地形の状況を類推できる。

詳細については、本報告書の附章である自然科学分析にまとめた。

2 歴史的環境

本調査地は、桃山丘陵の西麓に立地する。調査地の現在の標高はおよそ66mで、東から西に向かって段を有しながら傾斜する。桃山丘陵の南側端には指月と呼ばれる丘陵端が存在し、さらに南は宇治川に臨む。西は国道24号線を越えると、伏見城下町造営に伴い整備された京町通・新町通・竹中町通などの南北街路と、それらに直交する大手筋通・油掛通・丹波橋通などの東西街路により長方形の街区が形成される。こうした地形は、現在の伏見地域が伏見城期に大規模な造成がおこなわれ、現在の基盤が形作られたことが確認される。

室町時代以前

調査地より南西約600mに位置する御香宮神社付近には、縄文土器の散布地である金森出雲遺跡がある。調査地から南約1kmに位置する泰長老遺跡では貝層が確認されているが、その詳細については不明である。

調査地より南西約2kmに位置する桃陵遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代中期後半の奉行所前古墳（円墳）が検出され、埴輪片が出土し、伏見城下町造成以前の沖積地の自然堤防

上に弥生の集落や古墳群が存在していたことが想定される。

丘陵部に転じると調査地の北西約280mに古墳時代後期の桃山古墳群（永井久太郎古墳）が存在する。2015年の調査では7世紀代の須恵器が出土する。本調査においても、整地土層中から古墳時代の遺物の出土があり、これは伏見城造成時に混入したものと想定される。

伏見地区における古墳時代の状況の詳細は不明であるが、日本書紀 雄略天皇17年条に贅土師部の記載記事『十七年春三月丁丑朔戊寅、詔土師連等「使進應盛朝夕御膳清器者」於是、土師連祖吾筥、仍進攝津國來狹々村・山背國內村俯見村・伊勢國藤形村・及丹波・但馬・因幡私民部、名曰贅土師部』と当地に土師部の設置記事があり、この地に古墳時代の拠点が存在することを想定できる。

また、創建年代は不明であるが、白鳳時代から奈良時代にかけて、現在の御香宮神社の場所に御香宮廃寺が建てられたとされる。寺院の詳細は不明であるが、6世紀代から活躍する秦氏の本貫地が深草里とされるように、この地一帯が古代秦氏と深い関係を有することが知られる。

平安時代には指月の地が巨椋池に臨む名勝として知られるようになる。藤原頼通の子、橘俊綱が山荘として造営した伏見荘が知られる。この指月の丘は「宵の天空に光る月」「宇治川の川面に映る月」「巨椋池に揺れる月」「盃に浮かぶ月」の4つの月を眺めることができる景勝地として、橘俊綱が造営したとされる。

俊綱没後、この伏見山荘は白河天皇に寄進され、後に後白河上皇は、伏見殿を整備し船津御所、伏見離宮と称される。以後、鎌倉・室町時代を通して皇族の所領となる。南北朝期には北朝持明院統の所領となるが、室町時代から戦国時代にかけては指月を含め、伏見の地は戦乱に巻き込まれるようになる。

安土桃山時代以降

安土桃山時代から江戸時代初期の伏見の地は豊臣秀吉の指月伏見城築城、木幡山伏見城築城と城下町造営により、この地は大きくその姿を変える。

この間の伏見城の各段階は、4段階に区分される。

第1期 指月屋敷：天正二十年（1592）～文禄三年（1594）

文禄元年（1592）、秀吉は関白の座を甥の秀次に譲り、伏見「指月の岡」に隠居のための屋敷を構える時期。

第2期 指月伏見城：文禄三年（1594）～文禄五年（1596）

大坂で豊臣秀頼が誕生し、秀吉は隠居屋敷を本格的な城郭に改める（指月伏見城）。

指月伏見城は文禄三年（1594）に完成し、秀吉はここで政務を執るようになる。この時、宇治川を巨椋池から分離し城の外堀とし、巨椋池には堤（槇島堤、藪場堤）を築き、大和街道を再整備した。城下には宇治川と濠川の合流点に港を作り大坂に通じるように整備するなど湾港整備を実施し、聚楽第周辺に居住していた、家臣の住む屋敷を移転させるなど、伏見の地は指月伏見城を中心に新たな軍事・政治的な都市となった。

文禄四年（1595）、秀次との関係が悪化した秀吉は、秀次から関白職を剥奪し自刃させると、秀次

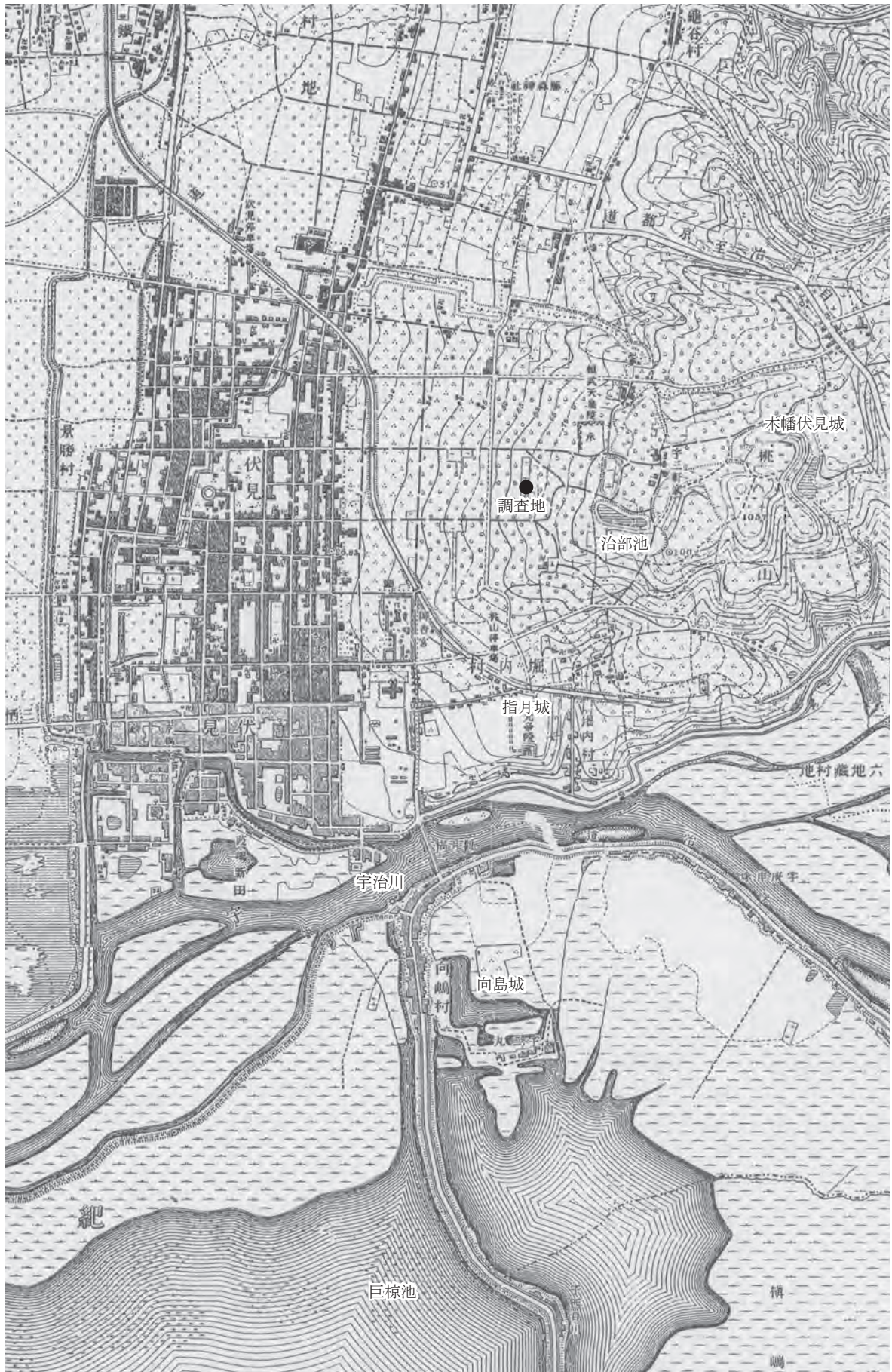


図4 調査地周辺図（「仮製二万分一地形図」11伏見、12淀
（陸軍参謀本部陸地測量部 明治22年）を合成し加筆 1：20,000）

の居城である聚楽第の破却を命じた。聚楽第の建築資材は指月伏見城に再利用されたといわれる。

第3期 豊臣期木幡山伏見城：文禄五年（1596）～慶長五年（1600）

文禄五年（1596）閏7月13日に起こった地震（慶長伏見地震）により、指月伏見城の天守は倒壊し、門や御殿も大破したとされる。この時女房など300人余りが圧死したとされる。

倒壊した指月伏見城の北東にある木幡山に城の再建を命じた。7月14日に縄張りを実施し、15日には木幡山伏見城の作事が開始され、10月10日には本丸が完成するなど、急遽城の整備が実施された。慶長二年（1597）5月に天守殿舎などの整備が完了し、秀吉は慶長三年（1598）に死去するまで木幡山伏見城で晩年を過ごした。

この木幡山伏見城は、秀吉亡き後は徳川家康が留守居役として入城するなど、豊臣期晩年の政治の拠点として整備が進む。

慶長五年（1600）、関ヶ原の戦いの前哨戦の舞台となり、家康の家臣である鳥居元忠らが籠城していたが、西軍の攻撃を受けて落城した。

第4期 徳川期木幡山伏見城：慶長五年（1600）～元和九年（1623）

関ヶ原の戦いに勝利した家康は、翌年から伏見城の再建に着手した。慶長八年（1603）に家康は伏見城で征夷大將軍の宣下を受け、以後元和九年（1623）に3代將軍家光の將軍宣下まで伏見城が武家政権の政治の場としての機能を有していた。

元和五年（1619）に伏見城の廢城が決定され、元和九年に家光の將軍宣下が伏見城で行われた後、伏見城は破却され、天守は二条城に移築され、二条城の天守は淀城に移築された。また、伏見城で用いられた石垣石材は淀城で再利用された。

御香宮（京都市伏見区）表門、豊国神社（京都市東山区）唐門、福山城（広島県福山市）伏見櫓など、伏見城にあった建築物を移築したとされる遺構が、京都をはじめ、各地に伝わる。廢城後、伏見城周辺の建物は大きく姿を変えた。

江戸時代から近代

伏見城や大名屋敷があった土地は、桃樹が植えられ、周囲一帯は「桃山」と称されるようになった。破却後伏見城一帯は幕府領となり、寛文六年（1666）、水野忠貞が伏見奉行に任命され、伏見と周辺の村の支配、木津川・宇治川を往来する船舶の取り締まり、西国大名及び家臣の往来の監視等を担った。それとともに、伏見城周囲の管理が伏見奉行の役割となる。当地の状況は「山城国伏見堀内村検地帳写」に詳しく、広く畑地が広がっていたことが確認される。

慶応四年（1868）、鳥羽・伏見の戦いでは伏見奉行所に旧幕府軍が、薩摩・長州軍が御香宮神社付近に布陣し、伏見の町は激戦地となった。

3 既往の調査（図6）

伏見城下の調査は、宇治川沿いの指月伏見城を中心とした南半地点と、木幡山に築かれた木幡山伏見城から伏見城下町北半地点の調査が存在する。本報告では北半を中心として、調査を見ていく。後節で見るように伏見城下町の下部には大規模な整地土により、大きく地形を改変され、各城

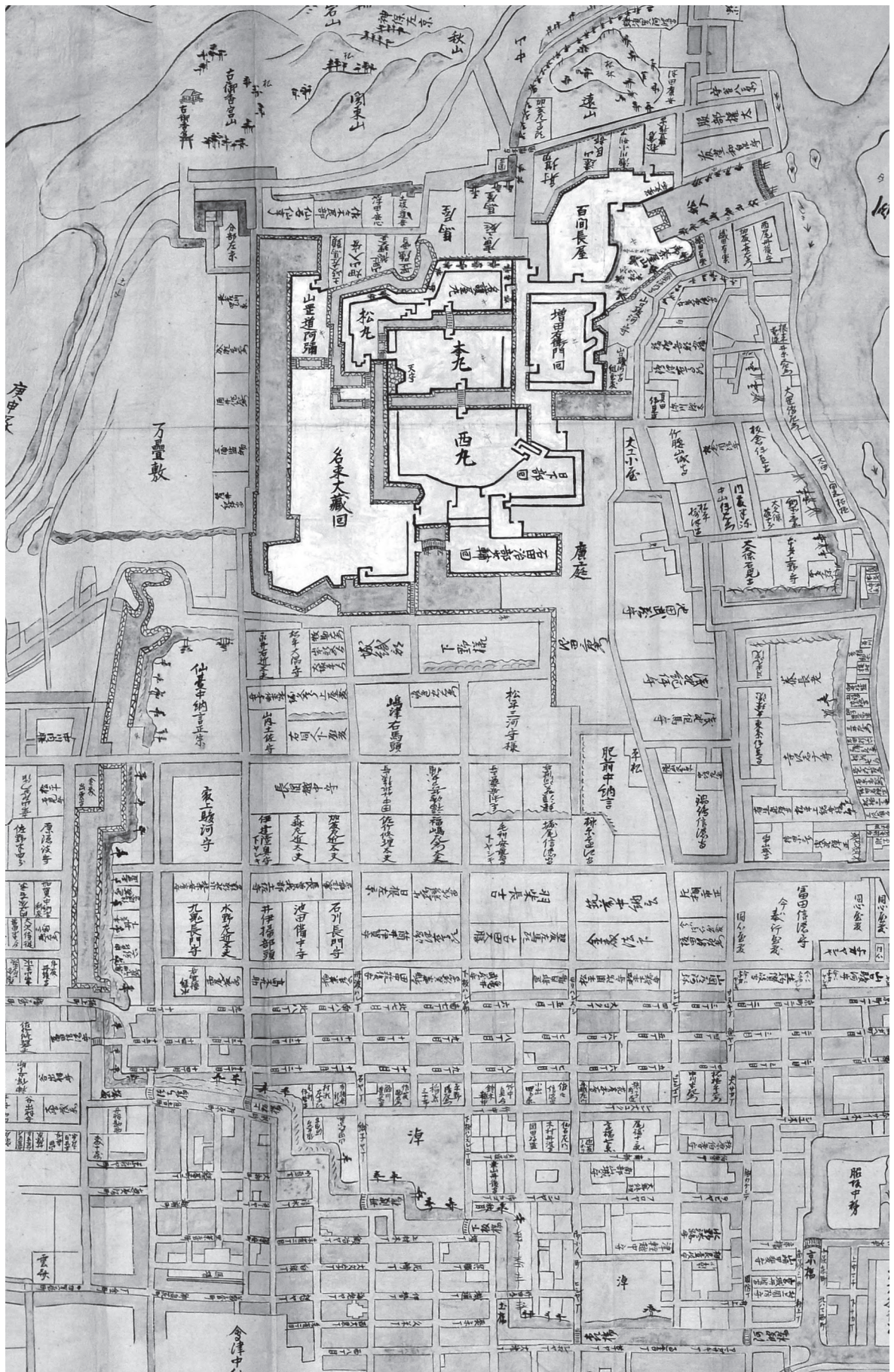


図5 天明八年「伏見御城郭并屋敷取之絵図」(京都市歴史資料館蔵) 調査地周辺部分

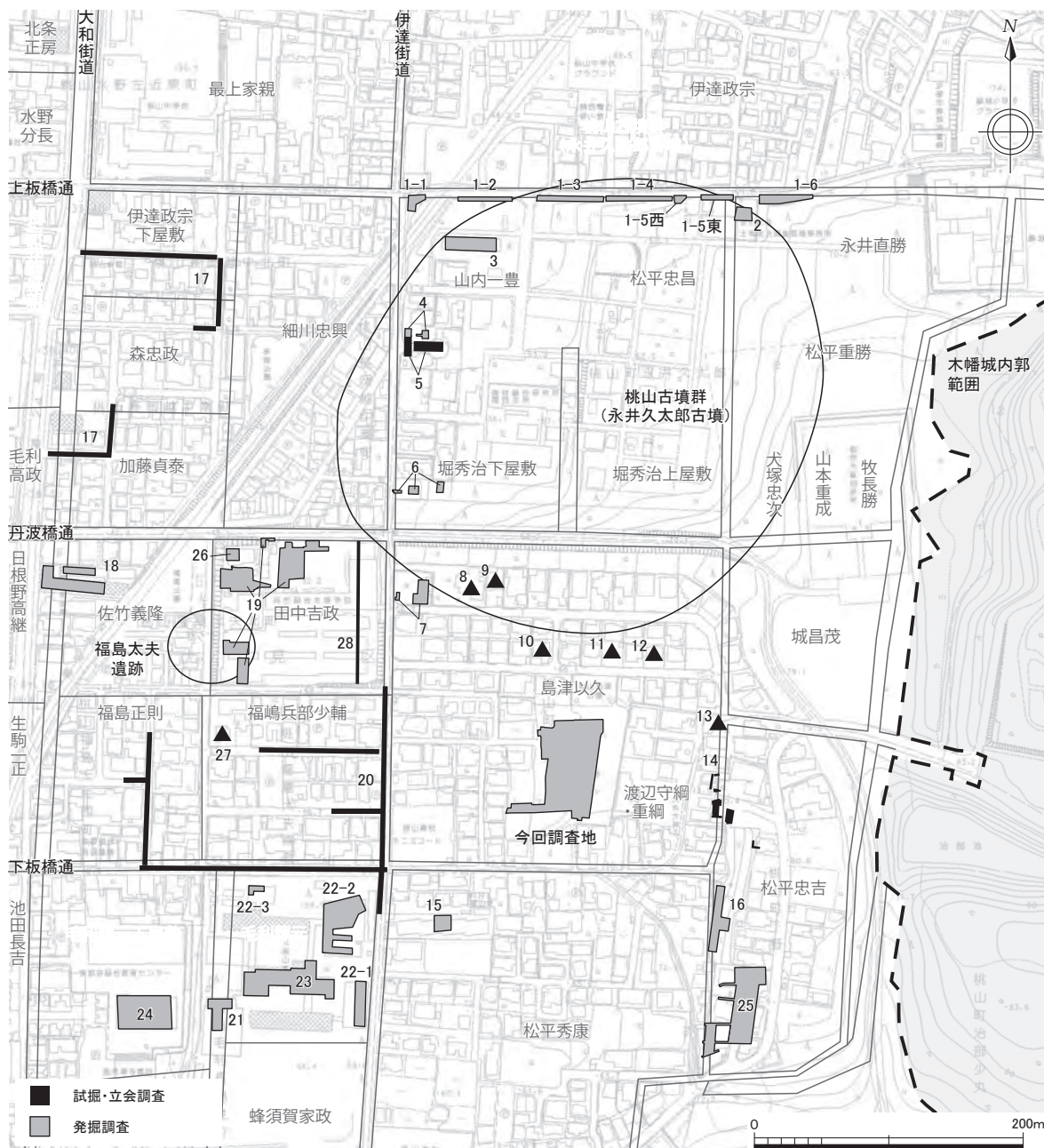


図6 既往調査位置図（1：5,000）

下の区画がなされたことが調査で確認されている。

整地については以前から指摘されており、比較的まとまった調査としては、毛利安芸守屋敷と毛利下屋敷に推定される調査21・22・23（桃山毛利長門東町）、調査24（桃山毛利長門西町）がある。調査21・22・23と近接した調査区で3度の調査が実施され、礎石建物・石組み溝・柵列・築地・井戸などや金箔瓦が確認された。上板橋通に面する調査2で検出された建物跡SB01は北から東へ5°、SB02は東へ7°の傾きを持つ。調査8では地山層が東から西へ傾斜し、西側では最大2mの整地層が確認された。上層のSB02の傾きは東へ1°であることが確認され、豊臣期と徳川期の建物配置の方位が異なり、伏見城下町は2時期に分かれ、上下層の整地がなされていることが確認されている。

また調査15(桃山町三河)では礎石建物・掘立柱建物・柵列・井戸が検出されている。調査区西端で確認された建物4は、小さな礎石を用い、柱間隔も狭いが、主屋と附属建物が明確にわかる。整地層が同様に2面あり、下層の建物4は西へ4°振れ、上層の建物1は、ほぼ真北方向である。調査区の西側だけに整地層が残存し、東半部は削平されている。この東半部では数条の柵列が見られ、西へ振れるものと真北方向の柵列がある。概報では下層の整地層を豊臣期、上層の整地層を徳川期であると指摘された。

このように伏見城下町は、豊臣期の木幡山伏見城の造営に伴い整備された整地面と、関ヶ原合戦以降の徳川期に焼失した城下を整備した2時期の整地層が確認されている。

こうした整地工事の実態は、主に伊達街道周辺での調査成果をもとに、その整地の工法が確認されてきた。本調査の西北に位置する呉竹総合支援学校構内(桃山町福島太夫)では、昭和25年(1950)に京都学芸大学(現京都教育大学)附属中学校の新築工事時に「伊達街道西方約二十メートルの地中に西面の高さ約1.5m、延長約100mの石垣を発見し、その裏込栗石中から60枚の金瓦を発見した」と報告されている(調査28)。また、1976年には呉竹養護学校(当時)の増築・運動場整地工事の事前調査が伏見城研究会・龍谷大学考古学研究会により行われた(調査26)。この調査では、石垣や整地層が確認された。

2020年(公財)京都市埋蔵文化財研究所が実施した調査19では、盛土による大規模な造成が確認され、伏見城下造成段階に、本調査区と同様に斜め堆積による大規模な造成が実施されている。造成土最下部には、赤褐色粘土による堤状の土手を構築し、複数の土質による整地がなされていることが確認された。こうした大規模な造成範囲は、奥井智子氏が指摘するように伊達街道より西側部分で広く造成がなされた状況と考えられていた。

また、本調査地が位置する島津屋敷地内では、これまでに1件の発掘調査(調査7)、3件の試掘調査(調査8・9・14)、4件の分布調査(調査10～13)が行われている。屋敷地北西部で行われた調査7では、伊達街道に面する石垣及び敷地内ひな壇際に設けられた石垣の抜取り跡が確認され、屋敷地内に比高差1.8mのひな壇状平坦地が造成される事が確認された。敷地南東部で行われた調査14では南北石垣や焼土層が確認されている。(和氣)

表1 既往調査一覧表

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	伏見城跡・桃山古墳群	発掘	伏見城期の伊達街道の交差点から東に延びる、上板橋通に伴う路面・石組溝・犬走・石垣を検出。	「伏見城跡」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2000年
2	伏見城跡・桃山古墳群	発掘	伏見城期の礎石建物・井戸・溝・柱穴・土坑を検出。古墳時代の須恵器、円筒・形象埴輪片出土。	「伏見城跡」『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1989年
3	伏見城跡・桃山古墳群	発掘	古墳時代の墳丘土、伏見城に伴う造成土、伏見城期の井戸・瓦溜、江戸時代の建物・土坑墓を検出。	「伏見城跡3」『昭和53年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011年
4	伏見城跡・桃山古墳群	発掘	伏見城に伴う造成土、伏見城期の伊達街道に伴う石垣・石組溝、土坑・柱穴を検出。	『京都市内遺跡発掘調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年
5	伏見城跡・桃山古墳群	試掘	伏見城期の伊達街道に伴う路面・石組溝・犬走・築地遺構、火災処理後の整地層下にて礎石建物を検出。	「伏見城跡1」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1993年
6	伏見城跡・桃山古墳群	発掘	伏見城期の伊達街道に伴う石垣・石組溝・犬走、柱穴・整地土、江戸時代から近代の土坑・整地土を検出。	「伏見城跡・桃山古墳群」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 2020年

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
7	伏見城跡・桃山古墳群	発掘	伏見城期の伊達街道に伴う石垣・石垣抜取跡、堀・礎石・土坑・整地土を検出。	『伏見城跡・桃山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-10 埋文研 2016年
8	伏見城跡・桃山古墳群	試掘	GL-0.45～-1.5mにて伏見城に伴う造成土、その直下1.7mにて地山層を検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年
9	伏見城跡・桃山古墳群	試掘	GL-0.25mにて伏見城に伴う造成土を検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年
10	伏見城跡	分布調査	GL-0.69mにてオリープ褐色粗砂混粘土質シルト層、GL-1.32mにて暗灰黄色粗砂混粘土質シルト層、GL-1.94～-2.16mにて黄褐色粗砂混シルトと褐色シルトブロックの混合層を検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和3年度』京都市文化市民局 2022年
11	伏見城跡	分布調査	GL-0.25mにて黄褐色砂礫～礫混砂質シルト層を検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和3年度』京都市文化市民局 2022年
12	伏見城跡	分布調査	GL-0.25mにて灰黄褐色泥砂層、GL-0.48～-1.05mにて明褐色泥砂の地山層を検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和3年度』京都市文化市民局 2022年
13	伏見城跡	分布調査	GL-0.67～-0.82mにて明黄褐色粗砂層を検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和3年度』京都市文化市民局 2022年
14	伏見城跡	試掘	伏見城期の南北石垣、焼土層を検出。	『伏見城跡 No.68』『京都市内遺跡試掘調査概報 平成7年度』京都市文化市民局 1996年
15	伏見城跡	発掘	伏見城期の礎石建物・土坑・柱穴・火災処理整地層、江戸時代前期以降の南北溝・柱穴・土坑を検出。	『伏見城跡2』『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011年
16	伏見城跡	発掘	伏見城期の石垣・堀・路面・火災処理整地層、江戸時代前期の石垣基礎跡・石組溝・溝を検出。	『伏見城跡 京都市伏見区桃山町下野 27-1 の発掘調査』株式会社四門 2018年
17	伏見城跡	立会	伏見城期の武家屋敷に伴う区画溝・肥溜まりを検出。	『伏見城跡(1)』『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1985年
18	伏見城跡	発掘	伏見城期の大和街道に伴う石組溝・門跡・石垣基礎跡、柵・土坑を検出。佐竹氏の家紋である五本骨扇に月丸文軒丸瓦出土。	『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-10 埋文研 2008年
19	伏見城跡・福島太夫遺跡	発掘	飛鳥時代～奈良時代の土坑、伏見城造成に伴う土手状高まり・溝・造成土、伏見城期の堀・土坑・ピット・溝、江戸時代中期～後期の溝・ピット・土坑を検出。造成土に関して、基盤層を切土・盛土することにより平坦面を形成する様子が観察された。	『伏見城跡・福島太夫遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021-5 埋文研 2021年
20	伏見城跡	立会	伏見城期の武家屋敷に伴う石組溝・区画溝を検出。	『伏見城跡(2)』『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1985年
21	伏見城跡	発掘	伏見城期の瓦溜を検出。	『伏見城跡発掘調査概要』『埋蔵文化財発掘調査概報』1980-1 京都府教育委員会 1980年
22	伏見城跡	発掘	22-1区において伏見城期の伊達街道に伴う石組溝、22-2区において伏見城期の井戸・土坑を検出。	『伏見城跡発掘調査概要』『京都府遺跡調査概報 第8冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983年
23	伏見城跡	発掘	伏見城に伴う造成土、伏見城期の礎石建物・柵列・土坑・柱穴・溝・整地層を検出。	『伏見城跡平成5年度発掘調査概要』『京都府遺跡調査概報 第59冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994年
24	伏見城跡	発掘	伏見城期の礎石建物・竈・土坑・溝・井戸・堀・整地層を検出。	『伏見城跡発掘調査概要』『京都府遺跡調査概報 第44冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年
25	伏見城跡	発掘	伏見城期の裏込礫と石垣石材、石組溝の検出。	『器瓦録 其二 伏見城』伏見城研究会 2006年
26	伏見城跡	発掘	東半部では表土直下で地山検出。北西部で北に急角度で傾斜する赤褐色粘土層を確認。北西部ではトレンチ下部から石垣裏込と考えられる栗石を検出。多数の瓦が出土。	『伏見城発掘調査現地説明会資料』伏見城研究会・龍谷大学考古学研究会編 1976年(森島康雄「考古学からみた伏見城・城下町」『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』日本史研究会 2001年)
27	伏見城跡	立会	傾斜地を盛土により整地する状況を確認。表土下2.1mで伏見城期の瓦を含む層を検出。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化市民局・埋文研 1982年
28	伏見城跡	不時発見	西に面を持つ南北石垣を検出。裏込栗石から金箔瓦出土。	『伏見桃山の文化史』加藤次郎 1953年

埋文研→公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序（図7、図版2～8）

基本層序は上位から第1層現代土、第2層近代整地土、第3層近世整地土、第4層伏見城造成土で、第4層以下は地山となる。

第1層 暗褐色泥砂による国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所による実験林整備時の客土である。層厚0.2～0.5mで調査区全域に分布する。

第2層 褐色・暗褐色泥砂による近代整地土である。層厚0.2m前後で調査区の広範囲に分布するが、調査区南部西半（郭F・G）では確認されない。

第3層 暗灰色泥砂やにぶい黄褐色砂泥を主体とする層で、伏見城廃城後の整地層であり、主に近世後半以降の整地土である。後述するひな壇の段差を埋めるため、調査区西部の下位ひな壇部に堆積する整地737なども、本層に該当する。一方、上位ひな壇部では窪地に部分的に確認されるのみである。

第4層 伏見城造成に伴う整地・造成土に関する層位である。整地土は褐色泥砂の第4 a層、造成土は旧地形の谷を埋める第4 c層（第1段階造成土）とひな壇を造成するための第4 b層（第2段階造成土）に区分する。第4 a層は褐色・黄褐色細砂による整地層で、層厚0.1～0.2m。後世の削平により消失している箇所が多く、上位ひな壇北半部（郭B～E）、下位ひな壇南部（郭G・H）に残る。造成土である第4 b・4 c層についての詳細は後述するが、第4 b層は調査区の北側約2/3程度、第4 c層は調査区北半部で確認される。（大西）

2 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は315を数える。遺構の時期は伏見城期と廃城後に区分され、伏見城期以前の遺構は検出していない。伏見城期では堀や建物などを構成する柱穴が中心で、土坑が少数存在する。廃城後では江戸時代後半に属するものが大半で、溝や土坑が中心となる。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
伏見城期	郭、堀 110、掘立柱建物 650、柱列 111・112・113・651・652・653・654・810・811、土坑 14・28・610・784、ピット 19・89・90・91、造成土	
伏見城廃城後	土坑 10・11・17・404・431・738・776・777・779、溝群	

（1）郭の構成（図8）

本調査地では、東端で標高68.4m、西端で標高62.0mの傾斜面で個々の遺構が確認された。確認された遺構は、0.5m前後のひな壇状の高まり上に所在するものもあれば、郭状の区画内に含まれるものも存在する。これらの遺構の位置関係を把握するため、屋敷地内に構築されたとみられる郭を復元する。

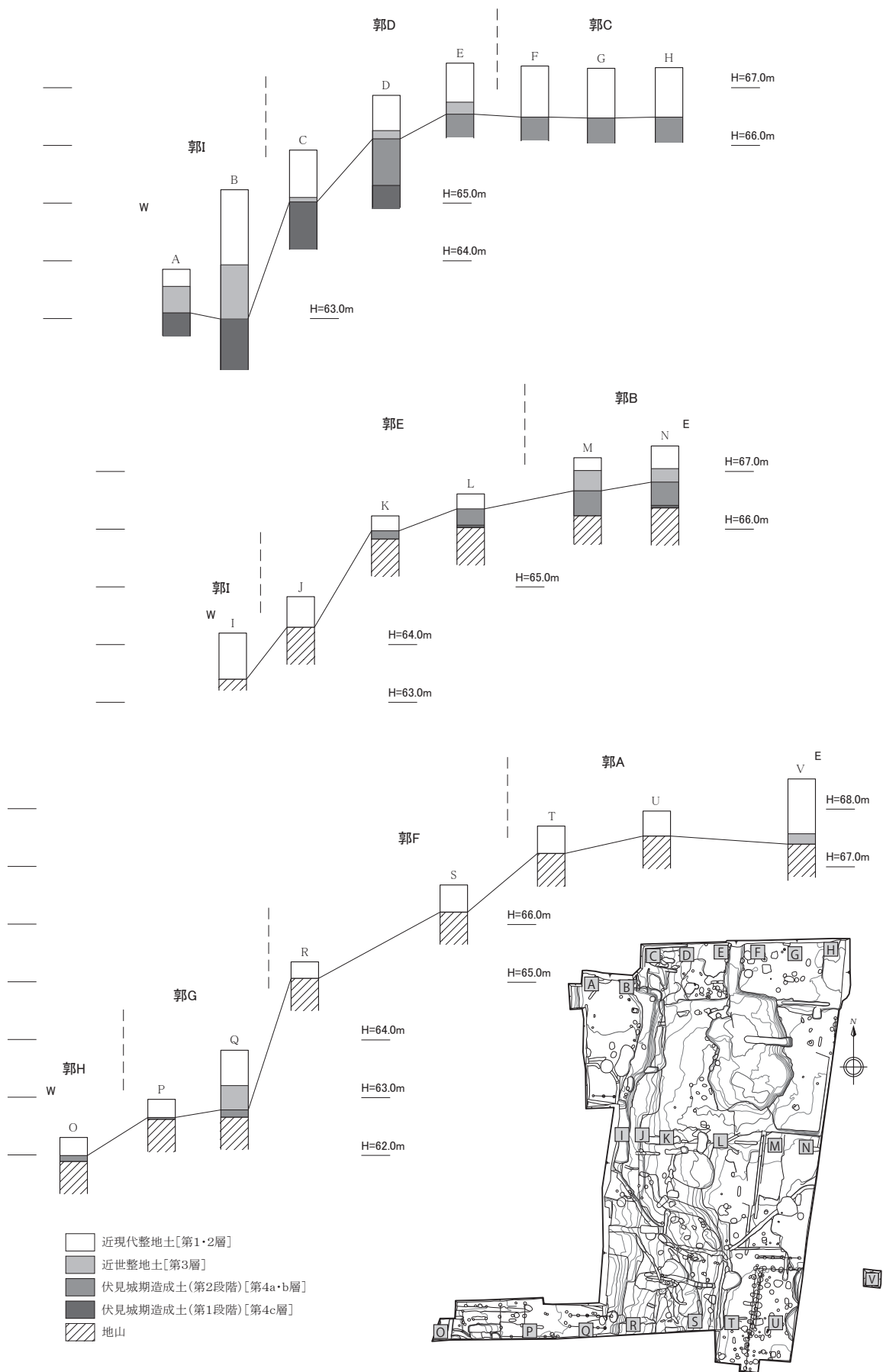


図7 柱状図 (1 : 100)

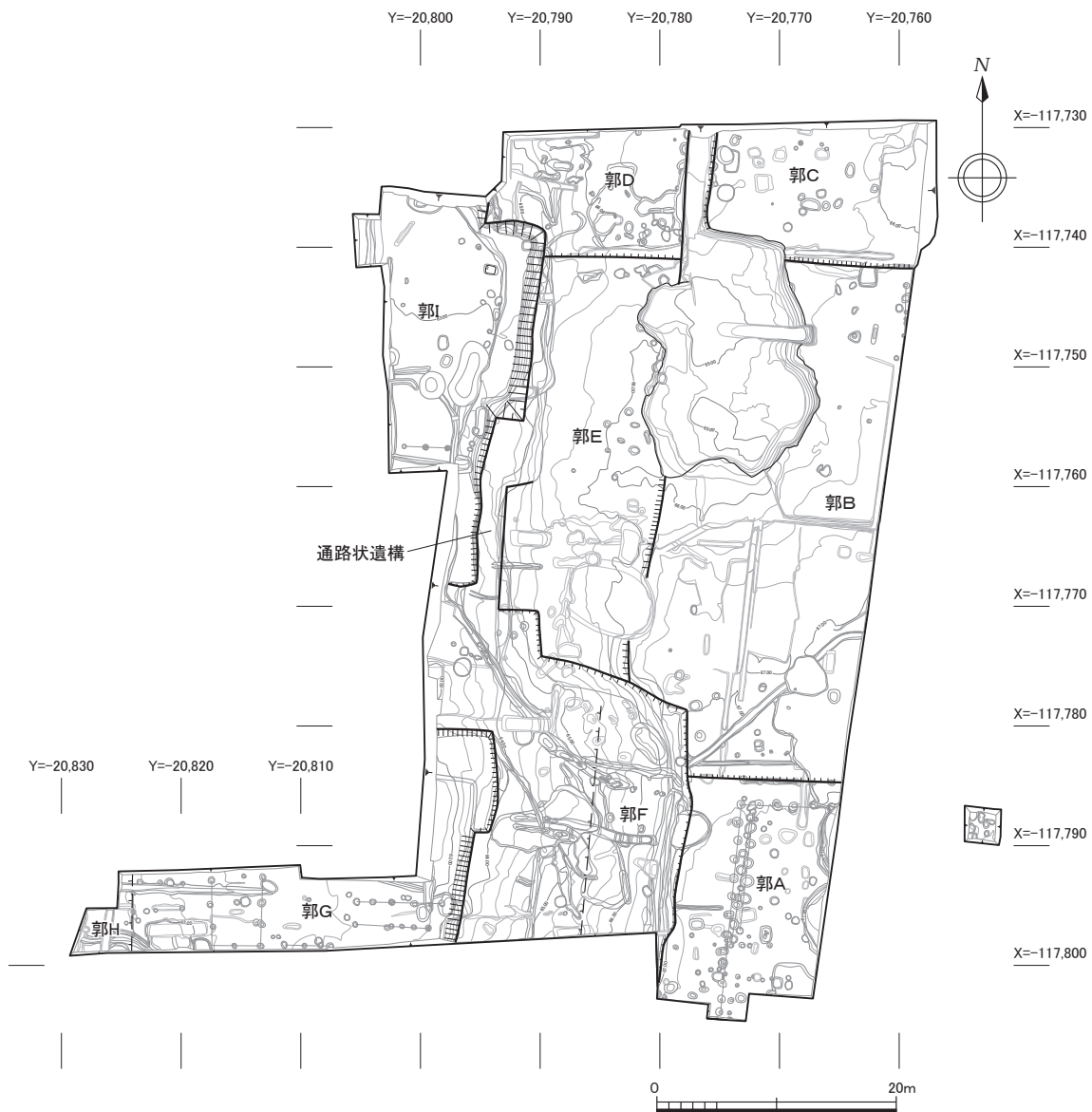


図8 郭復元図 (1 : 600)

本調査地ではY = -20,792mライン付近で比高差約2mのひな壇が造成される。さらに、各段では比高差1m未満の小段や柵などにより区画され、短冊状の郭を構成する。今回の調査区では、上位ひな壇で6郭(郭A～F)、下位ひな壇で3郭(郭G～I)の郭を復元した。また、郭E・I間には、上下ひな壇間の通路と思われる幅1.8mの南北方向のスロープが設けられる。

郭A

1区南東端に位置する郭である。柱列111により区画された南側に位置し、検出規模は南北20m、東西13mを測る。伏見城期の遺構は堀、柱列2条及び数基の土坑が存在し、他の郭に比べ遺構密度が高い。

郭B

郭Aの北側に位置する郭である。郭Cとの境は攪乱により明確ではないが、攪乱の南北で遺構検出面に約0.3mの比高差があることから、攪乱付近が郭境と考えられる。また、郭北西部には、長

軸20m、短軸14mの平面瓢箪形を呈した攪乱が存在する。郭の検出規模は南北44m、東西18mである。郭の南北で約0.4mの比高差があるが、郭内を区分するような塀や小段などは確認できない。郭の北側に柱列、南側に数基のピットが存在するが、全体的に遺構密度は低い。

郭C

2区北東端に位置する郭である。先述の通り郭Bとの境は溝状に東西方向に走る攪乱により明確ではない。また、調査区北東隅部は攪乱により遺構面が削られている。遺構は土坑を中心に検出しているが、郭西端付近の土坑群は廃城後の江戸時代後半頃に属する。中央付近の土坑群は出土遺物が少なく、時期は判然としない。

郭D

2区北部の郭C・I間に位置する郭である。郭C・Eとの境は攪乱により不明瞭であるが、郭Iとの境は高さ約2mの切岸状段差が設けられる。その段差の平面ラインは一直線ではなく、ほぼ直角に折れ西側に突出する。この突出部には櫓などが存在した可能性もあるが、今回の調査では構造物の明確な痕跡は確認できなかった。郭の西半は西下がり傾斜しており、廃城後に削平を受けた可能性が高い。

郭E

調査区中央付近に位置する。郭Dとの境は攪乱により明確ではないが、南北34.3m、東西12.6mと推定される。平坦面のレベルは東隣の郭Bより約1m低く、南隣の郭Fより約0.5m高い。郭Dとの境界は溝状の攪乱により定かではない。平坦面は緩やかな西下がりであり、西端部で傾斜が急となるが、これは廃城後に削られたものと考えられる。遺構は小規模なピットが郭の中央付近に少数存在するのみで、遺構密度は非常に低い。

郭F

郭Aの西側に位置し、郭Aから約0.5m低い位置にある。検出規模は南北22.5m、東西16.8mである。郭の東西で約2.5mの比高差があり、調査区南壁付近では緩斜面化している。しかし、調査区外南延長部では現況地形に低いひな壇状の段差がみられる。このことから、本来は2・3の小段が形成されていたものと考えられる。溝、土坑、ピットを検出しているが、溝、土坑は廃城後の遺構であり、ピットについても時期は判然としない。

郭G

下位ひな壇南西部の郭である。検出規模は南北17.4m、東西25.4mである。郭Fとは約2mの比高差があり、郭境は切岸状の段差となっている。段差部分に石垣などは設けられておらず、抜取り痕も確認されていない。掘立柱建物、柱列、溝、土坑などを検出しており、他の郭と比べて伏見城期の遺構密度は高い。

郭H

1区南西端に位置する郭である。柱列654以西で地山の高さが約0.2m低くなることから、郭Gと別区画であると想定した。調査区西端で検出したため規模は不明で、伏見城期の遺構も検出されていない。

郭 I

下位ひな壇北側に位置する郭である。郭D・Eとは約2mの高低差があり、郭境は切岸状の段差となる。段差部分に石垣は無く、石の抜取り痕跡なども無い。上位ひな壇との間にある段差の平面ラインは一直線ではなくコの字状に奥まっており、これは横矢掛りを意識したものであろうか。段差際には幅1.8m前後で犬走状の段差を設け、それは平坦面より0.2m程高くなっている。これについては、犬走状の高まりとして構築されたのか、郭の平坦部が削平を受けたことにより結果的に段差際が犬走状に残されたものであるかの判断が難しい。しかし、土坑777や土坑739の向きがほぼ犬走の段差に合うことから、当初からの構造とも考えられる。郭平坦面や切岸状の段差は盛土造成終了後にそれを削平して構築され、平坦面や段差壁面に縞状の造成土堆積状況が露出する。平坦面には化粧土が施された可能性もあるが、今回の調査では化粧土は確認できなかった。また、段差壁面には崩落防止の保護層が施されていた可能性もあるが、調査ではそれも確認できなかった。

通路状遺構

郭E・I間で検出した上下ひな壇間の連絡通路と思われる、緩やかに北に連なるスロープ状の遺構である。南端部には数段の階段状遺構がある。北上がりに傾斜し、幅約1.8m、上下の比高差は約0.7mである。平面形態は喰い違い虎口状に鉤形に折れ、これは屋敷地内の直線的な導線を避けるためと考えられる。

郭G・I間

郭G・I間には南北幅10.8mの平坦面がある。平坦面は郭G・Iの平坦面より約0.2m高く、東で上述の通路状遺構の下端西面に接し、その比高差は0.4mある。このことから、この平坦面は通路状遺構に取り付く別区画であった可能性も考えられる。(大西)

(2) 伏見城期の遺構 (図9)

伏見城期の遺構は、塀、掘立柱建物、柱列、土坑などがある。

[建物・塀・柱列]

塀110 (図版9)

郭Aで検出したL字状の塀である。柱穴22・30～43・68・92・93からなる。南北12間、東西5間を検出した。柱間は1.0～1.5mを測る。塀を構成する柱穴は大半が径0.6m前後の円形を呈し、深さ0.6～0.7mを測る。柱穴32・68には柱穴底部に礎板状の平らな石が据えられていたが、石の上面の高さは一定ではない。柱穴埋土は褐色・黄褐色系の泥砂で、一部の柱穴には炭化物が混じる。柱穴31からは天目茶碗の小片が出土する。

柱列111 (図版10)

塀110の2.1m北側で検出した東西柱列である。柱穴44～49からなる。塀110北面と並行し、柱穴も塀110北面と同間隔で並ぶ。塀110北面との間隔は2.0mである。柱列を構成する柱穴は塀110とほぼ同規模で、径0.6m前後、深さ0.6m前後を測る。調査区東壁断面の観察から柱列111の南北で地山の高さが異なり、地山の低い北側では地山直上に整地層が堆積している状況から、郭A・Bを区

画する塀もしくは柵と考えられる。柱穴44からは瓦の小片が出土する。

柱列112 (図版10)

塀110南北列の東隣で検出した南北柱列である。柱穴56・54・21・53・52・25・51・79からなり、長さ10.8m、柱間1.5m前後を測る。軸線は、正方位から北東-南西方向に8.5°振る。埋土は褐色・黄褐色・暗褐色系の泥砂が中心で、柱穴56・21・52・25・79には炭化物や焼土が含まれる。

柱列113 (図版10)

柱列112と同位置で検出した南北列である。柱穴55・60～63からなり、長さ6.0m、柱間1.5m前後を測る。軸線は正方位から北東-南西方向に6.3°振る。埋土は明褐色・黄褐色系の泥砂である。

柱列112・113は同位置で検出しているが、柱穴の切合い関係から柱列112が新しく、113が古くなる。

建物650 (図版11)

郭Gで検出した掘立柱建物である。南北3間、東西2間検出し、桁行5.7m以上、梁行4.3mを測る。柱間は1.8m程度である。建物北面は調査区外に延びると考えられる。建物を構成する柱穴はいずれも浅く、礎石建ちの可能性もある。

柱列651 (図版12)

郭Gで検出した東西柱列である。柱穴623～627・640からなり、長さ7.1m、柱間は1.0～1.5mを測る。軸線は正方位から北西-南東方向に1.2°振る。柱穴625には礎石と考えられる平坦な東石が残存する。

柱列652 (図版12)

柱列651の南で検出した東西柱列である。柱穴629～632・634からなり、長さ6.1m、柱間は0.9～1.2mを測る。柱穴632・634間は3.0mを測るが、間に1ないし2基の柱穴・礎石があったか、入口などの機能が考えられる。軸線は正方位から北西-南東方向に3.3°振る。柱穴629には平坦な石が残存し、礎石と考えられる。

柱列651・652を構成する柱穴は、深さ0.1m前後のものであり、礎石などを据付けるための掘方と想定される。

柱列653 (図版12)

郭Gで検出した東西柱列である。長さ3.8m、柱間は1.8～2.0mを測る。柱穴612～615が東西方向に並ぶが、柱穴613は他の柱穴との間隔が狭く、柱列653には含まれない可能性も考えられる。調査区南壁付近で検出しており、調査区外に延びる建物に伴う可能性も考えられる。軸線は正方位から北西-南東方向に1.3°振る。

柱列654 (図版11)

郭Gで検出した南北柱列である。柱穴620～622からなり、南北調査区外に延びると考えられる。柱間は1.5mを測る。1区南壁断面の観察では柱列654の東西で地山に段差が付き西側が一段低くなることから、郭境に設けられた柵や塀の可能性を考える。軸線は北東-南西方向に0.3°と、正



図9 伏見城期平面図 (1 : 300)

方位とほぼ同一であり、他の柱列方位と異なる。

柱列810（図版13）

郭Iで検出した東西柱列である。柱穴781・794・795からなり、西調査区外に延びる可能性がある。柱列を構成する柱穴は径0.35～0.45 m、深さ0.2～0.3 mを測り、柱間は1.8 mである。軸線は正方位から北西－南東方向に2.5° 振る。この柱列は郭I南面から約11 m北側に位置し、郭内を区画する塀もしくは柵であった可能性が考えられる。

柱列811（図版13）

郭B北部で検出した柱列である。柱穴755～759が南北方向に並ぶが、柱穴757～759は柱間が0.5 mと狭く、他の柱間が1 m前後であることから、柱穴758は柱列には含まれない可能性もある。軸線は正方位から北東－南西方向に0.8° 振る。

〔土坑〕

土坑14（図版14）

郭Aで検出した土坑である。平面形は長方形で南北に長く、長軸1.44 m、短軸1.02 mを測る。断面形は箱型を呈し、深さ0.37 mを測る。土坑内に建物などに利用されたとみられる石材が混入する。埋土は褐色泥砂、黄褐色砂泥で上位には小礫が混じる。土坑内から伏見城期とみられる瓦小片が出土している。

土坑15

郭Bで検出した土坑である。平面形は不整形を呈し、長軸3.45 m、短軸3.33 m、深さ0.28 mを測る。断面形は緩やかに傾斜し、底面は丸みを帯びる。埋土は小礫を含む褐色泥砂である。土坑内から11 A段階の土師器皿や瓦片が出土している。

土坑28（図版14）

郭Aで検出した土坑である。平面形は方形で南北に長く、長軸0.96 m、短軸0.81 m、深さ0.34 mを測る。断面形は肩部がほぼ垂直となり、底面は若干丸みを帯びる。埋土は明褐色・褐色・黄褐色泥砂である。遺物の出土は無いが、埋土が土坑14などと類似することから伏見城期の遺構と想定される。

土坑610（図版14）

郭Gで検出した土坑である。平面形は隅丸方形で長軸1.47 m、短軸1.07 m、深さ0.62 mを測る。断面形態は肩部がほぼ垂直となり、底面は平坦である。埋土は褐色系泥砂の互層となり、炭化物・焼土が多く含まれる。炭灰などの処理坑ではないかと考えられるが、土坑内から釘など建築部材も出土している。

土坑716

郭Bの北部で検出した土坑である。土坑の平面形態は隅丸の三角形を呈し、長軸1.0 m、短軸0.9 m、深さ0.2 mを測る。断面形態は土坑肩が直立気味に立ち上がり、底面は平坦となる。底面にはやや北寄りに径0.3 mの柱穴状の遺構がある。土坑内から初期伊万里とみられる染付や土師器などが出土する。土師器は小片であるため、詳細な時期は不明である。

土坑 717

郭Bの中央付近で検出した土坑である。平面形は不整形を呈し、長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.23mを測る。底面は平坦でやや西寄りに一辺0.4mの柱穴状の遺構が存在する。土坑内から初期伊万里とみられる染付や瓦などが出土する。

土坑 720

郭Dの南東隅で検出した土坑である。土坑の北側をピット772に切られる。平面形は長楕円形を呈し、長軸0.92m、短軸0.71m、深さ0.15mを測る。断面形は肩部が直立し、底面は平坦である。土坑内からは瓦が出土する。

土坑 725

郭Dの整地703の北東屈曲部肩に沿って検出した方形の土坑である。やや南側土坑掘方がわずかに長く、台形を呈する。北辺1.8m、南辺2.5m、東西軸1.2m、深さ0.2mを測る。土坑断面形態は肩部が直立し、底面は平坦となる。土坑内からは初期伊万里とみられる染付が出土する。

土坑 734

郭D北東部で検出した土坑である。攪乱により土坑の東半が削られており平面形は定かではないが、長軸1.2m、短軸0.4m、深さ0.3mを測る。肩口からほぼ垂直に掘り込まれ、底面は丸みを帯びる。埋土は灰黄褐色泥砂である。埋土内から伏見城期とみられる瓦片が出土する。

土坑 748

郭C中央部の土坑が集中する箇所検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し長軸0.6m、短軸0.52m、深さ0.24m。底面は平坦であり、柱痕などは確認されなかった。埋土内から瓦などが出土した。

土坑 754

郭Cの東、中央部で検出した土坑である。平面形態は長楕円形呈し長軸1.24m、短軸0.76m、深さ0.25m。底面は平坦である。埋土は褐色砂泥である。埋土内から古墳時代の土器などが出土するが、これらは混入したものの可能性が高く、遺構の年代は埋土の状況からすると伏見城期と考えられる。

土坑 773 (図版 15)

郭I切岸際屈曲部で検出した土坑である。土坑の形態はやや四角形の不整円形を呈する。長軸0.73m、短軸0.67m、深さ0.18mを測る。肩部は直立気味に立ち上がり、底面は平坦となる。埋土は褐色泥砂で、底面に炭化物が層状に堆積する。土坑内からは11A段階の土師器皿(9・10)が出土した。

土坑 784 (図版 15)

郭I東部の犬走状高まりの西隣で検出した土坑である。平面形は方形を呈し、長軸0.94m、短軸0.65m、深さ1.64mを測る。各辺の壁はほぼ直立に立ち上がり底面は平坦である。土坑掘削中、上端部から1.55m下位で丸瓦(105)が西壁に接した状態で出土した。その他、瓦より下層で11A段階の土師器皿が3点(11～13)出土した。また、埋土中には動物骨小片が出土する。土器とともに

に炭化物の出土があり、年代測定を行った結果、A D 1454 - 1624年の数値が得られた。

[ピット]

建物としてまとまらない小規模な柱穴や土坑状の遺構が確認された。不明な遺構については一括ピットとして取り上げた。以下に主なものを記述する。

ピット19 (図版15)

郭Aで検出したピットである。径0.82m、深さ0.72mを測る。肩口からほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。埋土は褐色・暗褐色・黄褐色泥砂が層状に堆積し、上位に炭化物・焼土を多く含む。埋土に炭化物や焼土が多く含まれ、鉄鏃・鉄砲玉・刀子などが出土していることから、処理坑の可能性も考えられる。

ピット89 (図版15)

郭Bで検出したピットである。径0.85m、深さ0.73mを測る。埋土は褐色・暗褐色泥砂が層状に堆積し、一部に炭化物を含む。

ピット91 (図版15)

郭Bで検出したピットである。径0.8m前後、深さ0.72mを測る。埋土は暗褐色泥砂で、上位に炭化物・焼土を含む。

ピット746

郭Cの北部で確認されたピットである。平面形は円形を呈し、径0.3m、深さ0.2mを測る。底面は平坦であり、柱痕などは確認されなかった。埋土内から11A段階と考えられる土師器皿などが出土し、伏見城期の可能性が想定される。

ピット772

郭Dの土坑720の北側で検出したピットである。平面形態は長楕円形を呈する。長軸北辺1.8m、南辺2.5m、東西軸1.2m、深さ0.14mを測る。土坑断面形態は肩部が直立し、底面は平坦となる。土坑内からはサザエとみられる貝殻が出土した。

[切岸状遺構] (図10、図版3・4)

前述の通り、郭D・Eと郭Iの境は高さ約2mの段差が設けられ、その段差は切岸状に整えられている。切岸上部と下半についてはその構築方法が大きく異なる。

切岸上部の櫓状突出部では、造成土(褐色粘土層)の平坦部上面に、北端部に栗石による築山状の高まりを複数設け、その間を砂と粘土の互層により地業を行い、堤状の高まりにより構築



図10 郭E・I間切岸状遺構
上位造成土内粘土塊検出状況(北東から)

する。切岸際部分については、赤土による俵状の土嚢を敷設することにより、切岸部の崩落を防ぐ。

直線的な南北部の切岸上部は、上段整地土である砂層を切岸端際から幅0.5m、深さ0.3m前後掘削を行い、際部に土嚢状の粘土を横に敷き並べて構築し、崩落を防止したと想定される。土嚢状の形態については断面が円形を呈するものと、北側部では煎餅状を呈する平坦なものが存在する。

(大西・和氣)

[伏見城造成土] (図11、図版2～4・6)

2区の調査では、下段切岸壁面に、褐色粘土と黒色粘土の造成土が堆積する層が確認された。この土層は、本調査地に伏見城下町造成時の大規模な工事に伴う土層と想定される。しかしその造成は上段(郭B～E)では、遺構検出面は砂層が検出面となり、下段(郭I)では褐色粘土と黒色粘土が検出面となる。検出された個々の遺構面は切岸を境に、上段と下段で大きく異なる。

2区掘削後、東壁沿いに断ち割りの2区南北調査区(図11、図版2・4)と、下段北壁に沿う東西調査区(図11、図版3・4)を設定し、造成土の確認を行った。

上段造成土(郭B～E)の調査

上段部は、南北方向に長さ32m、幅4m、深さ5mの調査区を設定し土層の確認を行った。

土層の状況は調査区南端で、褐色粘土と黒色粘土を互層にする造成土が確認されるが、南端4m前後で、下段と共通する褐色粘土と黒色粘土の造成土(1次造成土①)の一部は削られ消失する。削られた面は崖状になり、その傾斜面の角度に合わせ、砂と褐色粘土を主体とした造成土(1次造成土②)が35°前後の斜め堆積で造成される。この1次造成土の底面は深さ3.8m前後で角礫を含む砂が緩やかに傾斜しながら堆積する。その下部も同様の斜め堆積の造成土が確認される。

1次造成土②の上面には、平行堆積を主体とする砂、褐色土の造成土(2次造成土)が、調査2区のほぼ全域で堆積する。2次造成土の堆積の詳細を観察すると、2区中央部まで、小山状に盛り上げる砂と粘土の土層が確認される。こうした小山状に造成した盛土の北側を約20°の斜め堆積の造成土が調査区際まで堆積する。この造成土の基本は、砂層による。こうした造成土の幅は20～40cmである。

1次造成土中には、一部に赤褐色粘土のブロック状の塊が確認され、一部の造成には俵状の粘土塊を利用していた。

1次造成面の下部で確認された1次造成②面は、南端で下段で確認される褐色土と黒色土の造成面を一部削られた崖面に砂と黒色土を斜め35°の造成が行われる。確認できる斜め堆積の造成単位は細かく、35条程度の単位を確認することができる。こうした造成面は、北側では砂を中心とした造成に代わる。個々の造成単位の幅は30cm程度である。比較的観察が可能な黒色土で見ると、長さ1m程毎にその造成土は異なり、1m毎に盛土を叩き絞めを行いながら、上に積み上げたと想定される。この造成土は、調査区北端まで続くが、北端部では、1次造成②の端に赤褐色粘土の堤状の大きな高まりが確認できる。この赤褐色粘土は堤状の高まりが、1次造成②の端部となる。この赤褐色粘土塊の堤状高まりは同一種の粘土層が堆積するが、わずかに砂が互層となる。その底面には、1次造成土②で確認された斜め堆積と同様の層が連続する。このことから、1次造成土②の

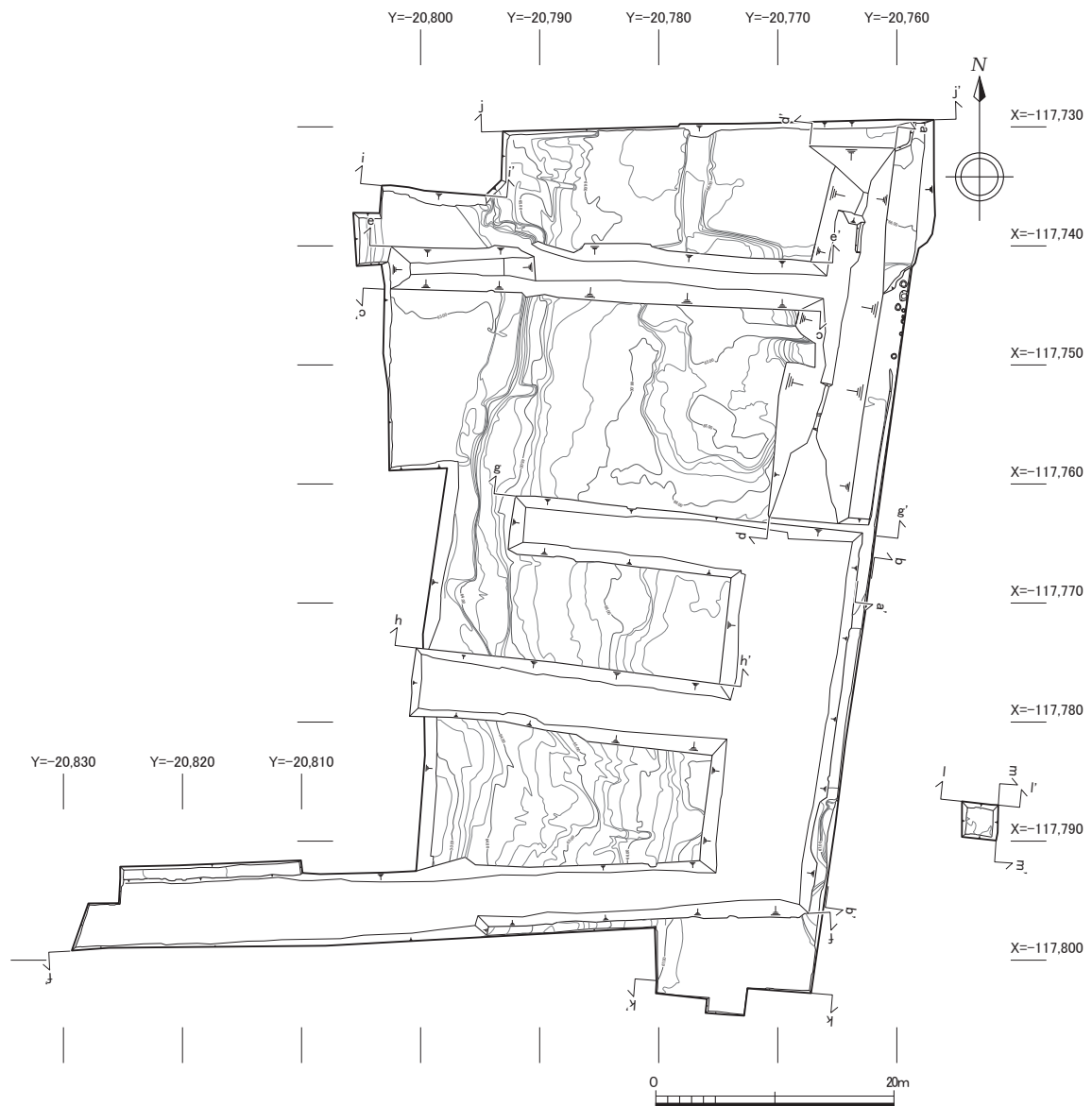


図11 断割り後平面図 (1 : 600)

下部にも同様の造成が行われたと考えられる。

上段部の造成は、2次造成は砂を基本とした平行堆積と1次造成面の斜め堆積により2種類の造成が行われる。しかし、後述する下段の調査では、この1次造成の砂を主体とした土層が確認されないことから、T字状の東西方向の調査区を設け、その土層の確認を行った。東西方向の土層は斜め方向の造成はなく、下段部の切岸際部分から東に凸レンズ状の小さな山を設けながら、細かな単位で造成が行われていた。その造成は複雑な工程が確認され、西側上半は斜め堆積を基本とし、それ以外は細かい小山状の高まりを連続させ造成をおこなう。こうした造成面の北側では粘土塊による垣状の高まりが確認される。

このように、1次造成と2次造成は、大きく堆積層が異なる。こうした造成面の成立については造成時期が異なることも想定されるが、郭D西半部の1次造成土を除去し、2次造成面直上で遺構検出を行ったが、遺構などは確認できなかった。このことから、1次造成と2次造成は連続した造成であると考えられる。

下段造成土（郭I）の調査

下段の造成は郭Iの東際に切岸の崖面がある。この崖面には、明瞭な斜め堆積の造成層が確認された。また、平面においてもその造成土が弧状を呈し、縞模様を確認される。縞状の堆積層は、調査区の北で方位が異なり、複数の造成単位があることが確認された。この造成の基本層序は、上段で確認された1次造成①とした造成土と同様である。

東西方向の土層は、西調査区際で自然地形の谷傾斜面と考えられる層が確認された。この傾斜面は浅黄色砂土を主体とし、東に傾斜した状態が確認され、東へ開析した谷部と考えられる。この傾斜部に合わせ、旧表土と考えられる黒色土が確認された。こうしたことから、1次造成土①は、この谷を埋めた造成土であると考えられる。

西端で確認された谷は東に10°傾斜し、北東に谷が形成される。造成土の堆積状況は、その谷の傾斜面上部は、深さ1.8m前後の平行堆積の砂や粘土層が堆積し、上面平坦面を作る。その平坦面下部を、谷底際の深さ3.5mまで黒色土と褐色土を互層にする斜め堆積の造成土である。この造成は概ね11単位程度であり、個々の造成の傾斜は10°である。南北方向の切岸断面（図版3・4）は少なくとも20条の縞模様の単位が確認できる。

下段造成も、上段造成の底面で見られたような大型のブロック状の粘土塊を不定形に配置し、その間を暗赤褐色粘土と礫を含む土層で造成を行っている。こうした造成の基本は上段と下段は共通した造成方法が行われることから、ほぼ同時期と考えられる。（和氣）

（3）廃城後の遺構（図12）

[溝]

主に郭A・B・F・G・Iで排水に伴うと考えられる小規模な溝を検出した。水の流れは東西溝は斜面上位である東から下位の西へ、南北溝は南から北へとなる。

溝1

郭Bで検出した溝である。調査区東壁より1.5mまで東西方向に延び、そこから南西方向に折れる。幅0.7m、深さ0.2mを測り、底面は丸みを帯びる。

溝2・3

郭Bで検出した東西溝である。いずれも幅0.4m前後を測り、深さは溝2が0.15m、溝3が0.19mを測る。溝の底面は丸みを帯びる。

溝9

郭Aで検出した東西溝である。幅0.2m、深さ0.15mを測り、底面は丸みを帯びる。

溝201

郭Eで検出した東西溝である。幅0.4m、深さ0.2mを測り、底面は丸みを帯びる。

溝401・411

郭Fで検出した溝である。検出段階では別遺構としたが、両溝が延長線上に位置することから同一遺構であると判断した。南東から北西方向に延びる。幅0.35m、深さ0.17mを測り、底面は丸み

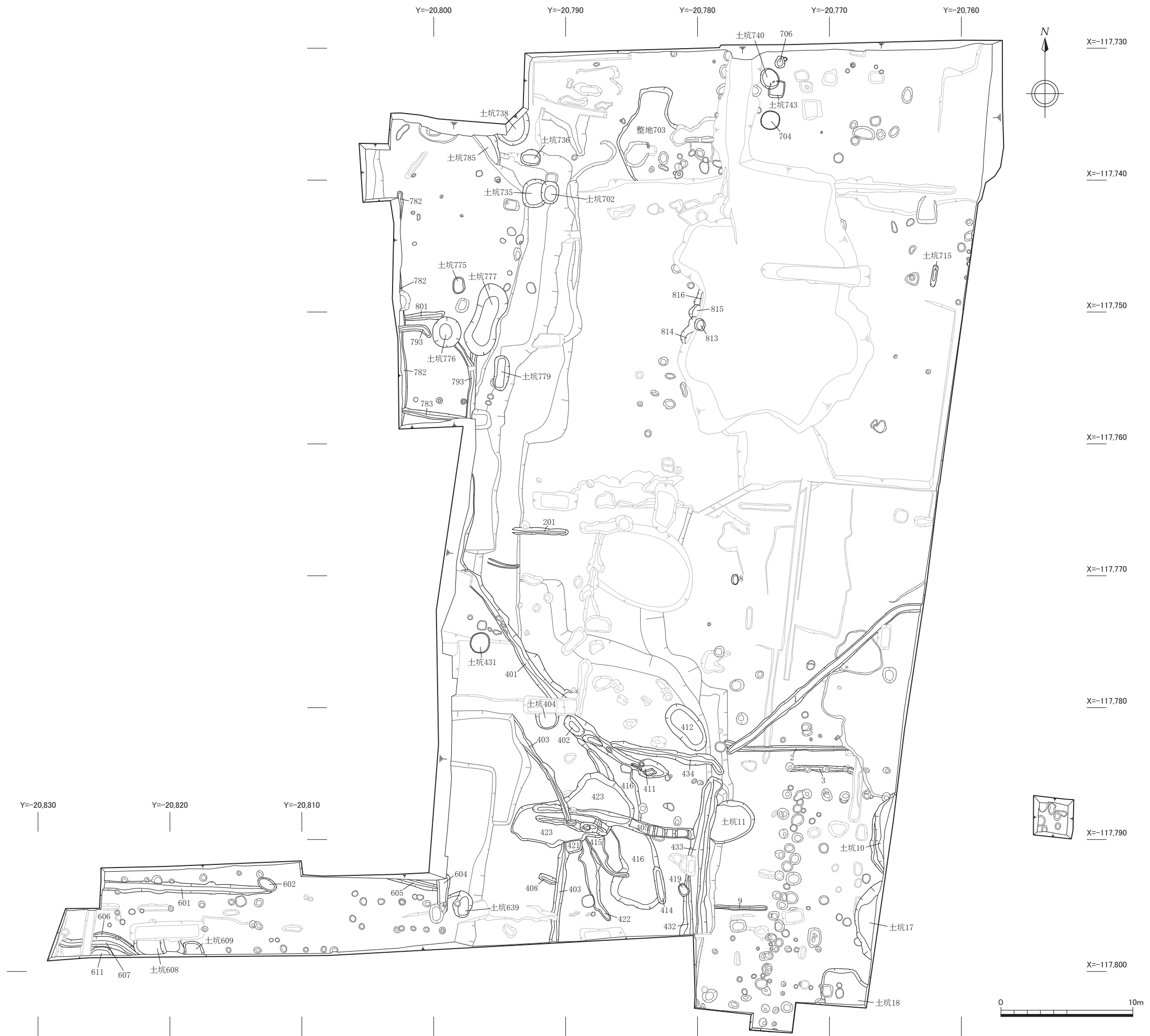


图12 糜城後平面圖 (1 : 300)

を帯びる。

溝403

郭Fで検出した溝である。調査区南壁から北に延び、溝405と交差する付近で北西に向きを変える。幅0.35m、深さ0.18mを測り、底面は丸みを帯びる。

溝405

郭Fで検出した東西溝である。幅0.85m、深さ0.3～0.4mを測る。溝東部では底面に段が付き、小土坑が連続するような状況となっている。施釉陶器、染付など江戸時代後半～幕末の遺物が出土する。

溝422

郭Fで検出した溝である。南東から北西方向に延び、土坑423に接する。幅は一定ではなく、最大0.5m、最小0.2mを測る。深さは0.2mを測り、底面は丸みを帯びる。

溝432

郭F東端の段差際で検出した南北溝である。溝433に切られる。幅0.4m、深さ0.2mを測り、底面は丸みを帯びる。

溝433

郭F東端の段差付近で検出した南北溝である。溝432を切る。幅0.7m、深さ0.3mを測る。

溝434

郭Fで検出した東西溝である。東端は溝433北端に近接し、西部は溝411に切られる。幅0.3m、深さ0.2mを測り、底面は丸みを帯びる。

溝601

郭Gで検出した東西溝である。幅0.68m、深さ0.15mを測り、底面は丸みを帯びる。遺物は江戸時代後半～幕末の施釉陶器が出土する。

溝782

郭Iで検出した南北溝である。幅0.45m、深さ0.15mを測り、底面は丸みを帯びる。遺物の出土は無い。

溝783

郭Iで検出した東西溝である。溝782に切られる。幅0.55m、深さ0.15mを測り、底面は丸みを帯びる。遺物は時期不明の土師器片が出土する。

溝793

郭Iで検出した。溝782を切り、土坑776に切られる。南壁際から北に延び、土坑777の南側で西に屈曲する。幅0.45m、深さ0.22mを測り、底面は丸みを帯びる。遺物の出土は無い。

溝801

郭Iで検出した東西溝である。溝782に切られる。幅0.46m、深さ0.18mを測り、底面は丸みを帯びる。遺物の出土は無い。

[土坑]

土坑10

郭Aで検出した土坑である。土坑の大半は東調査区外に位置するが、平面形は円形を呈すると考えられる。深さ1.23mを測り、肩口からほぼ垂直に掘り込まれる。埋土は上半部が褐色泥砂・黄褐色泥砂・明黄褐色泥砂が北下がりの斜め堆積で互層となる。下半部が暗褐色泥砂・褐色泥砂・黄褐色泥砂である。遺物は伏見城期の瓦片とともに江戸時代後半の施釉陶器・染付などが出土した。

土坑11 (図版16)

郭A・E間で検出した土坑である。遺構の西側は、上部が後世に削り取られる。平面形は不整形円形を呈し、長軸3.12m、短軸2.96m、深さ0.45mを測る。肩口からほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。遺物は伏見城期の土師器・施釉陶器・瓦片とともに江戸時代後半の施釉陶器・染付が出土した。

土坑17

土坑10の南側で検出した土坑である。土坑10と同じく大半が調査区外に位置するが、平面形は円形を呈すると考えられる。深さ0.65mを測る。断面形態は緩やかに傾斜する。遺物は伏見城期とみられる土師器・施釉陶器・瓦片とともに江戸時代後半の施釉陶器や染付が出土した。

土坑18

郭A調査区南東隅で検出した土坑である。平面形は不整形を呈し、検出規模は南北2.68m、東西3.46m、深さ0.45mを測る。埋土は褐色系の泥砂で、埋土に粒状の地山土を含む。土坑を完掘後に、底面から伏見城期の遺構を検出した。土坑内から江戸時代後半の陶磁器とともに伏見城期の土師器、瓦片が出土した。

土坑404

郭Fで検出した土坑である。北側を試掘坑により削られるが、径1.75mの円形を呈する土坑と考えられる。肩口からほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。埋土は暗褐色泥砂である。遺構の壁面に漆喰などはないが、水溜・肥溜などの可能性が考えられる。遺物は時期不明の土師器や江戸時代後半～幕末の施釉陶器、伏見城期の瓦片が出土した。

土坑416・423

郭Fで検出した土坑である。平面形はいずれも不整形を呈し、規模は土坑416が長軸12.75m、短軸3.69m、深さ0.25m、土坑423が長軸9.05m、短軸3.33m、深さ0.22mを測る。窪地に土を充填し整地を施したものの可能性も考えられる。いずれの土坑からも遺物の出土は無い。

土坑431 (図版16)

郭Fで検出した円形の土坑である。平面形態は円形を呈し、径1.5m前後、深さ0.8mを測る。壁面に約10cmの厚さで漆喰を施しており、水溜もしくは肥溜めと考えられる。土坑内に30～50cm大の角礫が複数含まれており、埋戻し時に投棄されたものと考えられる。土坑内から江戸時代後半の染付・土製品や、伏見城期の瓦片が出土する。

土坑608

郭G西部で検出した土坑である。土坑の南側は調査区外に位置し、北側は攪乱、東側は土坑609に切られる。検出規模は、東西1.97m、深さ0.75mを測る。埋土は褐色・灰黄褐色系の泥砂で、一部の層は小石を多量に含む。土坑内から江戸時代後半の染付、磁器、土製品とともに伏見城期の土器類や瓦片も少量出土している。

土坑609

郭Gで検出した土坑である。土坑の北側を攪乱に切られ、南側は調査区外に位置する。土坑608の西側を切る。検出規模は、東西3.07m、深さ0.52mを測る。埋土は暗褐色泥砂である。

土坑702

郭I東端部で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、長軸1.68m、短軸1.29mを測る。土坑内に8～15cm大の礫が多量に含まれる。土坑内から江戸時代後期の陶磁器類とともに伏見城期の土師器などが出土する。

土坑715

郭Bの北部で確認された溝状の土坑である。土坑の平面形態はやや幅の狭い溝状を呈し、長軸1.6m、短軸0.38m、深さ0.35mを測る。断面形態は肩部が直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。土坑内から染付、志野椀や瓦片が出土する。詳細な時期は不明であるが、染付(63)が出土しており、18世紀期段階の遺構と推定される。

土坑735

郭I東部で検出した土坑である。土坑702に東部を切られる。平面形は丸みを帯びた方形を呈し、長軸2.16m、短軸1.41mを測る。土坑内から江戸時代後半の陶磁器類が出土するが、伏見城期の瀬戸天目茶椀(21)、天目茶椀の高台部を打ち欠いた加工円盤(22)なども含まれる。

土坑736

郭D・I境で検出した土坑である。平面形は丸みを帯びた方形を呈し、長軸1.51m、短軸1.23mを測る。郭D・I境では同様の不定形の土坑が確認されており、下段埋め戻し段階にひな壇上面の遺物を廃棄した土坑と想定される。土坑内からは土師器、陶磁器、瓦などが多数出土する。遺物は江戸時代後半の施釉陶器・染付や、伏見城期の染付・瓦片が出土する。

土坑738

郭Dの調査区西壁付近で検出した土坑である。平面形は一部調査区外に出るため不明であるが、楕円形の土坑と想定される。確認された土坑の規模は南北軸1.8m、東西軸1.1m以上である。土坑断面形態はすり鉢状を呈し、深さ1.2mを測る。土坑内からは伏見城期から江戸時代後期までの遺物が多数確認されるが、出土する瓦類については棧瓦が存在しないことなどからすると、江戸時代後期に調査区全体に削平された時期に廃棄された土坑と考えられる。

土坑740

郭Cの西部で検出した土坑である。平面形は不整形を呈し、長軸1.59m、短軸1.38m、深さ0.35mを測る。肩口からほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。埋土は褐色砂泥で、炭化物を

多く含む。

土坑743 (図版16)

郭Cの土坑705の南で確認された土坑である。土坑の平面形態は方形を呈し、長軸1.32m、短軸1.24m、深さ0.81mを測る。肩口からほぼ垂直に掘り込まれ、底面の深さは一定ではない。埋土は黄褐色系の粗砂や細砂、褐色泥砂である。

土坑775 (図版16)

郭Iとする南のほぼ中央部で確認された土坑である。土坑の形態は長楕円形を呈する。長軸1.3m、短軸0.6m、深さ0.2mを測る。肩は直立気味に立ち上がり、床面は平坦となる。土坑内からは紅皿などが出土し、江戸時代後期の18世紀段階の土坑と想定される

土坑776 (図版17)

郭Iで検出した土坑である。土坑の平面形態は円形を呈し、断面はすり鉢状を呈する。南北軸2.2m、東西軸2.1m、深さ0.75mを測る。すり鉢状を呈する底面は楕円形を呈し1.5m×1.8mで床面は平坦となる。埋土は褐色泥砂で、20cm大の礫を含む。土坑内からは江戸時代後期の染付椀や、伏見城期の土師器・瓦片などが出土する。素掘りの井戸もしくは水溜の可能性はある。

土坑777 (図版17)

郭Iで検出した土坑である。段差際の犬走状高まりに土坑東面が接する。土坑の平面形態は瓢箪状を呈し、全体の南北長は5.5mを測る。北側の短軸は2.1mを測り、主軸はやや西に振る。南側は短軸2.2mを測る。肩部は緩やかに直立気味に立ち上がる。底面は平坦になる。埋土は褐色系泥砂・砂泥で20cm大の礫を多く含む。出土遺物は土師器、施釉陶器、染付、瓦である。施釉陶器や

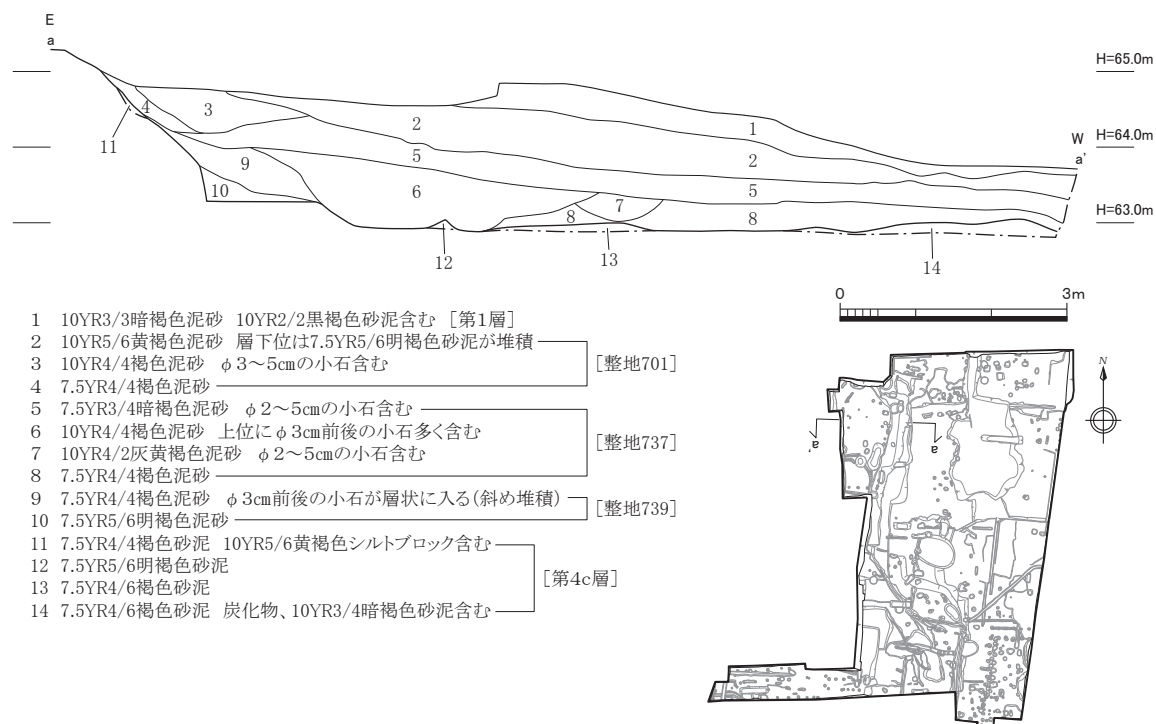


図13 2区北西部東西セクション・南壁土層断面図(1:100)

染付など18世紀後半の遺物が出土しており土坑の埋没時期は江戸時代後半であるが、伏見城期の土器と・陶磁器類や瓦なども一定量含まれていることから、伏見城期の遺構がこの時期再利用された可能性も想定される。

土坑779（図版17）

郭Iの犬走状高まりで検出した土坑である。土坑の形態は小口部がやや丸みを有する長方形を呈し、土坑東面は切岸状法面に接する。土坑は長軸2.5m、短軸0.8m、深さ0.18mである。土坑の壁はほぼ直立に立ち上がり、底面は平坦である。遺構埋土は一部漆喰によると考えられる白色粘土層が上面に薄く堆積する。他の遺構と明らかに埋土が異なることから墓壙なども想定されたが、土坑内からは出土遺物はない。

土坑785

土坑738の西下で確認された土坑である。土坑の平面形態は不整形を呈し、短軸である東西方向は0.8m、長軸である南北方向は1.2m以上で調査区外に出る。土坑壁はややすり鉢状を呈し、緩やかに傾斜する。土坑内からは江戸時代後期の白磁紅皿や染付などが出土した。

[整地]

整地703

郭Dの南東部で検出した平面不整形の窪地を埋めた整地である。規模は東西7.3m、南北4.1m、深さ0.2mを測る。土層は褐色泥砂が薄く堆積しており、出土遺物などから江戸時代後半期の攪乱に伴う遺構と考えられる。

整地737（図13）

郭Iで検出したひな壇際の段差を暗褐色・褐色・灰黄褐色泥砂により埋めた整地である。厚さは0.4～1.0mを測り、段差際で最も厚く、段差から離れるにつれて薄くなる。江戸時代後半～幕末の施釉陶器、染付などが出土したことから、当該期にひな壇際の段差が埋められたと考えられる。また、伏見城期の陶磁器類、瓦片、金属製品なども上記の遺物とともに出土した。

整地739（図13）

郭Iひな壇際の犬走状段差上面で検出した0.7m前後の厚さを測る整地である。上位から褐色泥砂、明褐色泥砂であり、上位では径3cm程の小石が層状に斜め堆積する。整地土からは江戸時代後半の陶磁器や伏見城期の土師器・陶磁器・瓦片が出土するが、整地737と比べて江戸時代後半の遺物は少ない。（大西・和氣）

3 出土遺物

遺物はコンテナ26箱出土した。遺物の種類は土器・陶磁器類、瓦、金属製品、石製品がある。時期は伏見城期、江戸時代後半（廃城後）が大半を占め、伏見城以前の遺物は、古墳時代の土師器・須恵器、中世の土師器が造成土や近世の遺構からわずかに出土したのみである。伏見城期の遺物については、当該期の遺構から出土したものは少なく、大半が廃城後の遺構や整地土から江戸時代後半の遺物とともに出土している。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク 点数	C ランク 箱数
古墳時代	土師器、須恵器		土師器1点、須恵器2点		
鎌倉時代	土師器		土師器1点		
桃山～ 江戸時代初頭	土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品、金属製品		土師器20点、青磁1点、白磁2点、染付6点、施釉陶器15点、焼締陶器7点、瓦質土器2点、軒丸瓦6点、軒平瓦7点、道具瓦2点、金箔瓦3点、丸瓦2点、金属製品19点、石製品4点		
江戸時代後半	土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦質土器、土製品、瓦、銭貨		土師器1点、白磁4点、染付14点、施釉陶器5点、瓦質土器1点、土製品3点、軒棧瓦1点、銭貨1点		
合計		28箱	130点（5箱）	0点	23箱

*コンテナ箱数は、整理段階で2箱増加した。

(1) 土器・陶磁器類

(a) 伏見城期以前（図版18 1～4）

1～3は古墳時代後期に属し、1が土師器、2・3が須恵器である。1は土師器壺もしくは甕の底部から体部片。底部は緩く丸みを持つ。体部外面にハケメ、内面に板ナデを施す。2は須恵器甕の体部片。胎土は灰色を呈し硬く焼締まる。外面にタタキ、内面に同心円文のあて具痕が残る。3は須恵器杯H蓋。口径13.8cm、器高3.9cm。天井部は丸みを持ち、口縁部はほぼ垂直に下方向に延びる。天井部外面は回転ヘラケズリ、口縁部および天井部内面はナデを施す。TK43型式並行と考えられ、6世紀後半の所産。

4は鎌倉時代の土師器皿N。小片の為口径が復元できなかったが、小型皿と考えられる。6C～7A段階に属すると考える。

(b) 伏見城期（図版18・19 5～57）

土坑15（5～7）

5～7は土師器皿S。5は口径8.9cm、器高1.6cm、6は口径9.9cm、器高1.8cm、7は口径10.0cm。口縁部は外上方に延び、端部は尖り気味におさめる。6の底部内面には、ナデによりわずかに凹み、圈状に廻る。いずれも11A段階に属する。

柱穴63（8）

8は土師器皿S。口径10.9cm。口縁部は外上方に延び、端部は尖り気味におさめる。11A段階に属する。

土坑773（9・10）

9・10は土師器皿S。9は口径10.9cm、器高2.1cm。底部は平らで口縁部は直線的に外上方に延びる。底部内面にナデによる圈状凹線が廻る。10は口径12.5cm。底部は欠損。端部は尖り気味におさめる。いずれも11A段階に属する。

土坑784 (11～13)

11～13は土師器皿S。11は口径120cm、器高2.1cm。12は口径125cm、器高2.0cm。13は口径124cm、器高2.2cm。いずれも底部は平らで口縁部は外上方に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。底部内面にナデによる圈状凹線が廻る。いずれも11A段階に属する。

土坑19 (14)

14は土師器皿S。口径10.6cm、器高1.9cm。口縁部は直線的に外上方に延び、端部は尖り気味におさめる。底部内面にナデによる圈状凹線が廻る。11A段階に属する。

伏見城造成土 (15)

15は土師器皿S。口径11.9cm。底部は欠損。口縁部は直線的に外上方に延び、端部は尖り気味におさめる。11A段階に属する。

柱穴31 (16)

16は瀬戸美濃窯の天目茶碗。口径12.9cm。口縁部は屈曲して端部は外上方に立ち上がる。内外面に褐色の釉薬を施す。

その他の遺構 (16～34)

廃城後の遺構から出土した遺物を取り上げる。

17・20・21・30・31は土師器である。17は皿N。口径5.5cm、器高0.8cm。底部はほぼ平らで口縁部は短く外上方に立ち上がる。20・21は皿S。20は口径10.2cm、器高1.5cm。21は口径10.8cm、器高1.7cm。底部は平らで口縁部は外上方に延び、端部は尖り気味におさめる。底部内面にナデによる圈状凹線が廻る。11A段階に属する。17は溝416、20・21は土坑702から出土。30・31は鍋口縁部。口縁部は強く外反し、端部は上方に突出する。土坑777から出土。

18・21～23・25・26は施釉陶器。18は瀬戸美濃窯の碗。口径10.2cm。口縁部は直線的に上方に立ち上がる。内外面に褐色の釉薬を施す。溝416から出土。21は瀬戸美濃窯の天目茶碗。口径11.6cm、高台径4.8cm、器高6.5cm。口縁部はいわゆる鼈口であるが、屈曲は緩い。内面及び口縁～体部外面に灰白色の釉薬を施す。22は天目茶碗の高台を用いた加工円盤。径4.8cm、厚さ1.3cm。21・22は土坑735から出土。23は瀬戸灰釉皿。口径10.2cm、高台径5.5cm、器高2.2cm。底部は平坦で、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。背の低い高台を削り出す。土坑738から出土。25は志野の皿。口径11.3cm、高台径5.6cm、器高2.2cm。底部は平坦で、体部は屈曲気味に外上方に立ち上がる。背の低い高台を削り出す。内外面に浅黄橙色の釉薬を施す。溝422から出土。26は壺底部から体部片。平底であり底径9.0cm。底部は平坦で、体部は丸みを持ち立ち上がる。体部外面に白色の釉薬を施し、それ以外は露胎である。茶陶に関するものか。土坑715から出土。28は唐津碗。口径10.8cm、高台径3.8cm、器高6.0cm。内外面に褐色の釉薬を施し、白色の釉薬でハケメを描く。土坑705から出土。

24・27は輸入磁器。24は染付碗。口径12.8cm。口縁部内外面および見込みに呉須による圈線を描く。土坑738から出土。27は青磁皿。口径4.5cm、高台径2.7cm、器高1.6cmの小型の皿である。口縁は輪花、体部外面は蓮弁に作る。土坑785から出土。

31～34は焼締陶器。31・32は播鉢。いずれも備前産。33は壺。口縁部は屈曲して短く外反する。茶陶に関するものか。34は甕底部。31～34は土坑777から出土。

整地701 (35～38)

35は土師器皿N。口径7.0cm、器高1.3cm。口縁部は外反する。36は土師器皿S。口径10.3cm。口縁部は外上方に延び、端部は尖り気味におさめる。36・37は11 A段階に属する。37は瀬戸美濃窯の天目茶椀。口径は復元できなかった。口縁部は緩く屈曲する。内外面に赤みがかかった黒色の釉薬を施す。38は染付皿。高台径5.6cm。高台外面に圏線、見込みに花文と動物とみられる絵を呉須により描く。

整地736 (39)

39は染付皿。口径13.9cm、高台径5.6cm、器高2.9cm。方形の背が低い高台を削り出す。体部は丸みを持って外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。高台に重ね焼きの痕跡が残る。初期伊万里と考えられ、17世紀の所産か。

整地26 (40)

40は白磁椀である。口径11.8cm。体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反し端部は上方に立ち上がる。口縁端部は輪花に仕上げる。体部内外面に草文とみられる型押文を施す。

整地739 (41～43)

41は土師器皿S b。口径8.5cm、器高1.6cm。底部は平坦で、口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。底部内面に圏状凹線は無い。11 A段階に属する。42は唐津皿。口径10.7cm。体部は丸みを持ち、口縁部は外上方で丸く収める。内面及び口縁部外面に灰白色の釉薬を施す。43は染付皿。底径15.3cmの大型皿。見込みに呉須により草花文とみられる絵を描く。高台内面に離れ砂が付着する。明末の漳州窯の製品と考えられる。

整地737 (44～56)

44は白磁小椀。底径2.5cm。45・52は染付。45は瓶底部。底径4.4cm。高台は断面逆台形を呈し内傾する。初期伊万里と考えられる。52は皿底部。高台径14.4cm。断面方形で背の低い高台を削り出す。高台に離れ砂が付着する。内面に呉須により草花文を描く。明末頃の漳州窯産と考えられる。46～50は施釉陶器。46・47は天目茶椀。いずれも瀬戸美濃窯。46は口縁部から体部片で、口径10.8cm。口縁部は緩く外反する。黒色の釉薬が施される。47は底部片。高台径4.1cm。断面方形で幅の狭い高台を貼り付ける。黒色の釉薬が施され、高台周辺は露胎である。48～50は唐津。48・49は皿。48は高台径4.8cm。断面方形の背の低い高台を削り出す。内面に灰色の釉薬を施し、鉄釉により絵付けを行う。49は口径15.4cm、高台径7.2cm、器高2.9cm。断面方形の背が低い高台を削り出す。体部は丸みを持って外上方に立ち上がり、口縁部は丸く収める。内面及び口縁部外面に灰釉を施す。50は四方皿。体部から口縁部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。内外面に灰色の釉薬を施し、内面に「×」状の文様を描く。51は土師器鍋。口径は復元できなかった。口縁部は外反し、端部は内上方に尖り気味に立ち上がる。53～55は焼締陶器播鉢。53・54は備前、55は信楽である。53は口縁端部が上下にわずかに肥厚し、端部は面を持つ。8条単位

の播目を内面に施す。伏見城期よりやや古いものとみられ、16世紀中頃の所産か。54は端部が上下に拡張し、内側にナデによる凹線、外側に工具による2条の凹線が廻る。55は口縁端部が外反し、端部は上方に肥厚する。4条単位の播目を内面に施す。56は瓦質土器火鉢もしくは風炉。口径25.8cm。体部は内径気味に立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚し上方に面を持つ。

整地703 (57)

57は瓦質土器火鉢。口縁部は内径気味に立ち上がり、内側に肥厚する。端部は尖り気味におさめ、上方に面を持つ。

(c) 江戸時代後期 (図版20 58～85)

土坑702 (58)

58は染付蓋。天井部につまみが付く。段重の蓋か。口径9.4cm、器高1.7cm。つまみ付近に二重の圏線、口縁端部外面に圏線、圏線間に風水文を描く。

土坑777 (59～62)

59は白磁皿。口径9.4cm、高台径3.4cm、器高2.7cm。体部から口縁部は丸みを持って外上方に立ち上がる。60・61は染付椀。いずれもくらか椀。60は口径9.7cm。外面に呉須で漁網状の文様と雪輪文を描く。61は高台径4.0cm。高台の内外に呉須により圏線を描く。62は染付皿。高台径13.5cm。体部は丸みを持って外上方に立ち上がる。呉須により見込みに植物、高台の内外に圏線を描く。いずれも18世紀の所産。

土坑715 (63)

63は染付椀。くらか椀で、口径9.9cm、高台径3.6cm、器高5.3cm。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は上方で丸く収める。体部外面に呉須で梅花文を描き、高台内側に記号とみられる文様を描く。

溝403 (64)

64は染付椀。くらか椀で、高台径3.9cm。高台先端部に砂が付着する。体部外面に呉須により草花文を描く。18世紀の所産。

土坑776 (65～67)

65は土師器皿S。口径9.9cm、器高1.6cm。底部内面に明瞭な圏線が廻る。13A段階に属する。66・67は染付椀。いずれもくらか椀である。66は高台径3.7cm。体部外面に呉須で抽象文を描く。67は口径9.9cm、高台径3.9cm、器高4.7cm。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は上方でやや尖り気味に収める。体部外面に呉須で松が描かれるが、状態が悪い。染付椀はいずれも18世紀の所産。

溝402 (68)

68は染付椀。くらか椀で、口径10.8cm、高台径4.4cm、器高5.0cm。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は上方で丸く収める。体部外面に呉須で草花文を描き、底部内面は重ね焼きの為、蛇目釉剥ぎを行う。18世紀の所産。

土坑11 (69)

69は白磁皿。口径19.0cm。体部は外上方に延び、口縁端部は外反する。肥前産か。

土坑431 (70・71)

70は染付椀。口径9.8cm、高台径3.4cm、器高4.3cm。体部の立ち上がりは角度が付き、口縁部は緩く外反する。呉須により内面に圏線、外面に圏線となす文を描く。71は土製品。漏斗状を呈し、凸部は外側から穿孔を行う。いずれも18世紀の所産。

整地737 (72～77)

72・73は染付。72は蓋。口径10.8cm。天井部の残りは悪い。口縁部は下方に延び、端部は下に面を持つ。呉須により口縁部外面に幅広の花文、天井部に2条の圏線を描く。体部外面に複数の鑄を持った凸線を放射状に設ける。口縁部内側は釉を剥ぐ。73は筒形椀。体部から口縁部は欠損するが、上方に立ち上がる痕跡が確認できたため筒形椀とした。高台径3.8cm。外面に青磁釉、内面にコンニャク印判による五弁花を描く。74は泥面子。「新」字が描かれた扇を型押しする。75～77は施釉陶器。いずれも京焼系か。75・76は椀底部片。75は高台径4.6cm。体部は丸みを持って立ち上がる。全面に灰白色の釉薬を施す。76は高台径5.2cm。内面に灰白色の釉薬を施す。外面は露胎で、高台内側に「木下你」の刻印がある。77は土瓶。口径11.8cm。肩部に三角の耳が付く。外面に明緑灰色の釉薬を施し、内面にも一部釉薬が掛かる。これらはいずれも18世紀の所産。

土坑608 (78・79)

78は泥面子。径3.4cm、厚さ1.1cm。表面に円盤を重ねたような文様を型押しする。81は白磁椀。口径7.1cm、高台径2.4cm、器高3.5cm。高台端部以外全面に透明釉が施されるが、呉須による絵付けはない。いずれも18世紀の所産か。

溝422 (80)

80は施釉陶器椀。口径10.0cm。口縁部は上方に立ち上がり、端部は上に面を持つ。全体に灰白色の釉薬を施す。18世紀の所産。

整地739 (81)

81は白磁皿。口径4.2cm、底径1.6cm、器高1.8cmの小型皿。体部外面に放射状の凹線を施し、紅皿とみられる。

整地701 (82・83)

82は白磁皿。口径4.6cm、高台径1.2cm、器高1.4cmの小型皿である。体部外面に放射状の凹線が密に施され、紅皿とみられる。83は施釉陶器鉢。口径19.3cm。口縁部は内側に折り曲げる。全面に褐色の釉薬を施す。

溝405 (84・85)

84は染付皿。口縁部欠損。高台径8.1cm。蛇目高台を削り出す。体部は丸みを持って立ち上がる。呉須により見込みに草花文、高台内側に渦福を描く。83は瓦質土器。香炉や盤の脚部か。切込みにより蹄を2つに分け、牛の脚部を模したものと考えられる。芯に粘土を巻き付け棒状にし、ナデやケズリにより牛の脚部に造形する。

(2) 瓦類 (図版21・22 86～104)

出土した瓦類は伏見城期の丸瓦、平瓦が大半で、小片となっているものが多い。江戸時代以降の瓦は非常に少なく、数点を数えるのみである。

(a) 軒瓦 (図版21 87～99)

87は軒棧瓦の小丸部分。瓦当径9.5cm。左巻き三巴文。巴頭は丸みを帯び、尾は長く伸びるが隣の尾には接しない。周囲に12個の珠文が廻る。土坑404から出土。

88～92は軒丸瓦。88～92は右巻き三巴文で珠文が廻る。88は小片のため全体像は不明。巴頭は丸く巴首のくびれは明瞭である。土坑738から出土。89は巴頭と尾の一部、珠文が3個残存する。周縁幅は2.1cm。90は周縁幅1.8cm。巴頭は丸く巴首のくびれは明瞭である。尾は長く伸びるが、隣の尾には接しない。7個の珠文が残存し、総数は14個と想定される。89・90は整地737から出土。91は周縁幅2.2cm。巴頭は残存せず、尾は長く伸び隣の尾と接する。珠文は4個残存する。土坑18から出土。92は瓦当径14.6cm、周縁幅2.1cm。巴頭は丸く巴首のくびれは明瞭である。尾は長く伸び、隣の尾と接する。珠文は8個残存し、総数は10個と想定される。土坑27から出土。

93～99は軒平瓦。いずれも唐草文。93は唐草文の巻きが強く、先端は肥厚する。顎貼り付け技法で瓦当上縁に幅の狭い面取りを施す。土坑404から出土。94は中心飾の端部と唐草文が残る。唐草文の巻きが強い。顎貼り付け技法で、瓦当上縁に幅の狭い面取りを施す。整地737から出土。95は3回転する唐草文。内2つの唐草文は巻きが強いが外側はほぼ巻き込まない。顎貼り付け技法で、瓦当上縁に幅の広い面取りを施す。土坑735から出土。96は唐草文の左端部のみ残る。唐草の端部は肥厚する。97は唐草文の右端部。唐草文の巻きが強い。顎貼り付け技法で、瓦当上縁に幅の狭い面取りを施す。96・97は土坑777から出土。98は唐草文端部が肥厚する。顎貼り付け技法で、瓦当上縁に幅の広い面取りを施す。土坑702から出土。99は唐草文の右端部。唐草文の巻きは強く、端部は肥厚する。顎貼り付け技法で、瓦当上縁に幅の広い面取りを施す。土坑777から出土。

(b) 道具瓦 (図版21 86・100・101)

86は菊丸瓦。重弁で周縁は持たない。土坑11から出土。100は飾瓦か。周囲を彫り込み六角形の浮文を作る。土坑777から出土。101は飾瓦。全体像は不明であるが、桐文の一部か。土坑108から出土。

(c) 金箔瓦 (図版21 102～104)

金箔瓦は3点出土した。何れも金箔の依存状態は悪い。102は鬼板の一部と考えられるが、詳細は不明。2か所に穿孔がある。表面の一部に金箔と黒漆が残る。1区の掘削土から出土。103は幅の狭い周縁に屈曲する直線的な凸線文を配する。周縁・文様の凸部に金箔を施したとみられ、一部に金箔や黒漆が残る。104は周縁部片。103と同文もしくは同一個体の可能性もあるが、直接接合はしない。周縁凸部の一部に金箔が残る。103・104は土坑738から出土。

(d) 丸瓦 (図版22 105・106)

105はほぼ完形の丸瓦。長さ325cm、幅17.6cm、高さ8.7cm。凹面にはコビキAと布目痕が残る。土坑784から出土。106は半身及び玉縁端部が欠損。凹面にはコビキAと布目痕が残る。土坑777から出土。

(3) 金属製品 (図版23 107～126)

107・108は鉄砲玉とみられる鉛玉。いずれも表面は白化する。107はピット19から出土し、径0.5cm、6.2gである。108は整地739から出土し、径1.1cm、18.8gである。109は不明品。鉄製の小札状の破片である。厚さは0.8cmでわずかに湾曲する。110・111は刀子。110は切先部分。残存長10.8cm、最大幅1.7cm、厚さ0.7cm。土坑10から出土。111は束部分。ピット19から出土。112は鏃。鏃身部は両面に鑄を作り両側に刃を付ける。全長16.8cmを測り、鏃身部長5.7cm、束部長11.1cm。鏃身部幅1.2cm、厚さ1.2cm。束部は断面方形を呈し、一辺0.4cm。整地737から出土。113は板状の鉄製不明品。断面形は方形を呈し、刃部は無いが、刀子の束部の可能性もある。残存長7.5cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm。整地701から出土。114は環状不明品。1mm厚の銅線を曲げ径0.8～0.9cmの環状とする。一部に銀箔が残り、本来は全体に箔押しされていたとみられる。整地737から出土。115は不明品。幅1.7cmの銅板が渦巻状に巻かれる。ピット19から出土。116は板状の銅製品。端部に向かって撥状に広がり、端部は丸みを持つ。径6mmの穿孔がある。整地737から出土。117～123は釘。大半が方形の断面を呈する。117は、釘の周囲に炭化した木片が付着する。122は頭部が残存する。123は平折釘。ほぼ直角に屈曲し、頭部は欠損する。117・119～121はピット19、118は土坑610、123は整地737、122はピット91から出土。124・125は鏃か。何れも断面は方形を呈する。124は肩部の屈曲が強く、125は屈曲が緩い。土坑610から出土。126は寛永通宝。「通」字部分を欠く。裏面上位には「文」の字がある。整地737から出土。

(4) 石製品 (図版23 127～130)

127～129は砥石。127は砂岩製の大型品。狭い側の面は使用により平滑となる。土坑738から出土。128は頁岩製。片面に2条、反対面に1条の切込みが残り、分割しようとしたものと考えられる。整地26から出土。129は頁岩製。短冊状を呈する。ピット91から出土。130は硯。海部分には墨痕がある。整地737から出土。(大西)

参考・引用文献

『年代のものさし-陶器の須恵器-』大阪府近つ飛鳥博物館図録40 2006年

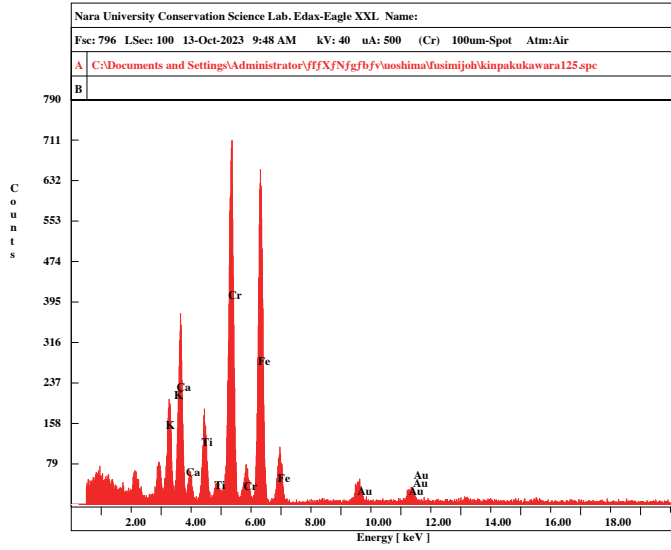
『平安京左京北辺四坊』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年

『織豊期城郭 瓦研究の新視点』織豊期城郭研究会 2018年度京都研究集会資料集 付織豊期城郭資料集成IV

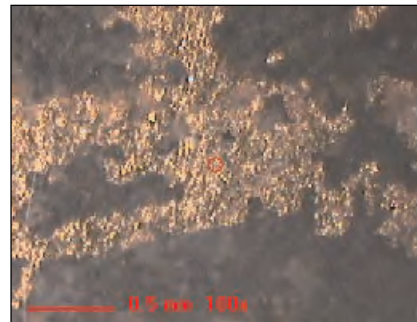
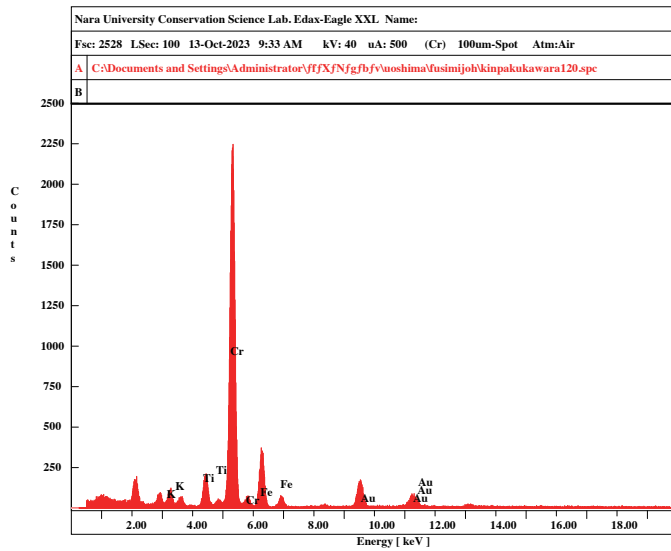
『器瓦録想 其二 伏見城』伏見城研究会 2006年

『器瓦録想 其三 淀城』伏見城研究会 2006年

金箔瓦(102)



金箔瓦(103)



金箔瓦(104)

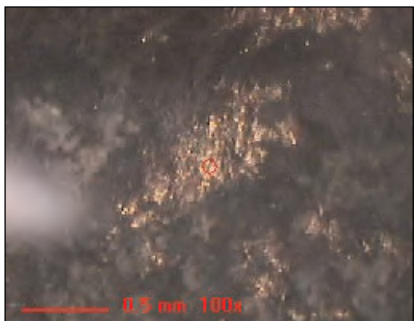
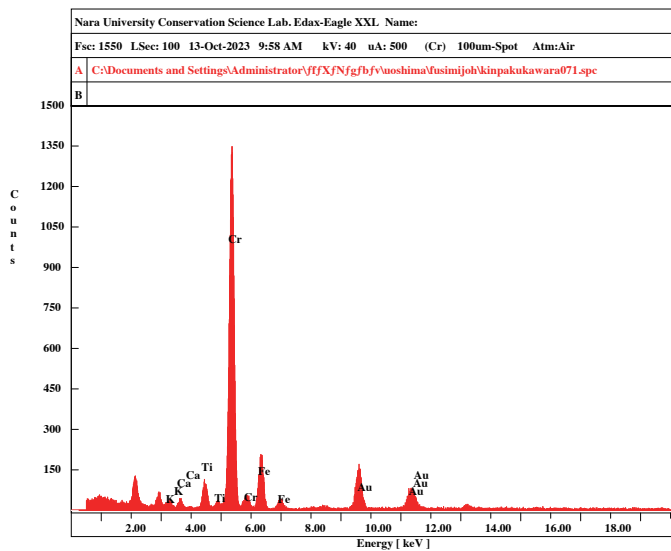
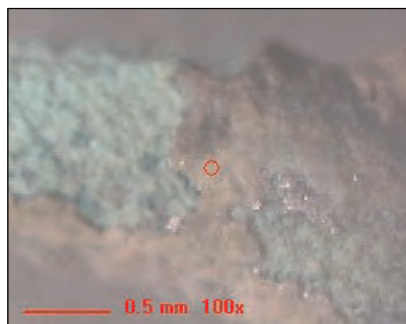
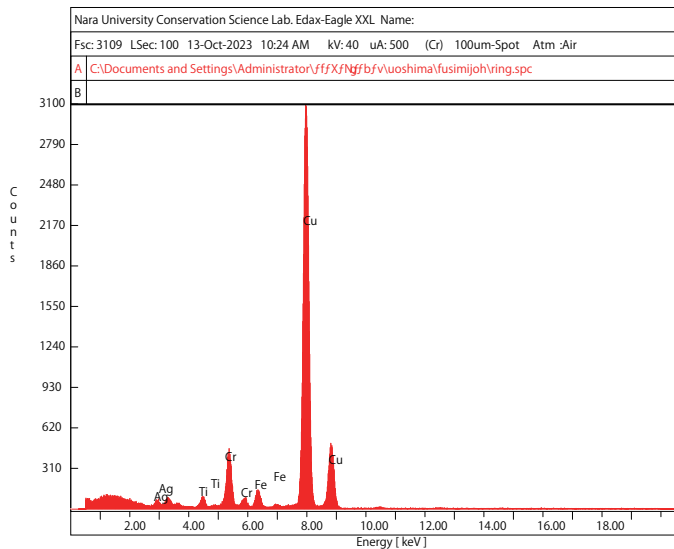
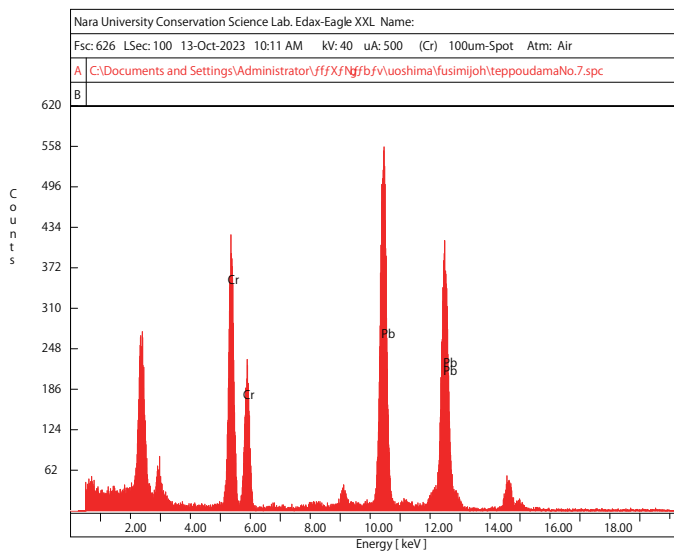


図14 金箔瓦(102~104)蛍光X線分析結果

環状不明品 (114)



鉄砲玉 (107)



鉄砲玉 (108)

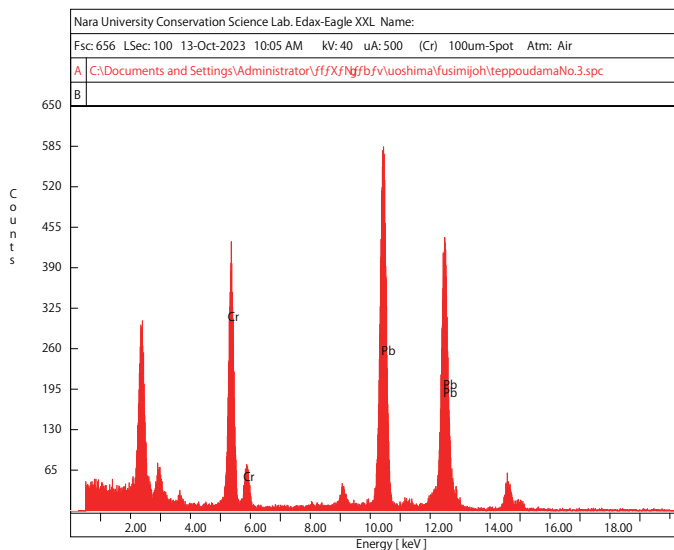


図15 環状不明品 (114)、鉄砲玉 (107・108) 蛍光X線分析結果

第Ⅳ章 まとめ

1 遺跡の変遷

伏見城期以前

今回の調査では、伏見城造営以前の遺構は検出していない。伏見城造営に際して調査区南半（1区）では地山の削平、北半（2区）では多量の土砂を用いた盛土造成によりひな壇が造成されたため旧地形は大きく改変され、城造営以前の状況は判然としない。しかし、調査区北半東側の造成土下で検出した北向きの傾斜面では、地山直上に黒褐色の土壤化層がわずかに堆積していることから、伏見城造営直前までほぼ手付かずの自然地形であった可能性が高い。

本調査区周辺の地形分類についてみると、全体は台地段丘地形に分類されているが、後述する桃山町島津や桃山町福島太夫北南町・桃山長門東町一帯は人口地形の切土地に指定されており大規模な改変地形とされてきた。しかし、こうした地形の状況は、既存調査からその一帯は盛土が実施されていることが確認されている地帯とほぼ同一の範囲となる。こうした盛土範囲の旧地形の復元が必要となり、近接地のボーリングデータを見ると、福島太夫北町（地点1～3）、桃山町三河（地点4）などが存在する。ボーリングによる柱状図（図18）を見ると、大阪層群に起因す

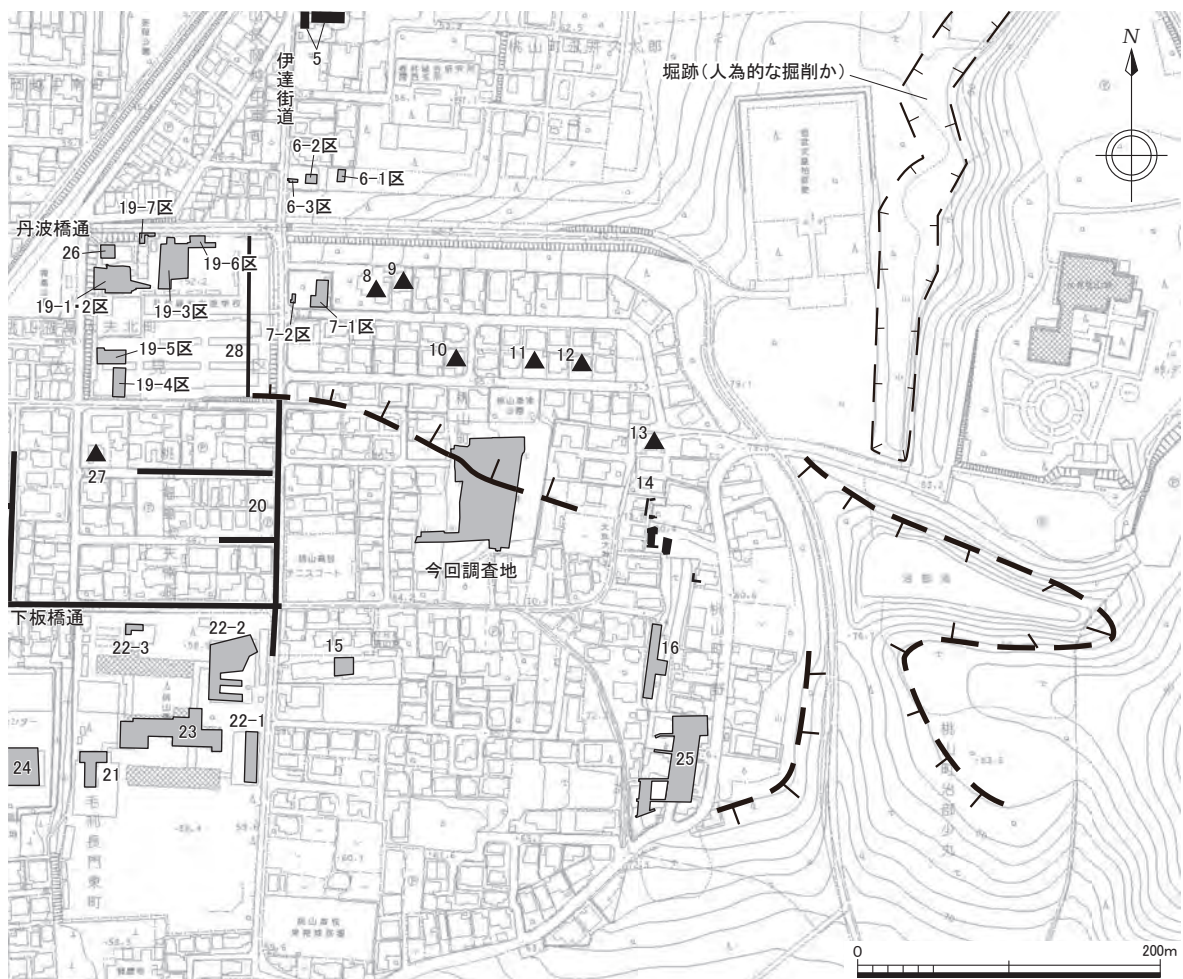


図16 調査地周辺旧地形推定図（1：5,000）

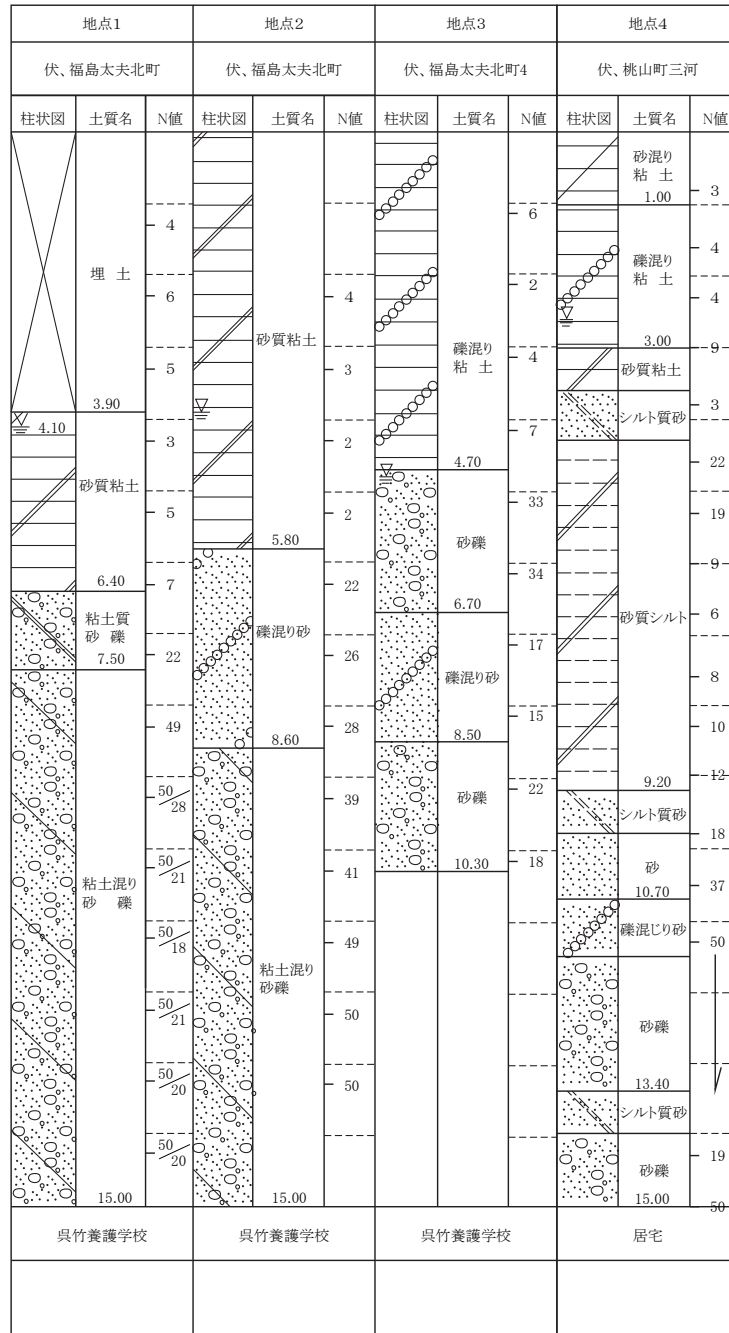


図17 調査地周辺地形分類図（国土地理院 地理院地図を参照し作成 1：10,000）

るとみられる砂礫層は地点4ではGL - 11.5 mで確認され、地点1～3ではGL - 7.5～4.7 mとなり、伏見城が建設された木幡山から、急激に本調査地を含む範囲が傾斜した地形となることが伺える。また、調査地周辺における既往調査で確認された地山標高（表4）からは、全体的には西下りの傾斜面ながら、その勾配は一定ではなく緩急に富むことが確認できる。その他、大阪歴史学会により実施された木幡山伏見城跡の立ち入り調査では、治部池の所見で「池水に切岸が接するような地形ではなく、一般的な谷底地のようにみえる。」とあり、さらに「また、石田治部少輔郭の西側にある、桓武天皇柏原陵への参道が南北に通る谷地形が、そのまま東に屈曲して池n（治部池）に続く。」とあることから、周辺に谷地形が存在した可能性が伺われる。

こうした旧地形の詳細については周辺のボーリングデータの収集や調査成果の更なる積上げが必要になるが、調査地周辺における城造営前の地形については、緩急の付いた起伏を有する西下りの傾斜地であったのではないかと考えられる（図16）。なお、旧地形の詳細については、附章2を参照されたい。

遺物については古墳時代後期の土師器・須恵器や鎌倉時代の土師器と考えられる細片が僅かに出土したのみである。古墳時代の遺物については、古墳時代後期（6世紀）に属し、調査地の北に分布する桃山古墳群（永井久太郎古墳）に関連するものが混入したと考えられる。



『京都市内ボーリングデータ集』（京都市住宅局建築指導部審査課監修・建築行政協会京都市支部編 大龍堂書店 1986年）を再トレースして編集

図18 調査地周辺地質柱状図

表 4 周辺調査地の地山標高

地山の標高	現地盤からの深度	調査地点	所在地
L = 78.4 m (現況からの推定値)	GL - 2.0 m	調査 14	桃山町下野
L=71.4 m以深 (明確な地山を検出せず)	GL - 1.2 m以深	調査 16	桃山町下野
L=66.1 m	GL - 1.4 m	今回調査 (2区南北断割り南端)	桃山町島津
L=62.5 m以深 (地山未検出)	GL - 4.8 m以深	今回調査 (2区南北断割り北端)	桃山町島津
L=60.8 m	GL - 4.7 m	今回調査 (2区東西断割り西部)	桃山町島津
L=59.5 m	GL - 0.4 m	調査 7-1 区	桃山町島津
L=56.5 m	GL - 2.4 m	調査 7-2 区	桃山町島津
L=55.1 m	GL - 0.9 m	調査 6-1 区	桃山町永井久太郎
L=53.7 m	GL - 0.3 m	調査 6-2 区	桃山町永井久太郎
L=48.4 m	GL - 3.3 m	調査 19-6 区	桃山福島太夫北町
L = 47.3 m	GL - 4.5 m	調査 19-3 区	桃山福島太夫北町
L = 44.6 m	GL - 5.1 m	調査 19-2 区	桃山福島太夫北町
L = 57.9 m	GL - 0.5 m	調査 23 東部	桃山町毛利長門東町
L=55.6 m	GL - 2.0 m	調査 23 西部	桃山町毛利長門東町
L=44.8 m	GL - 1.2 m	調査 21	桃山町毛利長門西町

・各調査の断面図を参照し作成。

・調査地点は図 16 に一致

伏見城期

伏見城造営に当たり、本調査地を含め周辺一帯は旧地形を大きく変え、その景観を一変させる大規模な普請が行われたことが知られている。本調査地では、調査区北半の傾斜面を多量の土砂による斜め堆積により平坦にし、その上位にさらにひな壇造成のための盛土が行われた状況が確認された。本調査地周辺の呉竹総合支援学校での調査19、桃山高校での調査22・23、京都府総合教育センターでの調査24などで2mを超える非常に厚い造成土が検出され、伏見城の造営に際し大規模な普請が実施された状況が確認されていた。今回の調査では、そういった普請が伊達街道東側上位の範囲である本調査地周辺にも及ぶことが明らかとなった。また、こうした普請は本調査地では5m以上の厚さを持つ非常に大規模な盛土であったとの知見が得られた。

敷地内の区画については、本調査地では大きく2段のひな壇状の壇が造成され、各段は小段や堀・柵などにより更に区分され、短冊状の郭を構成する状況を確認した。壇際に設けられた段差は約2mの比高差があり、これは調査7で確認された状況とほぼ同様である。今回の調査で検出した段差には石垣・板張りやそれらの抜取り痕跡はなく、段差壁面は切岸のように加工されていた。島津屋敷地北西で実施された調査7では、段差際に石垣が設けられていた痕跡が確認でき、屋敷地

内での整備状況に差異がみられる。今回の調査地は屋敷地の中央付近に位置し、外部からあまり目立つ場所ではなく石垣を築くには及ばないとしたのであろうか。

遺構については、塀や柵とみられる柱列など郭内の区画に関するものや処理坑と思われる土坑を中心に検出したが、建物など郭の利用状況を示す遺構は少ない。

本調査地より南西の桃山高校での調査21～23では、整地層の上下で2時期の遺構が検出されているが、本調査区では郭Aで塀110、柱列112・113の切合いを確認している。いずれも郭内の区画に関する遺構と考えられ、ほぼ同一箇所建て替えがあったものと想定される。柱穴の切合い関係から、塀110→柱列112→柱列113の順に古くなると考えられる。柱列112の埋土には焼土や炭化物が含まれ、それが伏見城の合戦や伏見大火に伴うものであれば塀110、柱列112は徳川期の遺構である可能性がある。その他、処理坑の可能性のある焼土や炭化物が埋土に含まれる土坑なども徳川期の遺構であった可能性が考えられる。

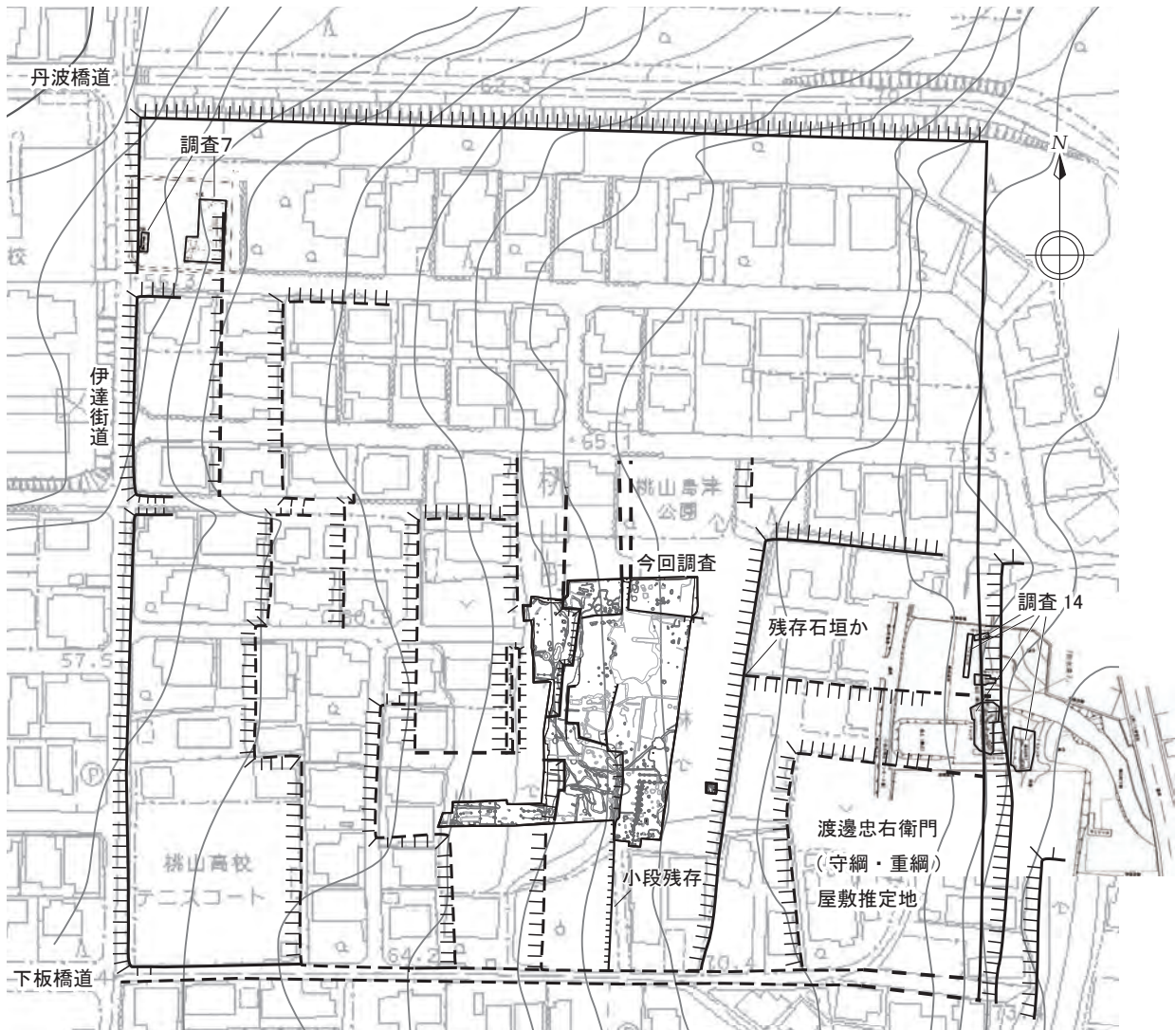
江戸時代

元和九年（1623）に廃城となって以降、再び遺構が確認されるのは18世紀後半以降である。検出した遺構は、壁面に漆喰を施した水溜もしくは肥溜と考えられる土坑や導水と考えられる溝などが中心である。廃城以降、「山城国伏見堀内村検知帳写」などから木幡山西麓の武家屋敷跡は農地化し、周辺には桃が植樹されたことが知られている。今回検出した遺構群も調査地内が農地化した状況を示すものと考えられる。下位壇（郭G・I）では多量の整地土（整地737・738）により段差が埋められ、その整地土は江戸時代後半～幕末の遺物を包含することから、江戸時代の終わり頃には調査直前の地形に近い状態に土地が改変されたものと考えられる。

2 屋敷地の復元

本調査地が位置する島津屋敷地は、木幡山西面の斜面地に立地し、その規模は一辺約230mの正方形プランに復元されている。敷地の東西では現況でも約16mの比高差があり、今回の調査や調査7の調査成果から敷地内で壇造成が行われていたことが確認できる。2件の調査成果や本調査地に東隣する宅地との比高差から壇の比高差は2m前後と考えられ、屋敷地全体では8段程度の壇が造成されていたものと考えられる。これまでの発掘調査成果、大正11年作成「京都市都市計画基本図」中の等高線データ、現況地形などから復元を行ったものが図19である。屋敷地北半の斜面中上位地区が現況では壇の痕跡が確認できず不明な箇所が多いが、最上段は幅50～70m程度、以下は幅20～30m前後の壇が造成されていたものと考えられる。今回の調査地は上位から2～3段目の壇にあたるものと考えられる。本調査地と東隣の敷地との境界は、比高差約3mの段差となっており、この上段部分が島津屋敷地内での最高所となる。第2章掲載の絵図（図5）は、徳川期の大名配置状況が描かれていたとされており、それによれば、屋敷地南東部は「渡邊忠右衛門（守綱・重綱）」の屋敷地となっている。このことから、調査地東側の段差が島津屋敷と渡邊屋敷の敷地境となっていた可能性が高い。

屋敷地内の構造や導線については、現状では成果が少なく不明な点が多い。そのような中で、今



- ・破線は現況地形より推定復元
- ・等高線は大正十一年「京都市都市計画図」(京都大学文学研究科蔵)を参考に作成

図19 島津屋敷地推定復元図 (1 : 2,000)

回の調査では、ひな壇間の段差に横矢掛りと思われる折れや櫓が構築された可能性がある突出部がみられる。また、郭間の通路状遺構は喰い違い虎口のように折れを設け、直線的な導線を避ける。これらから、屋敷地内は防御面を考慮した構造となっていた可能性がある。

以上、今回の調査成果から、屋敷地内は造成されたひな壇を基本単位とし、それを小段や塀などで短冊状の郭に細分していたものと考えられ、また、その構造は防御面を考慮したものとなっていた可能性が高い。斜面地に屋敷地が構築される状況は安土城などにもみられ、安土城においても屋敷地内にひな壇を造成し、各段に建物や通路を構築する状況が確認される。先述のように島津屋敷地内の調査箇所は未だ限られた範囲であり、ひな壇及び郭の構造、門の位置、建物などの配置状況、屋敷地内の導線など不明な点が多く、屋敷地の構造や空間利用の復元には今後多くの成果が必要である。(大西)

3 伏見城下町の都市計画

(1) はじめに

木幡山伏見城の造営は、非常に限られた時間で造成が行われたことが確定されている。

これは文禄五年7月13日に発生した慶長伏見地震により倒壊した指月伏見城に代わり、7月15日に木幡山に新たな縄張りが施工された記録による。しかし、この造営とともに木幡山伏見城の前面を同時に埋めて整地が実施されたとすると、少なくとも826,000 m³の埋め立て工事が必要となる。こうした埋め立てに用いられた土砂は、調査の中で古墳時代の土器が出土する土層が用いられていることから、近接した地区の切土によるとすることができる。しかし、調査区の上段や東側整地土には用いられた砂の重鉍物分析はチタン鉄鉍、角閃石、ザクロ石、ジルコンといった大阪層群の重鉍物が確認された。こうした砂については、他の地域（木津川などの河川堆積物の可能性がある）からの搬入土であることが確認できた。

今回確認された伏見城下町の大規模な盛土による造営を検討するには、調査区のみを検討ではなく、秀吉最晩年に行った伏見地区の城下町建設について検討する必要がある。

(2) 伏見城下町の造営

伏見城下町の造営は、先学の指摘があるように指月伏見城倒壊後に、新たに木幡山伏見城を中心とした造営が開始されたとされる。こうした造営の範囲は、奥井智子氏や森島康雄氏がすでに指摘しているように、現在の伊達街道から西75m地点あたりまで木幡山伏見城期に盛土・整地されたとされている。呉竹総合支援学校や桃山高校などの敷地には、現在でも伊達街道と比高差10mの崖面が残存する。こうした造成土は桃山毛利町の府立桃山高校から伏見区桃山福島太夫町の呉竹総合支援学校まで造成範囲が広がることを想定されてきた。

また、その造成の手法は、2015年京都市文化財保護課による、桃山高校南の推定前田屋敷地内の発掘調査で厚さ2mを超える造成土が確認された。造成の基本単位は、桃山高校の調査で確認された傾斜角30°前後の盛土が行われており、伊達街道西側の盛土造成が同一工法により造成されていることが確認されてきた。

2020年に京都市埋蔵文化財研究所が実施した、呉竹総合支援学校の調査（調査19）では1区、3区、4区、5区、6区で同様な斜め堆積の造成土が確認された。造成土の傾斜角は30°前後で同様の造成手法が確認された。

今回の調査も同一の角度の埋め立てが施されていることから、その造成範囲は桃山町島津も含めた伊達街道以東の段丘面上段範囲まで広がるとすることができる。

この造営の基軸は、東西では筋違道と丹波橋道が造成の基軸となり、南北は伊達街道を基軸として伏見城下町の造成が計画されたと想定ができる。この基軸上に位置する調査としては、昭和58年の京都市による試掘立会調査（調査20）がある。この調査では、SD1やSD2、SD3などの道路側溝とも考えられる溝が報告されている。このうち、SD3には区画される建物が存在したと報告がされる。この建物は、伊達街道上に位置する建物であり、その性格については詳細な検討が必要であ

表5 伏見城関連年表

	主要事項	聚楽第	伏見城
天正 10 年 1582	本能寺の変 (6 月) 山崎の合戦 (6 月) 清州会議 (6 月) 太閤検地始める		
天正 11 年 1583	賤ヶ岳の戦い		
天正 12 年 1584	小牧・長久手の戦い (4 月)		
天正 13 年 1585	豊臣秀吉関白となる (3 月)		
天正 14 年 1586	朝廷から豊臣の姓を受ける、豊臣秀吉に名前を変更 太政大臣に任命される	豊臣秀吉の政庁兼邸宅として着工	
天正 15 年 1587	北野天満宮で大茶会を開く「北野大茶会」	聚楽第 完成 (9 月)	
天正 16 年 1588	足利義昭征夷大將軍職返上 (1 月) 淀城を築き始める	後陽成天皇行幸 (4 月) 徳川家康ら有力大名に忠誠を誓わせる (4 月)	
天正 17 年 1589	各地で大掛かりな検地を行う 豊臣秀吉が天正大判という小判をつくる キリスト教を禁止する	聚楽第で金配り (5 月)	
天正 18 年 1590	小田原征伐 開戦戦勝し天下統一となる		
天正 19 年 1591	秀吉が御土居を築き始める 豊臣秀長が病死する 千利休を堺に追放し、切腹を命じる	秀吉が関白職を甥の豊臣 秀次に譲り太閤となる 秀吉が聚楽第へ入城	
文禄元年 1592	文禄・慶長の役 (1592 ~ 1598)	聚楽町・朱雀町・神泉苑町などの町民移転 (12 月か)	豊臣秀吉が隠居所として指月屋敷を築き始める (8 月)
文禄 2 年 1593	伊達政宗対面 (9 月) 徳川家康・前田利家らと茶会 (9 月)		指月屋敷を本格的な城郭として改築 (10 月頃)
文禄 3 年 1594	吉野の花見を開く	北の丸が秀次により増築	宇治川流路を巨椋池から分離し伏見城の外堀 (10 月 ~) 小倉堤を築き新たな奈良街道整備 豊後橋を設置 淀古城から天守・櫓が移築 (4 月) 豊臣秀吉が伏見城の普請を視察 伏見城下町造成のため社寺や村落を移転する 加賀の前田利家に命じ「槇島堤」を築かせる
文禄 4 年 1595	豊臣秀次が切腹する	秀次を高野山に追放 聚楽第を徹底的に破却 (建物の多くを指月伏見城へ移築)	指月伏見城が完成
慶長元年 1596			文禄 5 年の大地震により指月城が倒壊し、豊臣秀吉も被災 (7 月) 指月城に代わる城として木幡山に築城を開始 (7 月) 本丸完成 (10 月)
慶長 2 年 1597			木幡山伏見城築城完成 天守閣、殿舎完成 (5 月) 秀吉伏見城に移る (5 月 5 日) 茶亭・舟入御殿・学問所完成 (10 月)
慶長 3 年 1598	醍醐の花見を開く		伏見城にて豊臣秀吉死去 (62 歳) (8 月)
慶長 4 年 1599			徳川家康が向島城より伏見城西の丸へ入城 (3 月) 諸大名大阪に引っ越し (9 月)
慶長 5 年 1600	西堀川・阿波堀川開削		関ヶ原の戦いの前哨戦である「伏見城の戦い」により落城し消失 (7 月)
慶長 6 年 1601			徳川家康により伏見城再建 家康入城 (3 月) 伏見に大黒常是を呼び、慶長豆板銀、慶長丁銀鑄造最初の銀座を設置
慶長 7 年 1602			藤堂高虎普請奉行に (6 月) 12 月頃はほぼ再建、家康入城 伏見城番の制度を設ける 大名屋敷大阪から伏見に戻る
慶長 8 年 1603			徳川家康が征夷大將軍宣下を伏見城で受ける 角倉了以が高瀬川開削
慶長 9 年 1604			徳川家康が西国大名に命じて伏見城を修築させる
慶長 10 年 1605			朝鮮使節団を伏見城に迎える (3 月) 徳川秀忠が征夷大將軍宣下を伏見城で受ける (8 月) 伏見城本丸の殿舎の修造をはかる 伏見の城中法制を発する 伏見立売町で火災が起り大名屋敷などが多数焼失



図20 伏見地割図（1：10,000）

る。

この武家屋敷一帯の造営は、森島氏が指摘するように、伏見城下町の造営は大規模な都市計画により造営がなされたと考えられる。

（3）伏見城下町の都市計画

伏見城下町の造成については山田邦和氏や森島氏により詳細な検討がなれている。森島氏の指摘では、基本の造成軸は一辺120mの方形地割を基本として施工されたと指摘される。しかし、その造成時期が指月伏見城期に属するか、木幡山伏見城期に属するかの問題が存在する。

森島氏は『豊臣秀吉と京都一聚楽第・御土居と伏見城』で述べるように、指月伏見城期に、すでに城下町の造成が開始されたとする見解が出されている。こうした指摘を受け、本調査で造成土や比較的初期に掘削された土坑784から出土した炭化物の年代測定を行った。造成土に含まれる炭に

については、231～339年や403～482年などのより古い年代が測定されている。こうした炭は丘陵削平時の他の遺構に起因するものと考えられる。伏見城下町が造営された時期と考えられる遺構である土坑784出土の炭化物は、1579～1624年の年代が測定され、慶長伏見地震以前の年代までさかのぼる可能性がある年代が確認された。こうした年代を積極的に捉えると1600年前後にすでに造成が完了していたと推定でき、伏見城下町の地割は指月伏見城期にその造成が開始されていたと想定できる。

伏見城下町の造営は、山田氏が『変貌する中世京都』などで指摘するように天正十九年に開始される御土居の造営は、京都を大規模な改造を行い、新たな都市として整備し、やや遅れて、同時期に伏見城下も同様の都市計画による造営が行われたと考えられる。

この時期の京内の区割り単位は、新たに南北街路を設け、南北60間（120m）東西30間（60m）の地割に変更された。伏見城下町においても、町家を中心とする地区は南北60間、東西30間の同様の町割りがなされたことが確認できる。こうしたことから、京と伏見は同様な区割りにより、新たに伏見城下が建設されたと考えられる。（図20）

しかし、上段は絵図の敷地図では、島津屋敷地は南北120間、東西120間といった広大な正方形地割になる。同様に福島太夫も正方形区割りを4分割しているので、個々の屋敷地は60間×60間の方形地割になる。下段の短冊地割に対し上段は60間四方の方形地割となり、その地割の原理は下段の城下町割と異なる。

こうした短冊形の地割を基本とするのは、平安京以来の正方形地割が、町家に変換する過程で不利用地として発生していた方形地割りの中央部の解消のため、短冊形の長方形区割りを組み入れたものと考えられる。これは、中世以前の都市構成から、新たな近世的な都市の誕生をなしたものであると考えられている。

京内の天正地割後に造成される、伏見城下町の造営は、京都改造地割を踏襲され、同様の町割りが、伏見城下町の造営にも採用されたものと考えられる。（表5）

こうした造営とともに合わせて実施された土木工事としては、巨椋池を含む大規模な造営があげられる。巨椋池の大規模土木工事は、後の京都の水運や交通路の整備とともに重要な役割を果たすこととなる造営である。

伏見城下の造営は、足利健亮氏が指摘するように「秀吉の伏見経営構想」といった近世京都へ連なる広い範囲を対象とした都市計画構想に基づくものであり、今後その実態を踏まえた課題が存在する。

（4）成果と課題

本調査では、伏見城造営段階に大規模な土木工事による新たな都市造営の姿を見ることができた。こうした造営は発掘調査を実施した地域のみならず、広く伏見城下町の造営や中世京都の造営など様々な歴史の中に位置づけられる遺跡である。

調査で確認された、大規模な谷埋めなどの土木工事においては、どのような手法により、斜め堆積を積み上げたかなどの土木工学を含めた技術の復元も今後の大きな課題である。それには今後の

周辺地域や同時期の遺跡との比較検討が必要になり、今後の調査事例の増加を待ちたい。(和氣)

参考・引用文献

- 足利健亮『地理から見た信長・秀吉・家康の戦略』吉川弘文館 2015年
- 奥井智子『伏見城下の土木事業について』京都市文化財保護課研究紀要 第3号 2020年
- 森島康雄「伏見城城下町の成立過程」『国家成立期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学研究室 1999年
- 森島康雄「考古学からみた伏見城・城下町」日本史研究会『豊臣秀吉と京都』文理閣 2001年
- 森島康雄「伏見城下町の考古学的調査」『ヒストリア 第222号』大阪歴史学会 2010年
- 山田邦和「伏見城とその城下町の復元」日本史研究会『豊臣秀吉と京都』文理閣 2001年
- 山田邦和『変貌する中世都市京都』吉川弘文館 2022年
- 『伏見城跡立入調査報告』大阪歴史学会 2022年
- 『発掘調査20年の記録 安土 信長の城と城下町』滋賀県教育委員会 2009年
- 梶川敏夫「伏見城跡 No.68」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成7年度』京都市文化市民局 1996年
- 奥井智子「伏見城跡・桃山古墳群」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 2020年
- 長谷川 達「伏見城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第8冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983年
- 柴 暁彦「伏見城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第44冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年
- 岩松 保「伏見城跡平成5年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第59冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994年
- 山下大輝「伏見城跡・桃山古墳群」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-10 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
- 松吉佑希『伏見城跡・福島太夫遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021-5 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2021年
- 千喜良 淳、辻 広志ほか『伏見城跡 京都市伏見区桃山町下野 27-1 の発掘調査』株式会社四門 2018年

表6 遺物観察表

掲載 No	器種	器形	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
1	土師器	壺	D13	伏見城造成土	-	(3.5)	-	-	(外) 5YR7/6 橙色 (内) 10YR7/2 にぶい黄橙色	
2	須恵器	甕	D13	伏見城造成土	(長さ) (9.0)	-	-	-	N5/0 灰色	
3	須恵器	蓋	D12	攪乱	13.8	3.9	-	-	N6/0 灰色	
4	土師器	皿	N10・11	溝 403	-	1.1	-	-	7.5YR7/6 橙色	
5	土師器	皿	M16	土坑 15	8.9	1.6	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
6	土師器	皿	M16	土坑 15	9.9	1.8	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
7	土師器	皿	L・M17	土坑 15	10.0	2.1	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
8	土師器	皿	Q15	柱穴 63	10.9	1.7	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
9	土師器	皿	D10	土坑 773	10.9	2.1	-	-	N4/0 灰色	
10	土師器	皿	D10	土坑 773	12.5	1.6	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
11	土師器	皿	D10	土坑 784	12.0	2.1	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
12	土師器	皿	D10	土坑 784	12.5	2.0	-	-	10YR8/2 灰白色	
13	土師器	皿	D10	土坑 784	12.4	2.2	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
14	土師器	皿	S14	土坑 19	10.6	1.9	-	-	5YR7/6 橙色	
15	土師器	皿	A10・11	伏見城造成土	11.9	2.0	-	-	7.5YR7/6 橙色	
16	施釉陶器	天目茶碗	S15	柱穴 31	12.9	(4.1)	-	-	(釉) 7.5YR4/3 褐色 (胎) 2.5Y8/1 灰白色	瀬戸美濃窯
17	土師器	皿	Q12・13	溝 416	5.5	0.8	-	-	7.5YR7/6 橙色	
18	施釉陶器	碗	Q12・13	溝 416	10.2	(4.4)	-	-	(釉) 7.5YR4/3 褐色 (胎) 2.5Y8/2 灰白色	瀬戸美濃窯
19	土師器	皿	D11	土坑 702	10.2	1.5	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
20	土師器	皿	D11	土坑 702	10.8	1.7	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
21	施釉陶器	天目茶碗	D10	土坑 735	11.6	6.5	4.8	-	(釉) 5Y8/1 灰白色 (胎) 2.5Y8/2 灰白色	瀬戸美濃窯
22	施釉陶器	加工円盤	D10	土坑 735	(長さ) 5.4	(幅) 5.2	1.1	-	(釉) 7.5YR3/1 黒褐色 (胎) 2.5Y8/2 灰白色	瀬戸天目茶碗の 高台を転用
23	施釉陶器	皿	D10・11	整地 739	10.2	2.2	5.4	-	(釉) 5Y6/3 オリーブ黄色 (胎) N9/0 白色	瀬戸灰釉
24	染付	碗	C9	土坑 738	12.8	(4.5)	-	-	N8/0 灰色	明染付
25	施釉陶器	皿	Q11・12	溝 422	11.3	2.2	5.6	-	(釉) 2.5Y8/1 灰白色 (胎) 10YR8/4 浅黄橙色	志野
26	施釉陶器	壺	E18	土坑 715	-	(3.5)	9.0	-	(釉) 10YR8/1 灰白色 (胎) 10YR7/4 にぶい黄橙色	
27	青磁	皿	C9	土坑 785	4.5	1.6	2.7	-	(釉) 2.5GY8/1 灰白色 (胎) 2.5Y8/2 灰白色	
28	施釉陶器	碗	B15	土坑 705	10.8	6.0	3.8	-	(釉) 7.5YR5/4 にぶい褐色 (胎) 7.5YR6/4 にぶい橙色	唐津
29	土師器	鍋	F・G9・10	土坑 777	-	(2.0)	-	-	10YR8/4 浅黄橙色	
30	土師器	鍋	F・G9・10	土坑 777	-	(3.3)	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
31	焼締陶器	播鉢	F9・10	土坑 777	-	(3.9)	-	-	5YR5/4 にぶい赤褐色	備前
32	焼締陶器	播鉢	F9・10	土坑 777	-	(4.2)	-	-	(外) 5YR4/3 にぶい赤褐色 (内) 10YR7/3 にぶい黄橙色	備前
33	焼締陶器	壺	F9・10	土坑 777	8.0	(3.3)	-	-	5YR5/2 褐灰色	
34	焼締陶器	鉢	F9・10	土坑 777	-	(4.3)	19.0	-	5YR4/3 にぶい赤褐色	
35	土師器	皿	E11	整地 701	7.0	1.3	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
36	土師器	皿	F11	整地 701	10.3	1.7	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
37	施釉陶器	天目茶碗	F11	整地 701	-	(5.6)	-	-	(釉) 5YR3/3 暗赤褐色 (胎) N8/0 灰白色	瀬戸美濃窯
38	染付	皿	F11	整地 701	-	(1.9)	5.6	-	N9/0 白色	明染付
39	染付	皿	C10	整地 736	13.9	2.9	5.6	-	N8/0 灰白色	初期伊万里
40	白磁	碗	N16	整地 26	11.8	(4.5)	-	-	N9/0 白色	
41	土師器	皿	G10	整地 739	8.5	1.6	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
42	施釉陶器	皿	F・G10	整地 739	10.7	(2.5)	-	-	(釉) 10YR8/2 灰白色 (胎) 10YR7/3 にぶい黄橙色	唐津

掲載No	器種	器形	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
43	染付	皿	F・G10	整地 739	-	(2.6)	15.5	-	N8/0 灰白色	漳州窯
44	白磁	小椀	E10	整地 737	-	(2.4)	2.5	-	N8/0 灰白色	
45	染付	瓶	D11	整地 737	-	(1.9)	4.4	-	5Y8/1 灰白色	初期伊万里
46	施釉陶器	天目茶椀	D11	整地 737	10.8	(6.6)	-	-	(釉) 7.5YR2/1 黒色 (胎) 10YR8/2 灰白色	瀬戸美濃窯
47	施釉陶器	天目茶椀	D10	整地 737	-	(2.9)	4.1	-	10YR8/1 灰白色	瀬戸美濃窯
48	施釉陶器	皿	E・F10	整地 737	-	(2.5)	4.0	-	(釉) 7.5YR5/2 灰褐色 (胎) 7.5YR6/4 にぶい橙色	唐津
49	施釉陶器	皿	E10	整地 737	15.4	2.9	7.2	-	(釉) 5Y6/3 オリーブ黄色 (胎) 2.5Y7/3 浅黄色	唐津
50	施釉陶器	四方鉢	D10	整地 737	-	(4.1)	-	-	(釉) 2.5Y5/2 暗灰黄色 (胎) 2.5Y7/2 灰黄色	絵唐津
51	土師器	鍋	D10	整地 737	-	(2.3)	-	-		
52	染付	皿	D11	整地 737	-	(2.1)	14.4	-	(釉) 2.5GY8/1 灰白色 (胎) 10YR7/3 にぶい黄橙色	漳州窯
53	焼締陶器	播鉢	D10	整地 737	-	(7.2)	-	-	5YR5/2 褐灰色	備前
54	焼締陶器	播鉢	D11	整地 737	28.4	(5.3)	-	-	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	備前
55	焼締陶器	播鉢	D11	整地 737	25.8	(5.5)	-	-	5YR7/8 橙色	信楽
56	瓦質土器	鉢・風炉	E10	整地 737	25.8	(6.2)	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
57	瓦質土器	火鉢	C13	整地 703	31.7	(5.5)	-	-	2.5Y4/1 黄灰色	
58	染付	蓋	D11	土坑 702	7.4	(1.7)	-	-	N9/0 白色	
59	白磁	皿	F・G9・10	土坑 777	9.4	2.7	3.4	-	N9/0 白色	
60	染付	椀	F・G9・10	土坑 777	9.7	(4.0)	-	-	N8/0 灰白色	
61	染付	椀	F9・10	土坑 777	-	(2.7)	4.0	-	2.5Y8/2 灰白色	
62	染付	皿	F・G9・10	土坑 777	-	(2.1)	13.5	-	(釉) 7.5GY8/1 明緑灰色 (胎) 2.5Y8/1 灰白色	
63	染付	椀	E18	土坑 715	9.9	5.3	3.8	-	N8/0 灰白色	
64	染付	椀	N10・11	溝 403	-	(3.2)	3.8	-	N9/0 白色	
65	土師器	皿	F・G9	土坑 776	9.9	1.6	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
66	染付	椀	F・G9	土坑 776	-	(3.6)	3.7	-	N8/0 灰白色	
67	染付	椀	F・G9	土坑 776	9.9	4.7	3.9	-	N8/0 灰白色	
68	染付	椀	N11	溝 402	10.8	5.0	4.6	-	(釉) 5GY8/1 灰白色 (胎) N8/0 灰白色	
69	白磁	皿	O・P14	土坑 11	19.0	(2.2)	-	-	N9/0 白色	
70	染付	椀	L9	土坑 431	9.8	4.3	3.4	-	N9/0 白色	
71	土製品	伏見人形	L9	土坑 431	4.7	2.9	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	
72	染付	蓋	C8	整地 737	10.8	3.3	-	-	(釉) 10GY8/1 明緑灰色 (胎) N8/0 灰白色	
73	染付	筒形椀	E・F10	整地 737	-	(1.7)	3.8	-	2.5Y8/1 灰白色	
74	土製品	泥面子	E・F10	整地 737	(長さ) 2.6	(幅) 2.5	-	0.6	7.5YR7/4 にぶい橙色	
75	施釉陶器	椀	D11	整地 737	-	(3.0)	4.6	-	(釉) 10YR7/4 にぶい黄橙色 (胎) 10YR8/1 灰白色	
76	施釉陶器	椀	D11	整地 737	-	(1.5)	5.2	-		
77	施釉陶器	土瓶	E・F8	整地 737	11.8	(2.6)	-	-	(釉) 10GY7/1 明緑色 (胎) 2.5Y8/2 灰白色	
78	土製品	泥面子	R3・4	土坑 608	(長さ) 3.4	(幅) 3.45	-	1.1	7.5YR7/4 にぶい橙色	
79	染付	椀	R3・4	土坑 608	7.1	3.5	2.4	-	N9/0 白色	
80	施釉陶器	椀	Q11・12	溝 422	10.0	(3.1)	-	-	(釉) 5Y7/2 灰白色 (胎) 2.5Y8/2 灰白色	
81	白磁	皿	E10	整地 739	4.2	1.8	1.6	-	N8/0 灰白色	紅皿
82	白磁	皿	D10	整地 701	4.6	1.4	1.2	-	N8/0 灰白色	紅皿
83	施釉陶器	鉢	E11	整地 701	19.3	(2.4)	-	-	(釉) 7.5YR4/3 褐色 (胎) N7/0 灰白色	
84	染付	皿	P12・13	溝 405	-	(2.9)	8.0	-	(釉) 7.5GY8/1 明緑灰色 (胎) N9/0 白色	

掲載 No	器種	器形	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
85	瓦質土器	香炉・盤?	P12・13	溝 405	(長さ) (11.6)	(幅) (6.1)	-	4.9	N3/0 暗灰色	
86	瓦	道具瓦	O・P14	土坑 11	(長さ) (1.2)	(瓦当径) (12.0)	-	-	N3/0 暗灰色	菊丸瓦
87	瓦	軒丸瓦	O10	土坑 404	(長さ) (4.4)	(瓦当径) (9.5)	-	-	N3/0 暗灰色	
88	瓦	軒丸瓦	C9	土坑 738	(長さ) (2.5)	(高さ) (4.1)	-	-	N3/0 暗灰色	
89	瓦	軒丸瓦	E・F10	整地 737	(幅) (4.4)	(瓦当径) (13.0)	-	-	N4/0 灰色	
90	瓦	軒丸瓦	D11	整地 737	(長さ) (2.0)	(瓦当径) (12.8)	-	-	N3/0 暗灰色	
91	瓦	軒丸瓦	S16・17	土坑 18	(長さ) (2.1)	(瓦当径) (14.6)	-	-	N4/0 灰色	
92	瓦	軒丸瓦	M・N16	土坑 27	(長さ) (3.4)	(瓦当径) 14.6	-	-	N3/0 暗灰色	
93	瓦	軒平瓦	O10	土坑 404	(長さ) (5.2)	(瓦当厚) 4.6	-	-	N3/0 暗灰色	
94	瓦	軒平瓦	D10	整地 737	(長さ) (3.2)	(幅) (8.8)	-	-	N3/0 暗灰色	
95	瓦	軒平瓦	D10・11	土坑 735	(長さ) (3.8)	-	-	4.6	N5/0 灰色	
96	瓦	軒平瓦	F・G9・10	土坑 777	(長さ) (3.4)	(幅) (6.4)	-	-	N4/0 灰色	
97	瓦	軒平瓦	F・G10	土坑 777	(長さ) (5.2)	(瓦当厚) 4.2	-	-	N6/0 灰色	
98	瓦	軒平瓦	D11	土坑 702	(長さ) (4.1)	-	-	3.7	N4/0 灰色	
99	瓦	軒平瓦	F・G9・10	土坑 777	(長さ) (4.2)	(幅) (8.9)	-	-	N4/0 灰色	
100	瓦	道具瓦	F・G9・10	土坑 777	(長さ) (6.6)	(幅) (8.3)	-	2.5	N4/0 灰色	飾瓦か
101	瓦	道具瓦	Q16	土坑 108	(長さ) (13.5)	(幅) (15.0)	-	3.4	N3/0 暗灰色	飾瓦か
102	瓦	金箔瓦		表採	(長さ) (15.3)	(幅) (18.4)	-	5.2	N3/0 暗灰色	
103	瓦	金箔瓦	C10	土坑 738	(長さ) (14.8)	(幅) (18.8)	-	2.9	N4/0 灰色	
104	瓦	金箔瓦	O16	柱穴 22	(長さ) (4.4)	(幅) (8.6)	-	2.9	N3/0 暗灰色	
105	瓦	丸瓦	D10	土坑 784	(長さ) 32.5	(幅) 17.6	(高さ) 8.7	2.4	N3/0 暗灰色	
106	瓦	丸瓦	F・G9・10	土坑 777	(長さ) (30.4)	(幅) (13.7)	(高さ) 8.3	-	N4/0 灰色	
107	金属製品	鉄砲玉	S14	ピット 19	(長さ) 1.2	(幅) 1.2	-	(0.9)		鉛製品
108	金属製品	鉄砲玉	D10・11	整地 739	(長さ) (1.2)	(幅) 1.7	(高さ) 1.3	-		鉛製品
109	金属製品	不明	G9	整地 737	(長さ) (5.5)	(幅) (5.1)	-	0.9		鉄製品
110	金属製品	刀子	O17	土坑 108	(長さ) (10.8)	(幅) (1.7)	-	0.7		鉄製品
111	金属製品	刀子	S14	ピット 19	(長さ) (15.9)	(幅) (1.9)	-	0.2		鉄製品
112	金属製品	鏃	G10	整地 737	(長さ) 16.8	(幅) 1.2	-	1.2		鉄製品
113	金属製品	不明(刀子?)	G11	整地 701	(長さ) (7.5)	(幅) 1.1	-	0.3		鉄製品
114	金属製品	不明	G9	整地 737	(長さ) 0.8	(幅) 0.9	-	0.1		銅地に銀箔押
115	金属製品	不明	S14	ピット 19	(長さ) 1.6	(幅) 1.7	-	0.7		銅製品

掲載 No	器種	器形	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
116	金属製品	不明	G9	整地 737	(長さ) (2.3)	(幅) 2.2	-	0.1		銅製品
117	金属製品	釘	S14	ビット 19	(長さ) (5.7)	(幅) (1.0)	-	0.6		鉄製品
118	金属製品	釘	Q・R8・9	土坑 610	(長さ) (4.6)	(幅) (2.8)	-	1.2		鉄製品
119	金属製品	釘	S14	ビット 19	(長さ) (4.4)	(幅) (1.3)	-	1.4		鉄製品
120	金属製品	釘	S14	ビット 19	(長さ) (4.9)	(幅) (0.9)	-	0.5		鉄製品
121	金属製品	釘	S14	ビット 19	(長さ) 4.3)	(幅) (1.1)	-	1.2		鉄製品
122	金属製品	釘	L14	ビット 91	(長さ) (6.2)	(幅) (1.3)	-	1.2		鉄製品
123	金属製品	釘	E10	整地 737	(長さ) (4.1)	(幅) 0.6	-	0.8		鉄製品
124	金属製品	鏝	Q・R8・9	土坑 610	(長さ) (6.2)	(幅) (4.7)	-	1.4		鉄製品
125	金属製品	鏝	Q・R8・9	土坑 610	(長さ) (5.2)	(幅) (2.5)	-	1.0		鉄製品
126	金属製品	銭貨	F10	整地 737	(長さ) 2.5	(幅) (2.1)	-	1.5		寛永通宝
127	石製品	砥石	C10	土坑 738	(長さ) (19.6)	(幅) (11.7)	-	5.6		砂岩
128	石製品	砥石	M17	整地 26	(長さ) (8.4)	(幅) 5.7	-	3.2		頁岩
129	石製品	砥石	L14	ビット 91	(長さ) (10.2)	(幅) 5.1	-	1.1		頁岩
130	石製品	硯	C9	整地 737	(長さ) (8.4)	(幅) (3.9)	-	1.9		

附章

1. 伏見城跡の盛土堆積物に関する検討

株式会社 古生態研究所

はじめに

今回の調査地は、伏見城跡の島津屋敷地に位置する。屋敷地の遺構の基盤をなす堆積物は、調査地南部がひな壇状の平坦地造成に伴う切土された段丘堆積物、調査地北部が段丘斜面地の平坦地造成に伴う埋め立て土からなる。今回の報告では、屋敷地構築に際して実施された地業に関する情報を得ることを目的として、斜面地の埋め立て土の施工過程、および形成年代、材料の由来に関する情報を得ることを目的として、出土炭化物の放射性炭素年代測定と炭化材の樹種同定、埋め立て土に使用されている砂質堆積物の由来に関する情報を得ることを目的として、砂粒の鉱物組成を検討する。

1 調査地の概要

調査地が位置する桃山丘陵周辺の地形・地質は、植村（1999）によると、東側より、固結した基盤岩（中生代の丹波層群）からなる山地、大阪層群からなるなだらかな丘陵地、最終氷期以前に形成された高位段丘、最終氷期に形成された低位段丘、これら上流域からの土砂流出により形成された扇状地、完新世段丘面である氾濫原Ⅰの順に配列することが指摘されている（図1）。このうち扇状地では南南西-北北東方向に伸びる、西向きに傾斜する桃山断層の活撓曲（断層による変位が軟らかい地層内で拡散し、地表には段差ではなくたわみとして現れたもの）が確認され、また、高位段丘面にも、



図1 調査地の位置

南南西－北北東方向にのびる、人工改変により位置がやや不明瞭な活断層が確認されている。今回の調査地は、高位段丘面の位置不明瞭な活断層南端に位置している。なお、調査地の段丘について、脇田ほか（2013）は後期更新世前半に形成された中位段丘に区分している。また、中塚（本報告書）は高位段丘に区分し、段丘面の起伏が構造地形であることを指摘し、調査地内に変動微地形（断層の可能性がある）として南南西－北北東方向にのびる F3、F4 を認めている。

現在の調査地は西向きに傾斜する平坦な斜面地で、竹林として土地利用されている。発掘調査の結果、この平坦面は安土桃山時代の人工改変により形成されたものであることが確認された。調査地北半部が北東向きの斜面地を埋め立てた人工造成地、調査地南半部が高位段丘構成層の切土面からなる。

2 調査地の層序

調査地の層序模式断面図を図2、調査地の断面写真と主な構造を図3～6に示す。調査地の堆積層は現地調査および調査時に撮影された画像データの観察結果から、1層～4層に大区分される。各層の層相を以下に示す。なお、1区については現地調査が十分でなく調査時に撮影されたオルソ画像を中心に検討した。なお、堆積物や偽礫の粒径区分はWentworth（1922）を参照した。

1層：現在の表土。竹林として土地利用されていたため、上部0.15m程度は地下茎などの擾乱が著しく、初生の構造が確認できないが、下部は腐植質泥質砂（土壌）の偽礫（ブロック土）の集合からなる、人工的な再堆積物であることが確認される。礫支持（隣り合う偽礫が互いに接触した状態）で亜角～角塊状を呈する亜大礫サイズ以細の大小の偽礫の集合からなり、偽礫どうしが癒着している。少量の細礫～中礫が混じる。下位の2-1層との層界は、東側の高所では1層の土壌化の影響で不明瞭となっているが、調査地西側の低所では比較的明瞭な層界をなして積層している。

2層：安土桃山時代の遺構の基盤をなす、島津屋敷地構築に伴う地業層。調査地南半部の切土面上の盛土と、調査地北部の北東向きの斜面地の埋め立て土が相当する。施工状況から、上位より2-1層、2-2層、2-3層に区分した。

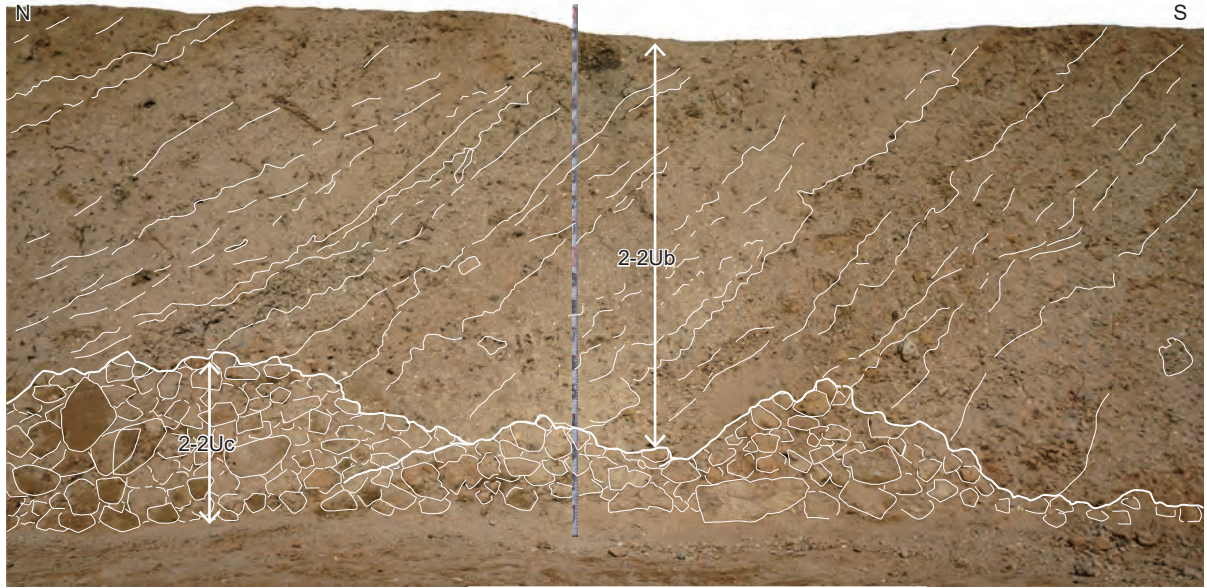
2-1層は、調査地南部（1区）の切土面上の盛土と2区斜面地の埋め立て土最上位の盛土である。水平方向に積層する層状盛土で、上面が安土桃山時代の地表面に相当する。盛土に利用されている堆積物は多様で、腐植質泥質砂（土壌）、高位段丘構成層由来とみられる黄褐色～褐色泥質砂・砂・礫、大阪層群由来の可能性のある泥などを材料とする大小の偽礫とその混合土からなる。盛土材料の選択や積み上げ方は、砂質堆積物と泥質堆積物の混合土を煩雑に積み上げている箇所も認められるが、基本的には砂質堆積物と泥質堆積物の順に層状に積み上げた後、填圧・延圧による締固めを行い、この施工の繰り返しにより盛り上げ、平坦面を形成している。特に最上部は、基質支持堆積物のようにみえるほど、填圧、延圧などの圧密により、盛土材料である泥質堆積物の偽礫の輪郭が不明瞭となっている。また、調査地北西部（2区西部）では、厚く堆積する層状盛土中に、土地の水はけを考慮したとみられる、基質堆積物を含まない礫支持の礫層（細粒の大礫・中礫）



図3 調査区東壁の堆積状況



図4 東西断面写真と主な構造



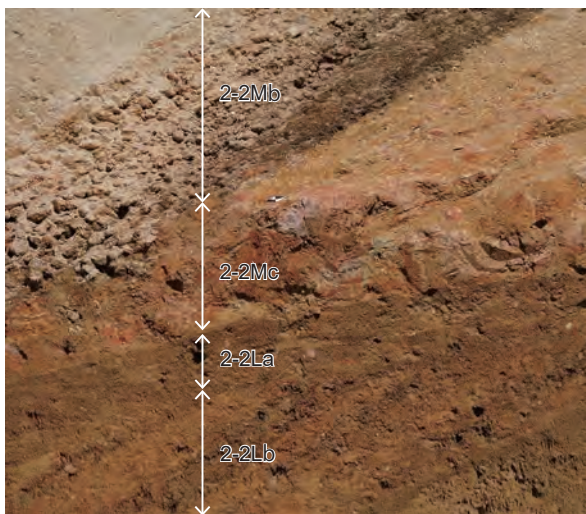
2区西部 上段盛土の堆積状況



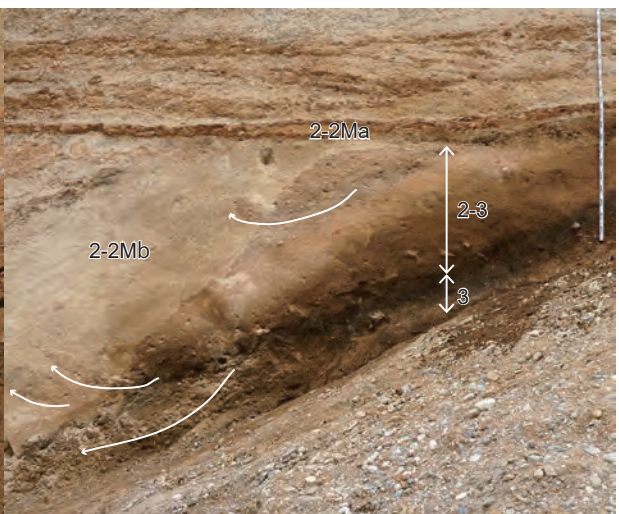
2区東壁 上段・中段盛土の境界



2区東壁 上段・中段盛土の境界（左写真口範囲）

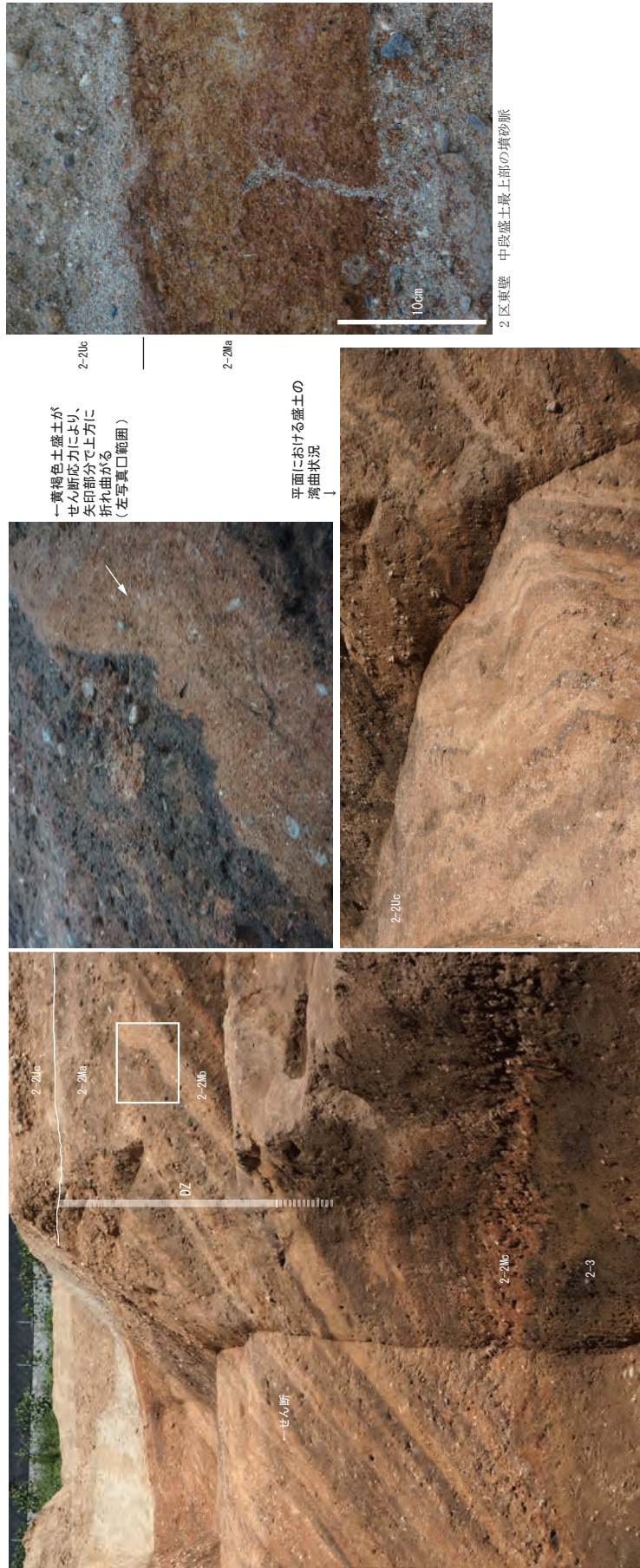
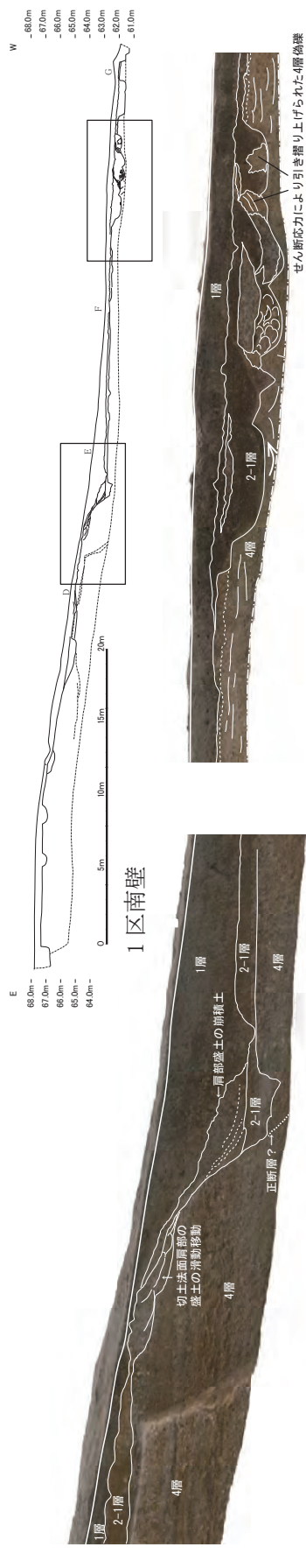


2区東壁 下段・中段傾斜層状盛土の境界



2区東壁 2-3層・2-2層盛土の境界

図5 盛土の堆積状況



2区東西断削(西から撮影) DZ:変形ゾーン 上部に向かって変形が顕著となる。

2区東壁 地震前の押し引きによる中段盛土上部の変形

2区東壁 中段盛土最上部の積砂脈

図6 調査地で確認された変形構造

の盛土を挟在する部分も確認される。このような場所による盛土施工状況の多少の差異については、発掘調査成果を踏まえた複合的な検討が必要である。また、調査地南西部の2-1層上部は腐植が集積し土壌化が進行している。2-1層上面が屋敷地機能面に相当することから、屋敷地が放棄された後、植生に覆われる場所に変化したことが示唆される。

2-2層は、2区北東向き斜面地の切土後の空間を充填している盛土で、一連の工程の繰り返しにより形成された盛土である。盛土に使用されている堆積物は、風化した礫、砂、泥質砂～砂質泥の偽礫、腐植質泥質砂（土壌）などである。施工状況の違いから、上位より、2-2a、2-2b、2-2c層に細分される。

2-2a層は、下記する2-2b層上面の多少の起伏のある平坦面を覆う水平方向の層状盛土である。最上部は風化した泥質堆積物を材料とする盛土で、填圧・延圧により固く締まっている。この泥質堆積物の下位は砂、礫、泥質砂偽礫などの粗粒な砂質堆積物を使用した盛土で、締め固めが行われていない場合が多い。このような砂質堆積物と泥質堆積物の盛土層を繰り返し積層させている場所もある。

2-2b層は、斜面（切土）壁と平行に傾斜する（おおよそ1割5部勾配：傾斜角35度）、厚さ数10cmで、斜面壁から側方付加するように積層させている傾斜する層状盛土である。傾斜する層状盛土の各単層は、同質の材料を使用し、一定の幅を保ちつつ、下部から上部にかけて積み上げている。また積み上げ時に斜面外側から多少の締め固めを行っている。傾斜する層状盛土単層の平面形は、両端がすぼまっている板状を呈する。中段盛土上部では斜面外側方向に多少湾曲しているが、後述する地震動による変形である（図6）。

2-2c層は、2-2b層の傾斜する層状盛土の法尻部分の小堤盛土である。盛土法面に平行方向に設置されている。小堤盛土の材料は、礫支持で、大・巨礫サイズの垂角～角塊状の偽礫が使用されている。主に泥質堆積物の偽礫を使用しているが、砂質堆積物の偽礫を使用している箇所もある。基質は偽礫と同質の場合、異なる場合の双方があるが、概して砂からなる場合が多い。上部は偽礫が多少崩壊・細粒化しているが、中・下部はほとんど変形しておらず、初生構造を残す。

2-2層は、以上の2-2c層・2-2b層盛土の繰り返しと、その上面に2-2a層を盛土する、一連の工程で形成された盛土堆積物（以下、傾斜層状盛土と呼ぶ）で、斜面地東部では3段の傾斜層状盛土（2-2U・M・L層）の累重が確認されている。各段階の垂直層厚は、下段（2-2L層）が0.6m以上（下限が調査底面のため確認できていない）、中段（2-2M層）が約2.5m、上段（2-2L層）が約1.3mである。斜面地西部では下段の盛土は存在せず、中段・下段の2段からなる。

2-3層は、斜面地の切土面上の盛土である。調査地西部の東西断割トレンチでは、3・4層の段切り面上に積層する、黄褐色～暗褐色砂質泥・泥質砂の偽礫からなる盛土堆積物である。層厚は最下段面で約1m、最上段で上段で0.2m程度、盛土後の上面は緩斜面を形成している（図4）。一方、調査地東部では2区斜面肩部の切土された黒色腐植質土壌面上に、褐色泥質砂土、腐植を含む暗褐色泥質砂、明褐色泥質砂、中礫・粗粒砂混じり泥質砂を材料とする盛土が前置層状に積層しており、斜面下方側は2-2層形成期に切土されている。

3層：高位段丘構成層を被覆する土壤生成が進行した泥質砂層が相当する。調査地北部（2区）の北東向き斜面地で確認される。上部が切土されているため、残存層厚は0.15m程度である。後述するように腐植質土壌中の炭片は、古墳時代の年代を示している。

4層：高位段丘構成層。調査地南部の1区側は葉理構造の発達する砂～砂礫層からなる河川堆積物である。下位は基質支持の砂礫層からなる。堆積物全体は通常の河川堆積物より淘汰が悪く、大きさが周囲と不調和な巨礫サイズの偽礫が取り込まれている層準も確認される。また風化が進行している。礫のファブリックから、南西から北東方向の古流向が示唆される。上部は斜交葉理が発達する花崗岩質の砂層～砂礫層からなり、南北断面では南から北方向の古流向を示すフォーセット層理が確認される。一方、調査地北部の東西立割トレンチでは、平行葉理構造をなす泥質砂と砂礫層の積層からなる。逆級化成層（増田・伊勢屋,1985）をなす層準もあり、層相から氾濫堆積物と推定される。4層は、安土桃山時代の造成に伴い切土されているため、本来の層厚は不明である。切土された砂質堆積物は、北半部（2区）の斜面地などの埋め立て地の材料として利用されている可能性もある。

3 盛土出土炭化物の年代測定と炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、安土桃山時代の盛土堆積物(2層)から出土した炭化材・炭化植物遺体5点(試料1～3・5・6)、盛土堆積物直下の3層の土壤層から出土した炭化物1点(試料7)、盛土上面のSK784遺構埋土から出土した炭化材1点(試料SK784)の合計7点である(図2)。このうち、同定可能な大きさの破片を確保できた試料番号1～3と試料SK784の4点について樹種同定を実施する。

(2) 分析方法

放射性炭素年代測定：試料は、メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除いた後、調製後、加速器質量分析計(NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

結果は、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行った ^{14}C 年代(慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した値と、暦年較正に用いた下1桁を丸めていない値)、暦年較正年代結果を示した一覧表として示す。また、各試料の較正年代確率密度分布、Intcal較正曲線に配した較正年代確率密度分布図等を図示する。

なお、 ^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代で、 ^{14}C 年代(yrBP)は、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用して算出する。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。また、暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いも

のを算出することである。¹⁴C年代の暦年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20、暦年較正結果が1950年以降にのびる試料については Post-bomb atmospheric NH2) を使用した。Post-bomb atmospheric NH2 は、SummerITCZ ~ 40° N (夏の熱帯収束帯から北緯 40° 以南) の地域の試料に適用できる較正曲線である。

樹種同定: 炭化材を自然乾燥させた後、木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の3断面について割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強する。走査型電子顕微鏡(低真空)で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

(3) 結果

放射性炭素年代測定・暦年較正結果および樹種同定結果を表1に示す。また、各試料の較正年代確率密度分布を図7、木材組織写真を図版1に示す。以下に試料別に結果について記載する。

表1 各試料の¹⁴C年代値・暦年較正結果および炭化材の樹種

試料番号 層位	試料状態 種類	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	暦年較正用 (yrBP $\pm 1\sigma$)	暦年較正結果(cal BC/AD)		Code No.
					1 σ (68.3%)の範囲	2 σ (95.4%)の範囲	
試料1 2区東西断割南壁 中段盛土中部	炭化材 (樹皮無:不定形破片) ヒノキ 年輪数61年	-21.00 \pm 0.18	1630 \pm 20	1632 \pm 21	410-436 cal AD (41.1%) 465-475 cal AD (8.7%) 501-508 cal AD (5.0%) 516-530 cal AD (13.5%)	403-482 cal AD (64.8%) 491-538 cal AD (30.6%)	PLD- 50383
試料2 2区東西断割南壁 中段盛土中部	炭化材 (樹皮無:節部分破片) ヒノキ 年輪数6年	-23.56 \pm 0.20	1780 \pm 20	1781 \pm 20	240-255 cal AD (17.9%) 286-325 cal AD (50.3%)	231-261 cal AD (27.8%) 277-339 cal AD (67.6%)	PLD- 50384
試料3 2区東西断割北壁 中段盛土中部	炭化材 (樹皮無:破片:約7mm) ヒノキ 年輪数8年	-23.87 \pm 0.17	1700 \pm 20	1699 \pm 21	265-272 cal AD (6.6%) 350-405 cal AD (61.6%)	258-280 cal AD (16.5%) 333-414 cal AD (78.9%)	PLD- 50385
試料5 2区東壁下段盛土	炭化植物遺体片	-37.51 \pm 0.16	170 \pm 20	171 \pm 21	1670-1686 cal AD (12.2%) 1733-1779 cal AD (37.1%) 1799-1805 cal AD (4.9%) 1928-1946 cal AD (14.1%)	1662-1695 cal AD (17.9%) 1724-1813 cal AD (52.1%) 1838-1878 cal AD (4.6%) 1915-1953 cal AD (20.8%)	PLD- 50386
試料6 2区東西断割トレンチ 2-3層盛土	炭化植物遺体片	-27.99 \pm 0.19	150 \pm 20	151 \pm 19	1674-1695 cal AD (12.2%) 1725-1744 cal AD (12.0%) 1750-1765 cal AD (9.0%) 1799-1812 cal AD (8.6%) 1839-1844 cal AD (2.2%) 1854-1877 cal AD (6.4%) 1916-1943 cal AD (17.8%)	1668-1700 cal AD (15.1%) 1721-1781 cal AD (28.7%) 1796-1816 cal AD (9.9%) 1833-1889 cal AD (19.7%) 1908-1953 cal AD (22.1%)	PLD- 50387
試料7 2区南北断割東壁 高位段丘被覆層 土壌層(3層)	炭化材 (小破片)	-26.25 \pm 0.16	1740 \pm 20	1739 \pm 20	252-290 cal AD (31.0%) 320-361 cal AD (37.3%)	247-383 cal AD (95.4%)	PLD- 50388
SK784 埋土 (2-層上面)	炭化材 (樹皮有:ミカン割状) アワブキ属 年輪数7年(半径3.5cm)	-25.95 \pm 0.16	375 \pm 20	376 \pm 19	1460-1500 cal AD (50.7%) 1600-1615 cal AD (17.6%)	1454-1521 cal AD (64.6%) 1579-1624 cal AD (30.9%)	PLD- 50389

1) 暦年較正年代の計算は OxCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用。較正曲線データは IntCal20 較正曲線 (Reimer et al. 2020) を用い、暦年較正結果が1950年以降にのびる試料については Post-bomb atmospheric NH2 (Hua et al 2021, Reimer et al 2020) を使用。

2) 同定された炭化材分類群の解剖学的特徴

・ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか〜やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型〜トウヒ型で、1分野に1〜3個。放射組織は単列、1〜10細胞高。

・アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科

散孔材。道管は単独または2〜4個が放射方向に複合して散在する。道管の穿孔板は単穿孔板および段数の少ない階段穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、1〜4細胞幅、1〜60細胞高。

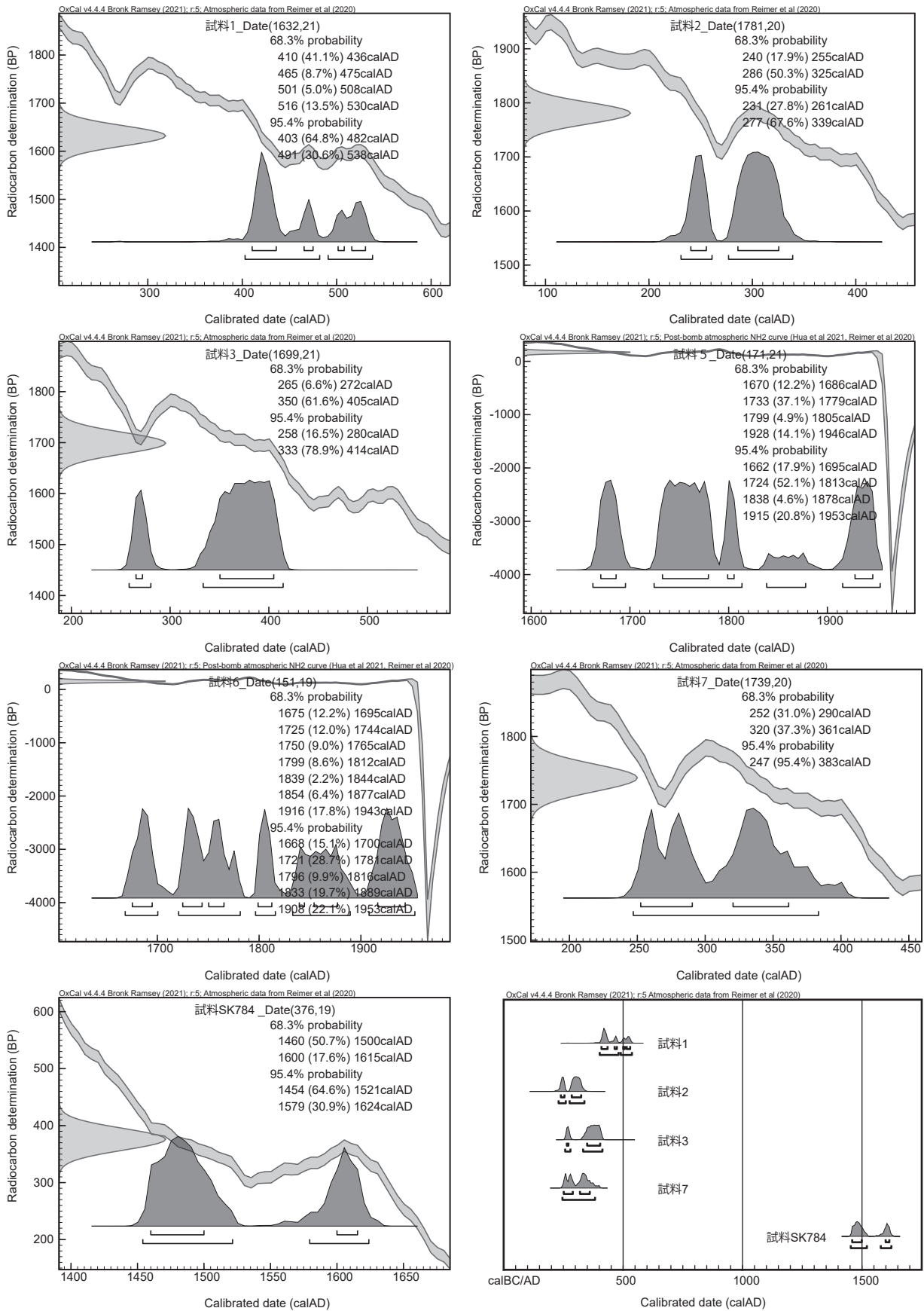
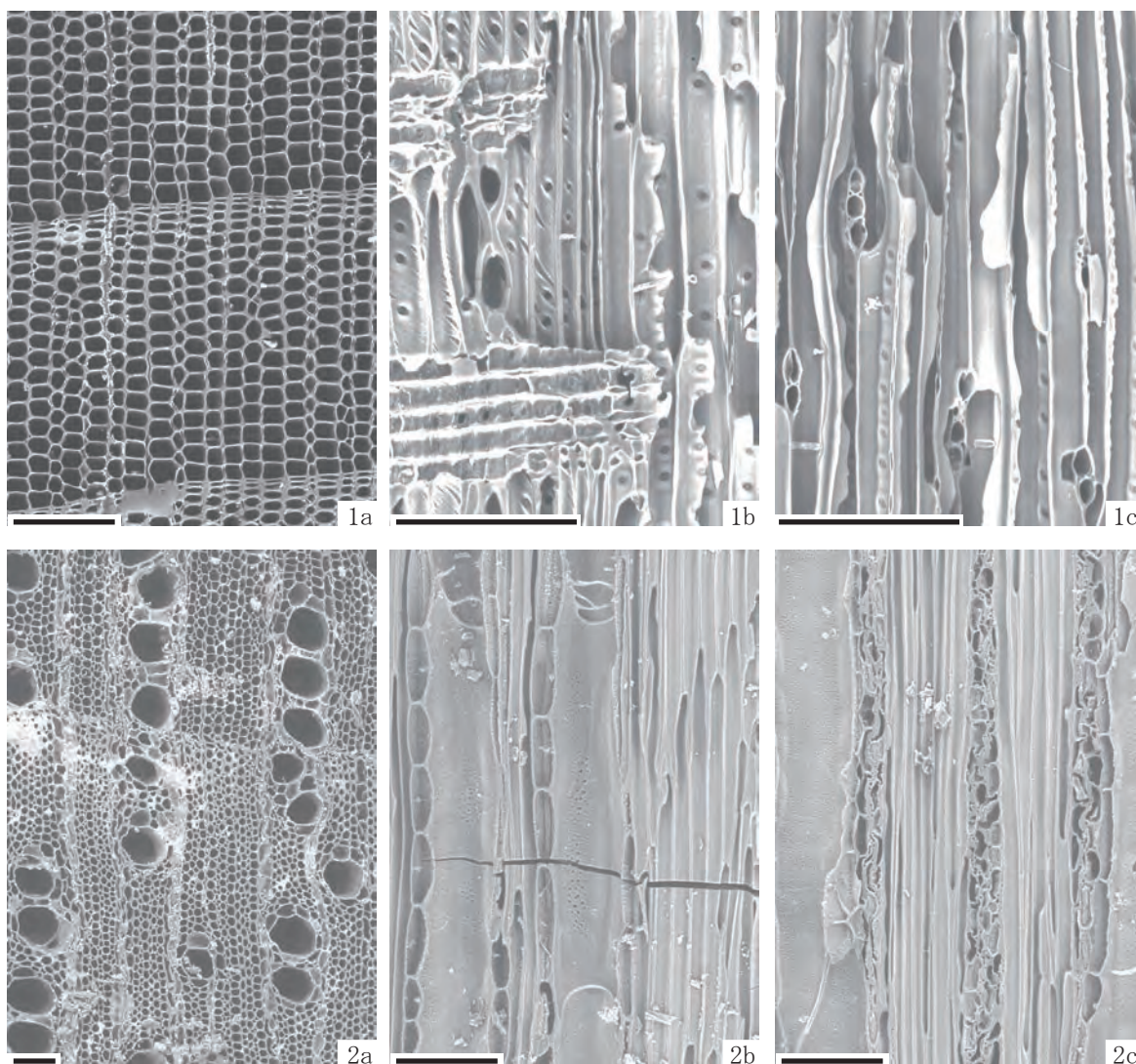


図7 各試料の暦年較正確率密度分布



1. ヒノキ (試料番号①) 2. アワブキ属 (SK784) a:木口, b:柁目, c:板目 写真スケール: 0.1mm

図版 1 炭化材の電子顕微鏡写真

試料 1 (2区東西断割南壁中段盛土中部 2-2Mb 層の腐植質土壤盛土中の炭化材)

炭化材はヒノキに同定された。 ^{14}C 年代値は $1630 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代は Intcal 較正曲線の凹凸が著しい範囲にあたり絞り込むことが難しく、 2σ で 403-538 cal AD と幅のある年代を示す。

試料 2 (2区東西断割南壁中段盛土 2-2Mb 層の腐植質土壤盛土中の炭化材)

炭化材はヒノキに同定された。 ^{14}C 年代値は $1780 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代は Intcal 較正曲線の凹凸が著しい範囲にあたり絞り込むことが難しく、 2σ で 231-339 cal AD と幅のある年代を示す。

試料 3 (2区東西断割北壁中段盛土 2-2Mb 層の腐植質土壤盛土中の炭化材)

炭化材はヒノキに同定された。 ^{14}C 年代値は $1700 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代は Intcal 較正曲線の凹凸が著しい範囲にあたり絞り込むことが難しく、 2σ で 258-414 cal AD と幅のある年代を示す。

試料 5 (2区東壁下段盛土 2-2Lb 層中の炭化材)

^{14}C 年代値は $1630 \pm 20\text{yrBP}$ を示す。暦年較正年代は 2σ で 403-538 cal AD と幅のある年代を示す。

試料 6 (2区東西断割トレンチ中段盛土 2-2Mb 層最下部、腐植質土壤偽礫盛土中)

^{14}C 年代値は $150 \pm 20\text{yrBP}$ を示す。暦年較正年代は 2σ で 1668-1953 cal AD と幅のある年代を示す。

試料 7 (2区南北断割東壁高位段丘被覆層：斜面肩部の土壤化層準 3層)

^{14}C 年代値は $1740 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代は Intcal 較正曲線の凹凸が著しい範囲にあたり絞り込むことが難しく、 2σ で 247-383 cal AD と幅のある年代を示す。

試料 SK784 (2区盛土 2-1層上面の土師窯遺構の供伴炭化材)

炭化材はアワブキ属に同定された。 ^{14}C 年代値は $375 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代は Intcal 較正曲線の凹凸が著しい範囲にあたり絞り込むことが難しく、 2σ で 1454-1624 cal AD と幅のある年代を示す。

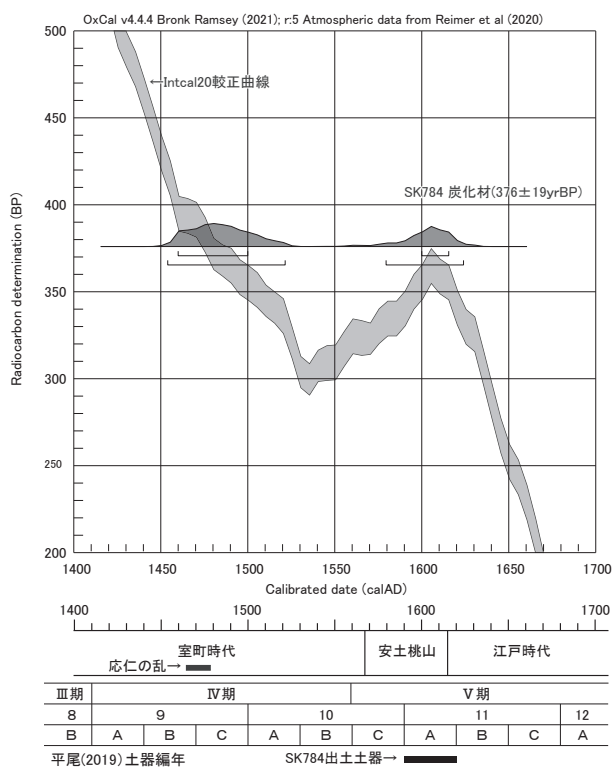


図8 暦年較正結果と出土遺物の編年の比較

(4) 考察

調査地北部の斜面地の盛土層のうち、腐植質土壌を材料とする盛土中から出土した炭化材(試料 1～3)は、いずれも樹皮の無い破片で、全てヒノキに同定された。ヒノキは尾根筋等に生育するほか、植栽・植林されることもある常緑高木で、その木材は木理が通直で割裂性および耐水性が高く、日本の林業で最も重要な種類のひとつとされる。これら炭片の ^{14}C 年代値は、 $1630 \pm 20\text{yrBP} \sim 1780 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年代で古墳時代前・中期を示した。また、斜面地肩部の高位段丘層を被覆する腐植質土壌層中の炭片(試料 7)の年代値は、 $1740 \pm 20\text{yrBP}$ を示し、暦年代で古墳時代前・中期を示した。このように盛土材料として利用されている腐植質土壌と、段丘構成層を被覆堆積物の腐植質土壌の炭片の年代値は、概ね一致しており、切土により生じた段丘構成層を被覆する土壌化した堆積物が利用されていることが推定される。調査地は桃山古墳群に含まれる場所に位置しており、炭化材は当該期の人間活動に起因するものの可能性が高い。ただし、得られた年代値は、年輪による古木効果を考慮する必要があり、下限年代として捉えておく必要がある。

また、腐植質土壌を材料とする盛土中より出土した植物遺体(試料 5・6)の年代値は、 ^{14}C 年代値で $170 \pm 20\text{yrBP}$ 、 $150 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年代で 17世紀後半～20世紀前半を示し、盛土構築時期である安土桃山時代より明らかに新しい年代を示した。盛土断面には盛土上位層準から連続する根成孔隙が多数分布しており、試料は 17世紀以降に上位層準から混入したものと推定される。

一方、安土桃山時代の遺構である SK784 土坑から出土した炭片は、樹皮の残る半径 3.5 cm ミカン割状を呈する材で、アワブキ属に同定された。アワブキ属には、水分条件の良い場所に生育す

る落葉高木のアワブキ、落葉低木のミヤマハハソ、常緑広葉樹林の林床・林縁に生育する常緑小高木のヤマビワなどが含まれる。いずれの木材も材質はやや重硬な部類に入り、燃料材として優良とは言えない。遺構埋土の出土状況から、炭片は土器などともに土坑内に廃棄されたものと考えられている。調査地一帯が城下町であり、必需物資としてアワブキ属なども燃料材として利用されていた可能性が示唆される。炭片の¹⁴C年代値は $375 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年代は15世紀後半から17世紀初頭と幅のある年代を示した。樹皮が残存していたことから、枯死年代、すなわち利用年代を示していると判断される。本遺構から出土した遺物は、平尾（2019）による京都の土師器編年の11A（西暦1590～1620年）に対比され、今回の暦年代範囲の後半に一致していることが認識される。

4 斜面地の盛土堆積物に使用されている砂質堆積物の重軽鉱物組成

(1) 試料

試料は、2区南北断割東壁の斜面地の中段盛土堆積物1点（2-2mb層：試料8）である。試料の外観は、黄褐色を呈するシルト混じりの中～粗粒砂である。

(2) 分析方法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物と軽鉱物を偏光顕微鏡下にてそれぞれ100粒以上250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラスは便宜上軽鉱物組成にいれ、その形態により、バブル型、中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、軽鉱物は石英と長石類とに分類し、さらに岩片や風化粒等は「その他」とする。

(3) 結果

結果を表2、図9に示す。重鉱物組成は、不透明鉱物がほとんどを占め、少量の角閃石と極めて微量の斜方輝石およびジルコンが含まれる。軽鉱物組成では長石類がほとんどを占め、少量の石英が含まれる。長石類の傾向としては、斜長石よりもカリ長石の方が多く含まれる。火山ガラスは認められなかった。また、軽鉱物中の「その他」とした粒の多くは、花崗岩類に由来すると考えられる石英と長石類の鉱物片の複合した岩石片であった。なお、本分析では重鉱物においても軽鉱物においても黒雲母を計数することはできなかった。ただし、篩別処理した砂粒の中には粗粒の風化した黒雲母片や微細な黒雲母片を認めることができる。おそらく黒雲母については、処理過程における損耗が激しいものと考えられるため、ここではその値を評価することはしない。

表2 重軽鉱物分析結果

試料名	重鉱物										軽鉱物						
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石類	その他	合計
試料8	0	1	0	8	0	0	1	80	16	106	0	0	0	35	179	36	250

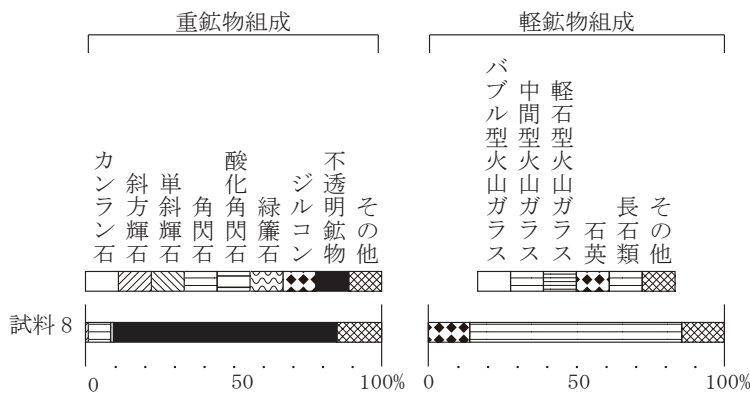


図9 砂層の重軽鉱物組成

(4) 考察

中段の盛土材料として使用されていた砂質堆積物は、分析結果から、その流域に花崗岩類を主体とする地質分布を有する河川堆積物に由来することが推定される。

周辺の主要河川で流域に花崗岩類からなる地質の分布が広く認められる河川としては、木津川がある。木津川流域の地質分布については、尾崎ほか（2000）などを参照することができる。木津川上流域に相当する信楽山地南西部や大和高原北部には中生代白亜紀の領家花崗岩類が広く分布する。そして領家花崗岩類には角閃石を含む花崗岩類のあることも記載されている。これらのことから、試料は木津川水系の堆積物に由来する可能性が高い。

一方、周辺河川の一つである宇治川流域に分布する地質については、脇田ほか（2013）などにみることができる。その記載を参照すれば、宇治川水系の上流域に相当する瀬田川流域には、前期更新世の砂礫層である草津層が分布し、その下流には主に黒雲母花崗岩からなる田上花崗岩体が分布する。この田上花崗岩体は、瀬田川の支流である大戸川流域にも分布する。宇治川に入るとその流域の信楽山地には中生代ジュラ紀の堆積岩類からなる丹波帯が広く分布している。丹波帯は、瀬田川の支流である信楽川や大石川の流域にも分布している。これらの地質分布からみると、宇治川水系の堆積物を構成する碎屑物は、堆積岩類に由来する岩石片や鉱物片が主体を占めることが推定される。また、宇治川流域に分布する花崗岩類である田上花崗岩体構成する岩石は、主に黒雲母花崗岩であり、角閃石は含まれていない。これらのことから、試料は、宇治川水系の堆積物に由来する可能性は低いと考えられる。

以上のことから、斜面地の盛土堆積物に使用されている砂質堆積物は木津川水系の堆積物が使用されていることになる。調査地が位置する高位段丘を構成する河川堆積物は花崗岩質であり、切土により生じた堆積物が盛土材料として利用された可能性が十分考えられる。現時点では、高位段丘構成層の由来については不明な点が多く、今後、鉱物組成などを明らかにすることで、盛土材料の由来について再検証していく必要がある。

5 調査地の堆積物で確認された変形構造

調査地南部の高位段丘層の切土地では、現地調査を実施していないため特定できないが、断面写真観察の結果、地震動に起因する可能性がある変形構造が確認された（図6）。南壁断面西部のひな壇状の切土部分では、切土斜面の延長線部分の段丘構成層の葉理構造がずれているようにみえる。上盤が下盤に対して相対的にずり下がった正断層の可能性もある。また、この段切り部の斜面肩部の人為的擾乱土が脆性破壊し、切土斜面に崖錐状に崩積している。切土後の変形と判断される。以上の変形構造が確認される位置は、中塚（本報告書、附章2）の変動微地形F3の延長部にあたる。

また、南壁では、上記地点よりさらに西側で、人為的に掘削・擾乱された凹部において、基盤をなす段丘構成層の偽礫が水平方向のせん断応力により引きずり上げられているようにみえる範囲がある。この範囲の段丘構成層の葉理構造も多少変形しているようにみえる。この変形の範囲は、中塚（本報告書、附章2）による変動微地形F4の位置にあたる。変形の時期は、凹地を充填する腐植質土壌から18世紀後半の遺物が出土することから、段切後、18世紀までの間の時期と推定される。

調査地北部（2区）の斜面地の盛土堆積物でも変形構造が確認される。先述したように斜面地の傾斜層状盛土は3段階（下段：2-2L層・中段：2-2M層・上段：2-2U層）に区分されるが、変形構造は下段～中段の盛土で確認される。斜面地東部（2区東壁南北断割）の傾斜層状盛土横断面では、切土面と盛土の境界斜面、傾斜層状盛土の各単層斜面を滑り面として、滑動変形している状況が確認される。断面北部に向けて、傾斜層状盛土単層の勾配が緩くなり、はらみ出しており、変形以前は水平な平坦面であった可能性がある。盛土内部の脆弱面などを不連続面とする地すべりの変形とみられ、砂質堆積物を材料として多用していることが関係していると推定される。また、中段盛土（2-2Mb層上部から2-2Ma層）上部では塑性変形と、2-2Ma層下部の砂質盛土が液状化し、上部の泥質砂盛土中に噴出している状況が確認される（図6）。

一方、斜面地西部（2区東西断割断面）でも、斜面地東部の中段盛土と連結する中段盛土において変形構造が確認される（図4）。中段盛土上部では、振動（押し引き）、回転、垂直振動の圧力により著しく脆性破壊されている状況が確認された。特に東西方向の変形が顕著であった。また、中段盛土垂直範囲全体の変形状況をみると、変形構造は2-2M盛土中部から上端までほぼ連続的で、上方に向かって上記応力が増す傾向を示していた。

このように2区では斜面地の中段盛土堆積物において変形構造が確認された。新旧の堆積物が

同時に変形しており、上部に向かって変形が著しくなる傾向を示していることから、地震動に起因する変形構造と推定される。一般に含水比が高い堆積物は地震応力で流動したり塑性変形を生じ、相対的に含水比が低くせん断速度が速いときに脆性破壊がおこる。斜面地東部と西部の中段盛土の変形構造の差異は、盛土材料の物性や含水比の違いに起因するものと推定される。地震イベントの年代は、変形ゾーン上端直上および直下の堆積物の年代によって決まる（Matsuda,2000）ことから、中段盛土（2-2M層）形成後、上段盛土（2-2U層）形成以前と推定される。上段盛土が安土桃山時代の屋敷地構築に伴う地業層であることを踏まえると、当該期の本地域において被害を及ぼした、慶長伏見地震（1596年9月5日：京都市防災会議,1996）に起因する変形と判断される。また地震の発生時期には、桃山丘陵西麓斜面地の地業が進行していたことが推定される。

6 調査地の地業過程と斜面地盛土の特徴

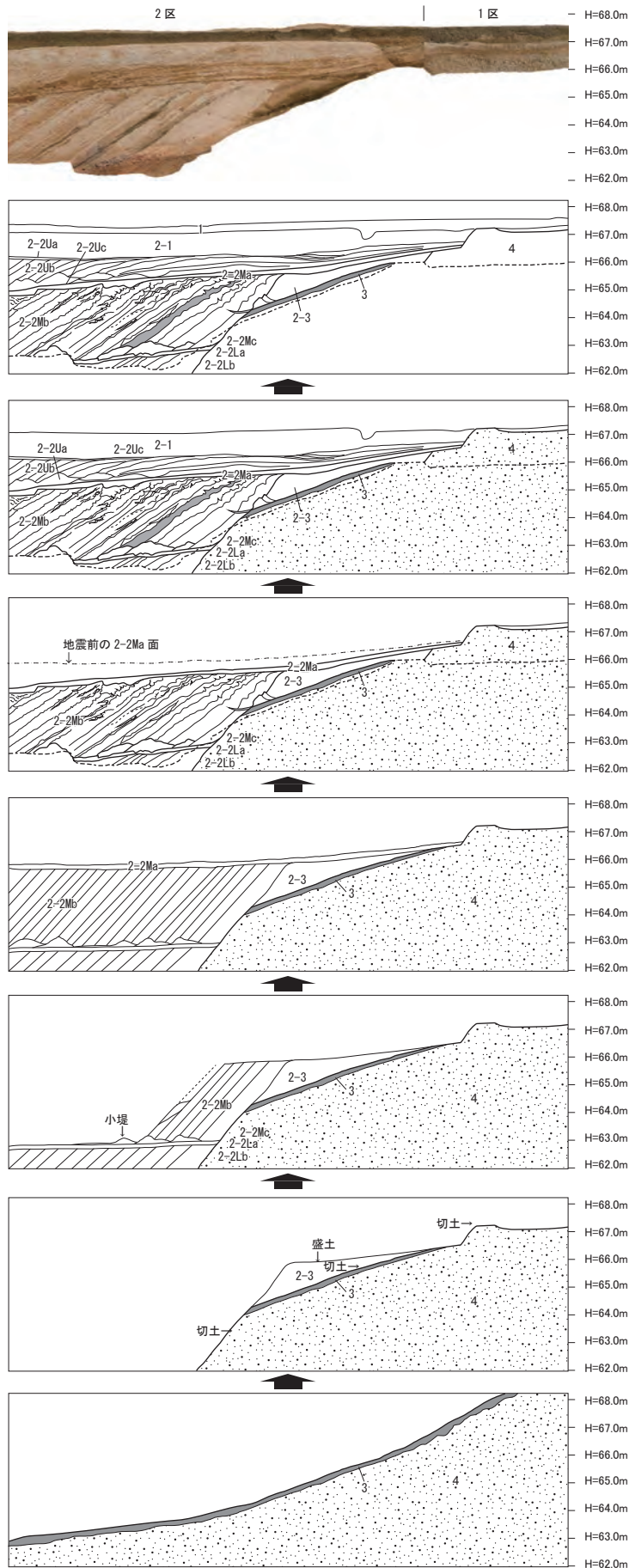
調査地では、大名屋敷地造成に伴う地業として、南部（1区）が高位段丘構成層・被覆層の段切りによるひな壇状の平坦地造成、北部（2区）が北東向き斜面地の切土・盛土によるひな壇状の平坦地造成が行われている。ここでは、これら地業工程について述べる。調査地東壁の1区・2区境界付近の地業工程を模式図として図10に示す。

調査地南部（1区）では、高位段丘層（4層）とその被覆層（3層）が段切りされ、ひな壇状の平坦地造成が行われている。切土面直下の段丘堆積物では初生的な堆積構造が確認されるが、その保存状態が1区北端部で生物擾乱によりやや悪くなることから、切土以前の1区北端部が地表に近い場所で、調査地北部の北東向き斜面に連続する斜面地であった可能性が高い。そうだとすると相当量の堆積物が切土されていることになる。この段切り地業は、下記する調査地北部の切土・盛土の第2段階以前にある程度実施されていた可能性が高い。

一方、調査地北部（2区）の北東向きの斜面地の地業は、大きく3段階の施工に区分される。第1段階は、斜面上部の土壤生成が進行した段丘被覆層を覆う盛土の施工段階、第2段階は、第1段階の盛土後に行われた、斜面地の大規模な掘削切土と、その掘削空間を充填する下段・中段の傾斜層状盛土の形成段階、第3段階は慶長伏見地震後の上段の傾斜層状盛土と水平方向の層状盛土段階である。各段階の詳細を以下に記す。

第1段階の地業は、第2段階の切土のため全容は不明であるが、斜面肩部付近の残存部分の堆積状況から、斜面地の嵩上げを目的とする斜面上部側から下方側に積層させた盛土（2-3層）と推定される。盛土材料は腐植質土壌や段丘堆積物由来とみられる砂質泥～泥質砂などの泥質堆積物を使用されている。斜面上方から投入した盛土材料を多少填圧し、緩い堆積斜面を形成しながら連続的に積層させている。

第2段階の地業は大規模な造成で、第1段階の盛土を含む旧斜面地の切土と、その切土空間を充填する下段・中段の傾斜層状盛土の形成段階である。第1段階の地業により、斜面地では土地の嵩上げが行われていたことになるが、第2段階の地業で何らかの理由で再度切土・盛土する必要性が生じたことになる。この理由として、第1段階と第2段階の地業が同一の開発計画に基



断面写真

現代。土壌化した2-1層の上位に現代の盛土が行われている(1層)。竹林となる。

地震動により傾斜した盛土斜面地上に盛土が施工される(2-2U層)。盛土方法は、中段・下段の斜面地の盛土施工と同じであるが、材料として使用されている堆積物は砂がちであることが特徴である。盛土上面の平坦面上には、1区側の切土面と平坦面を形成するまで水平方向の層状盛土が施工され、遺構が構築されている(2-1層)。

中段の盛土施工後、地震動の影響を受け、平坦面が斜面下方に傾斜。斜面に平行な層状盛土(2-2Mb)の脆弱部分が斜面下方方向に滑動しており、調査地北端の盛土法面ははらみ出している。また、斜面層状盛土上部1mの垂直範囲は地震動の押し引きにより生じた変形構造が確認される。調査地東壁では塑性変形しており、2-2Ma層下部の砂が液状化し、上位の泥質堆積物中に噴出。

斜面の層状盛土完了後、上面の平坦面に水平方向に偽礫混じり砂など砂質堆積物を層状に盛土した後、その上位に泥質堆積物を盛土し、填圧・延圧により締め固めている(2-2Ma)。

斜面地の盛土は、大礫・巨礫サイズの偽礫を使用して、小堤を構築後、切土斜面に平行に層状に盛土を行う。この施工を繰り返すことで、斜面上部に平坦面を構築している。斜面に平行な盛土単層は、同質の材料を使用し、下位から崖錐状に積み上げている。泥質堆積物を材料とする盛土単層は積み上げ時に填圧されている。

小堤の役割は、盛土内に浸透した雨水などが法面側に配水されないための工夫の可能性もあるが、填圧されておらず、初生堆積構造が残すことから、土留めの可能性が高い。

1区側では、高位段丘層を切土し、平坦面を構築。2区側の斜面地も3層上部以上が切土されている。切土面に泥質砂を材料とする盛土(2-3層)が行われた後、大規模な切土が行われる。切土高は4m以上(発掘調査底面で切土底面に到達していない)。切土された堆積物は、盛土材料として利用された可能性が高い。

造成前の調査地は、高位段丘構成層(4層)と土壌化した泥質砂の被覆層(3層)からなる斜面地。斜面の傾斜方向は北東向き。当該期の調査地は、植生に覆われていた可能性がある。3層土壌の出土灰片の14C年代値は古墳時代を示す。

図10 調査地の地業過程

づくものではなかった、水文条件を踏まえた土地造成地業が必要になった、調査地の開発計画が変更になったなど、様々な可能性が考えられる。今後、考古学・文献史学的成果との複合的検討が必要である。

斜面地の切土は、勾配がおおよそ1割5部勾配（傾斜角35度）で、切土高は3m以上である（切土が発掘調査底面より下位まで伸びているため、切土底面付近の状況や正確な切土高は不明である）。現代の切土・盛土法面の一般的勾配は、1割5部～1割8部勾配である。今回の勾配はその範囲にある。切土された空間は、切土斜面から側方（旧斜面下方向）に付加するように、調査地東部で2段（中段・下段）、西部で1段（東部の中段に連結する）の傾斜層状盛土が施工されている。傾斜層状盛土の盛土高は、中段（2-2M層）が約2.5m、下段（2-2L層）が0.6m以上である。

傾斜層状盛土の施工方法は、いずれの段も同様で、盛土実施面上に、大礫・巨礫サイズの偽礫と砂を敷き、その上位に高さ0.3～0.4m程度の小堤を構築する（2-2Mc層）。この小堤頂部と切土面までの範囲に斜面勾配に平行な0.1～0.4m程度層厚の傾斜する層状盛土（2-2Ub・Mb・Lb層）が行われる。このような小堤盛土と傾斜する層状盛土を、切土斜面外側方向に付加するように繰り返し行った後、その上面に、水平方向の層状に礫、砂、泥質砂偽礫などの粗粒な堆積物と砂質泥などの泥質堆積物を締め固めながら盛土している（2-2Ma・La層）。これらの工程が1段の傾斜層状盛土の工程になり、小堤盛土は、上位の傾斜層状盛土（2-2Mb・Lc層）単層の法尻補強と、傾斜層状盛土の層厚を一定に保つこと、盛土下部の排水を考慮した工法であった可能性が示唆される。また傾斜する層状盛土単層は、その構造から、斜面上方から盛土材料を繰り返し投入し、積み上げられたもので、また外側斜面側から多少の締め固めが行われていることが確認される。このことから、傾斜する層状盛土施工には、盛土斜面に平行な板状の型枠が利用されていた可能性が推定される。また、傾斜する層状盛土の勾配を一定に保つために、現在の法面盛土で行われている盛土丁張のようなガイドが利用されていた可能性もある。

傾斜層状盛土材料には、高位段丘構成層や後背地に分布する大阪層群由来の褐色～赤褐色を呈する泥質砂や砂・礫、段丘被覆層の腐植質土壌などが使用されており、粒径などを考慮した材料の篩分・調整が示唆される。また、切土された段丘堆積物直上の傾斜層状盛土は、泥質堆積物を多用している傾向がうかがえる。

本調査地周辺では、今回の調査地北西方向の京都市立呉竹総合支援学校整備工事に伴う伏見城跡・福島太夫遺跡でも、斜面地において今回と同様の工程で構築された1段の盛土が確認されている（京都市埋蔵文化財研究所,2021）。このことは、傾斜層状盛土が城下町の区画整理に伴う斜面地における普遍的な盛土施工方法であったことが示唆される。

第3段階の地業は、慶長伏見地震により滑動ないし脆性破壊した第2段階の盛土層上面を覆う、調査地南部の段丘の段切り面と同レベルになるように行われた盛土である。本盛土は、下部が傾斜層序盛土（2-2U層）、上部が主に水平方向に層状に積層する盛土（2-1層）からなる。これらの盛土材料には、第2段階の中段・下段で確認された腐植質土壌はほとんど利用されておらず、主に砂質堆積物が利用されていることが特徴である。下部の傾斜層状盛土は、基本的には第2段階

の傾斜層状盛土と同様の施工方法が採用されているが、上面からみた層状盛土の配向性は第2段階のように一定方向に付加していない。積層状況もぞんざいな部分が多く認められる。また、上部の水平方向の層状盛土も一気に厚く埋立っている部分が認められる。調査地北西部の2-1層中には間隙水排水のためとみられる、粒径の揃えた礫層を挟在する部分も確認されているが、第3段階の地業は、比較的丁寧さに欠けており、急いで構築されているように思われる。木幡山の伏見城再建に伴う城下町の整備も急速に進められたことを示唆している可能性がある。

今回調査地の北部斜面地の傾斜層状盛土は、谷埋め型盛土であるか腹付け型盛土であるかは、調査地の北東側の盛土端部の状況が不明であるため特定できないものの、側方（斜面下方）に付加するように施工されていることから腹付け型盛土の特徴を有している。一般に地震動などによる斜面地盛土の崩壊は、1) 法高が特に大きい場合、2) 盛土が地山からの湧水の影響を受けやすい場合、3) 盛土箇所の原地盤が不安定な場合、4) 腹付け型盛土となる場合、に起こりやすい。今回調査地の第2段階の斜面地盛土も法高が高く、腹付け型盛土の特徴を有しているなど、地震の影響を受けやすかったことが示唆される。

また、盛土などの土構造物では、雨水や地下水などの水処理の良し悪しが強度に関係し、盛土内の間隙水の排水が重要となる（鈴木,2011）。上記した伏見城跡・福島太夫遺跡の傾斜層状盛土の基底面には、低い段切りと排水溝が構築されており盛土中の間隙水の排水を考慮し、盛土強度を増す工夫が確認されている（京都市埋蔵文化財研究所,2021）。時代は異なるが1478年に構築された山科本願寺跡の土塁の基底にも、間隙水の排水のための石組み暗渠が確認されている（京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館,1998）。今回の調査地では、調査深度の関係で盛土基底面の状況が十分確認されていないが、調査地西部の東西立割では段切りの可能性がある階段状の掘削痕が確認されているなど、何らかの工夫が行われていた可能性がある。また、傾斜層状盛土の場合、間隙水はその法尻部分である小堤盛土に集まり、間隙の多い小堤状盛土を通過した間隙水が直下の基盤層ないし締固め層の境界を通じて外部に排水されることが想定される。地震による変形が斜面地東部と西部で多少異なっていたが、盛土材料の違いのほか、2段と1段の傾斜層状盛土では間隙水のあり方が異なり、1段の場合は基盤層との境界部分から排水されるのに対して、2段の場合は下位段の盛土上部の締固め層準が不透水層となり、上位の盛土中の間隙水が排水されにくい状況におかれていた可能性がある。そうだとすると、城下町の斜面地盛土として普遍的に確認される傾斜層状盛土は、1段の場合と複数段の場合で土構造物としての強度が異なり、後者の方が脆弱であったことになる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1) , 337-360.
- Hua, Q., Turnbull, J., Santos, G., Rakowski, A., Ancapichún, S., De Pol-Holz, Hammer, S., Lehman, S., Levin, I., Miller, J., Palmer, J., Turney, C. (2021) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2019. *Radiocarbon*, 64 (4) , 723-745. doi:10.1017/RDC.2021.95. <https://doi.org/10.1017/RDC.2021.95> (cited 23 November 2021)
- 平尾政幸 (2019) 土師器再考. 「洛史 研究紀要第12号」公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 ,9-56

- 京都市防災会議（1996）京都と周辺地域の地震活動の特性 京都と周辺地域の有感地震データベース（解説）. 尾池和夫監修, 81p.
- 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館（1998）「山科本願寺の発掘調査」, 発掘ニュース 30, リーフレット京都 No.114
- 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所（2021）「伏見城跡・福島太夫遺跡」. 公益京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021 - 5,
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- 増田富士夫・伊勢屋ふじ子（1985）”逆グレーディング構造”：自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造. 堆積学研究会会誌, 22・23, p.108-116.
- Matsuda, J.-I. (2000) Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan, *Sedimentary Geology*, 135, 99-116.
- 尾崎正紀・寒川 旭・宮崎一博・西岡芳晴・宮地良典・竹内圭史・田口雄作（2000）奈良地域の地質. 地域地質研究報告（5万分の1図幅）, 地質調査所, 162p.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP) . *Radiocarbon*, 62 (4) , 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)
- 鈴木正司（2011）若年技術者のための基礎知識 - 土木編・盛土編 . DOBOKU 技師会東京, 東京土木施工管理技士会, 第51号 14-21
- 鈴木正司（2012）若年技術者のための基礎知識 - 切土編 . DOBOKU 技師会東京, 東京土木施工管理技士会, 第52号 24-32
- 脇田浩二・竹内圭史・水野清秀・小松原 琢・中野聰史・竹村恵二・田口雄作（2013）京都東南部地域の地質. 地域地質研究報告（5万分の1図幅）, 産総研地質調査総合センター, 124p.
- 宇佐見龍夫（1987）新編日本被害地震総覧, 東京大学出版会, 493p.
- Wentworth, C.K. (1922) A scale of grade and class terms for clastic sediments. *J. Geol.*, 30, 377-392.

2. 木幡山伏見城周辺地域の地形面区分・変動地形条件と人間活動

中塚 良

(公益財団法人 向日市埋蔵文化財センター)

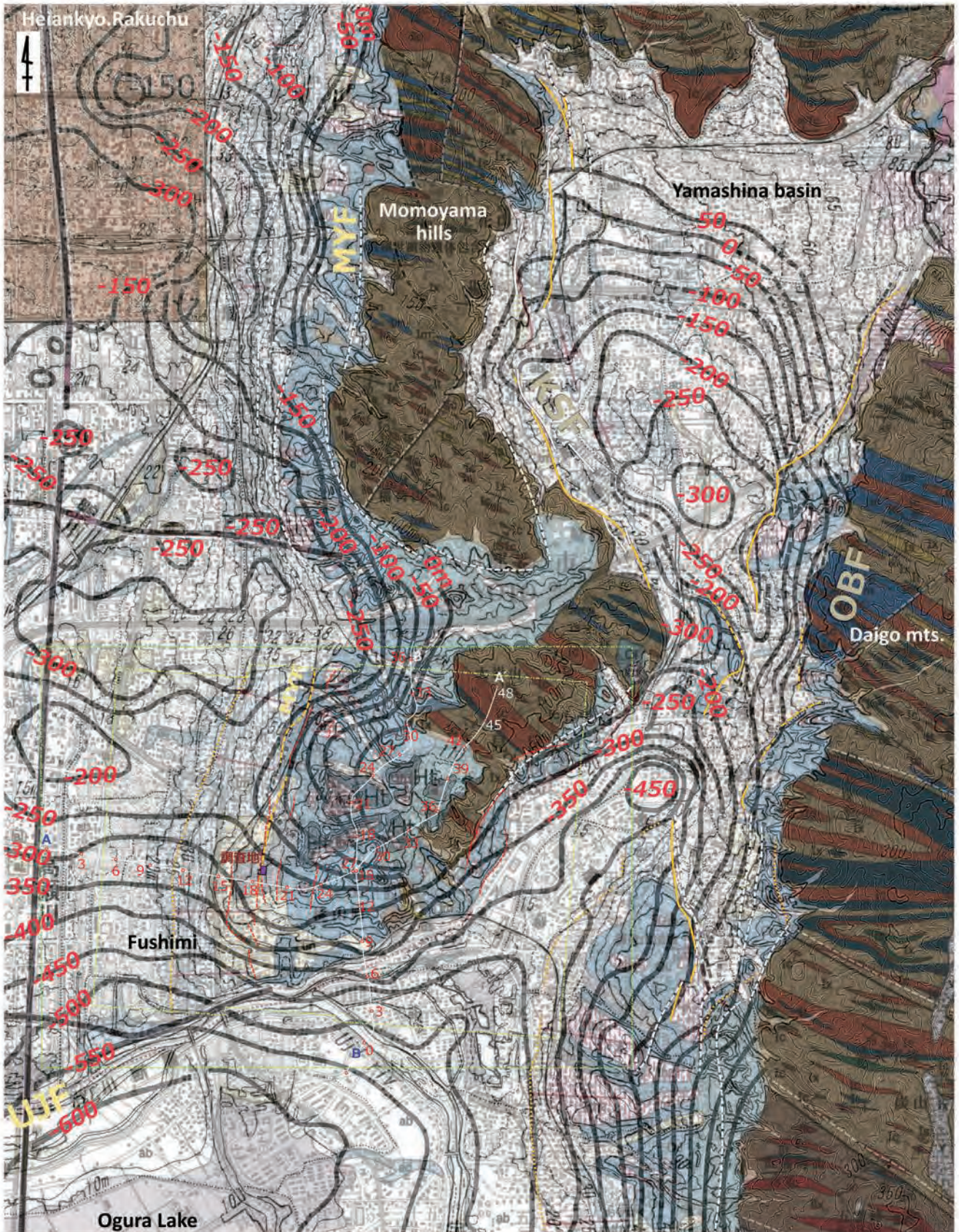
1. 緒言

桜開花の春季。木幡山伏見城西外郭の一画、推定島津氏屋敷地の発掘調査に際し、遺跡の地形・地質を観察する機会を得た。調査区西縁を中心に、盛土遺構・層序に変位、変形をあたえる地震痕跡を見出した。伏見山城構築過程のなかでの慶長伏見地震にかかわる痕跡に相当すると推察された。遺跡や発掘調査区といったマイクロな空間スケールにおいて認識、判読されることから「変動微地形」と呼ぶことができる。当該地域における先行調査のひとつをひもとく。今回調査地の南西約 300 m の調査地（毛利長門西町、京都府埋文センター 1990 年度、辻本・柴,1991;小池,1996）では同様に、桃山時代の遺跡層序を変位させ、江戸初期に改変をうける逆断層群が確認されており、桃山丘陵西縁断層帯の 16 世紀末期の活動履歴の存在が示唆された。

他方、慶長伏見地震の主因について今日、一連の活断層のトレンチ調査や古地震研究成果にもとづき、六甲山系から大阪盆地北縁を東に延伸する有馬高槻構造線活断層系(ATL,寒川,2010;西山・原田,2022)、さらに ATL 東方延長にあたる京都盆地中央部に伏在する宇治川断層（京都市地域活断層調査委員会編,2004）を起震断層とする可能性が示唆されている。これらの状況と変動地形の最小単位、変動微地形を検出した今回の成果を端緒にして、京都盆地東縁断層帯と ATL 系の交合部にあたる桃山丘陵南端全域に、自然地理学的検討の場を広げてみよう。伏見城の営まれた時代をふくむ過去約 40 万年にわたる桃山丘陵の変動地形発達史と、人間活動場のかかわりについて以下、図説をこころみる。丘と水際が対峙する変動地形特有の自然景観に対し地政的資源利用を目標とした桃山人たちの栄枯盛衰にふれてみたい。

2. 地域・遺跡概観（図 1・2）

〔地域概観〕図 1 に、伏見城の構築された桃山丘陵南端を中心にして、現在の地形条件図に基盤岩以浅の地形・地質条件、活構造（断層、リニアメント）の分布を重ねて示す（中塚 2011;2021, 国土地理院編,2022『都市圏活断層図』・産総研,2005『京都東南部地質図』を合成編集）。地形・地質の構成は高度分布順に、古・中生代付加体堆積物および火山岩類・岩脈からなる基盤岩、第四紀層の丘陵地、大阪層群上部層の最終堆積・離水面としての高位段丘面群 HT（推定 Ma7～サクラ・カスリ火山灰層準以浅,約 40～50 万年前下限）、低位段丘面群、扇状地・沖積低地である。第四紀層の受け皿にあたる基盤岩の深度分布（50 m コンター）は深層地質ボーリング調査結果と重力・反射法探査成果を照合して作成された資料（京都市防災協会編 2001,京都市編 2003）を援用、オーバーレイを施した。図 2 (a) に、各地形面を縫うように設ける側線沿いの断面（地形面プロファイル）に、基盤岩深度を投射図化する。桃山丘陵南端の基盤岩岩体の北西-南東走向に対する縦横



〔凡例図解〕

3km

① 図郭範囲 ② 基盤岩 ③ 基盤岩深度分布 ④ 高位段丘面
 ⑤ 高位段丘開析・撓曲面 ⑥ ⑤以降の第四紀地形面
 ⑦ 地形断面図位置 ⑧~⑩ 変動地形(断層)区分※3案併載

図1 地域概観図・基盤岩深度分布図

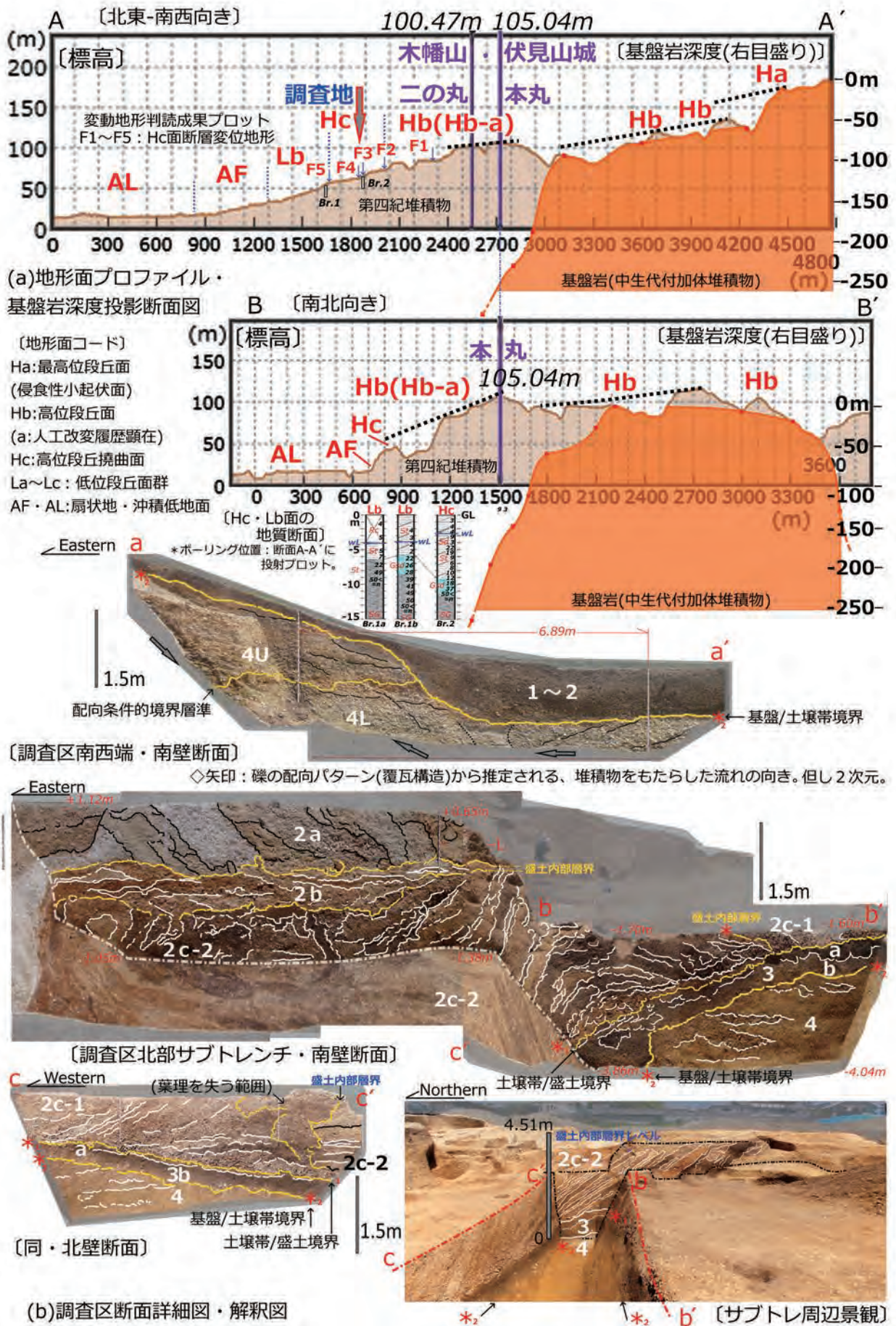


図2 地形面投影断面図・調査地断面詳細図

断面に相当する。西ないし南に急傾斜する基盤岩体上に、第四紀堆積物が厚く積層する状況が看取される。地形面分布の節にて再論したい。さて地形・地質の骨格について、桃山丘陵の東西縁辺において、基盤岩深度は局所的に -450m に達する山科盆地南部の一部をのぞき、おおむね -200 ~ -300 m と相対的に浅くなだらかであるが、丘陵南端から旧巨椋池・京都盆地中央に向け最深部 -695 m (KD-0:京都市編 2003) まで急激に深度を増す。伏見城北背後の基盤岩の削剥平坦面(侵食小起伏面)との高度差は約 880 m に達する。当該地域における第四紀約 145 万年間の変動量(隆起・沈降の履歴の総和)に相当する。丘陵地の隆起の原動力にあたる活構造について、丘陵西・東縁辺にそれぞれ桃山(MYF)・勧修寺(KSF)断層の存在がしられる。前者は京都盆地東縁をきめる花折断層系の南端に相当し、湾曲し不連続な分布パターンまた地形面を撓曲変位させる形状から、圧縮応力場における逆断層とみなせる。図 1 には今回の写真判読(赤色)、『都市圏活断層図』(白色)、『産総研地質図』(黄色)それぞれによる断層地形区分を色分け併記する。

〔遺跡(発掘調査区)概観〕図 2 (b) に、変動地形発達史的課題を今回提起した調査区の微地形と層序の状況を示す。本章において、層序を 1:表土、2:伏見城構築層(盛土)、3:伏見城構築面構成層(旧地表土層)、4:遺跡基盤層(高位段丘層・大阪層群上部層準)に区分する。

第 2 層は第 3・4 層、特に後者の花崗岩質碎屑物を主たる構築材として利用するが、調査区北部サブトレンチ断面(写真中段)において、第 2 層系の葉理状積層(2c-2 層)が強震動にともなう変形を履歴する状況が看取された。本層準は直近の東壁断面 b-c' (写真下段)にみるように、ほぼ東西走向・北向き高角傾斜の積み土の薄層群で構成されるが、南壁および調査区底面の層界に顕著な乱れが生じている。水平的応力による積層の短縮・剪断塑性変形破断過程の存在が示唆された。接続する東・西断面間の積層の変位程度の違いと震動時の応力的差異の関係が注目される。他方、変形層準以浅の 2b・2c 層は、それぞれ水平・斜交葉理状の整う積土パターンを呈すことから、第 2a/2b 層界変動イベント以降の通常の盛土過程が再開された状況を推測しうる。後節、変動地形区分・分布の項にて再度言及する。

調査区南壁における現況での地形変換点の断面(写真上段)では、第 4 層系砂礫層の約 1.5 m の落差と落差下端において漏斗状の凹みを充填する砂層が確認された。本地点は『都市圏活断層図』の低断層崖位置と重なる。積層状況との比較から、開口成分を示す正断層性の変動微地形に相当する可能性が示唆される。

また、今回空中写真判読では、調査区南壁西端付近を北に延伸する低崖が予察された(後述 F4)。『産総研地質図』記載断層のクロスチェック成果にあたる。本地点では自然科学分析節の断面解釈図に示されるように、第 2/4 層界の層序が複雑にせん断破壊をうける状況が確認された。これら変形痕跡が、伏在する低角断層(スラスト)上部の堆積物の破壊にかかわる可能性を考えておきたい。したがって、前述の写真中段、丘陵斜面(撓曲高位面)とは逆向きの真西に低角度で傾斜する第 2/3 層界面付近の層準が、撓曲前縁背後の上盤面に形成される正断層性の凹地にあたる可能性も示唆される。

3. 地形面区分 (図3・4)

〔図法〕米軍空中写真ステレオグラフィ(立体写真判読術)による結果を地形面区分図として示す。前置きが少し長くなるが、身体技法 Physical Technique と通底する自然地理学的 Physical Geographic 資料調査法の一端の委細と流れを紹介しておく。

桃山丘陵南端域において連続撮影された空中写真4点(1946年7月撮影,西から順に M205-A-39~42)をデジタル上でトリミング・左右反転接合し、丘陵全体をカバーする交差法ステレオグラフ3セット(No.40・39, 41・40, 42・41の組み合わせ)を作成する。従前は実体鏡下で実物の写真上に判読結果をデルマトグラフ(油性色鉛筆)で直接描きこんだり、OHP透明シートを写真に貼付しサインペンでトレースし、さらに浄書した。他方、現在は大形ディスプレイに写真を拡大表示し、オーバーレイアプリ画面に判読結果を直接描きこむようになった。また、交差法裸眼実体視は平行法ステレオグラフの弱点ともいえる瞳孔間隔の制約とは関係なく、より広範囲での観察を可能とする。同時に、注視によって判読から面区分にいたる確度を高めることができる。分散視の平行法では得難い自然科学分析的スペックにあたると考える。

地形面は共通の構成物質・形成機序・形成(離水)年代をもつ地形单元(ユニット)として区分される。地形面の変動履歴・変動累積性を検討する上で、年代情報が重要な要素をしめる。なお、当該地域における野外調査的経験知と資料調査歴のあさい筆者作成の現況の地形面区分図は「予察図」 Predictive map” の域を出ないことを、あらかじめことわっておきたい。また、空中写真・地形図(撮影年代の比較的近い測量図としての1922年都市計画基本図、立命館大学アトリーサーチセンター版)に地形面区分の結果を示すことで、今後の検証につなげたい。

〔地形面の分布と層序の関係〕地形面は上位から順に高位段丘面群(コード:H)、低位段丘面群(L)、H・L面を刻む開析谷、扇状地面(AF)、沖積低地面(AL)に大区分する。なお、図幅上における説明の必要に備え1kmメッシュを設け、各区画に数字・アルファベット組み合わせによるコードをあたえる。また、各地形面の高度分布的特徴を知るべく、地形面の側面形状に極力あわせて断面プロファイルを作成した。側線に区分図・プロファイル共通の300mおき距離ゲージを記入する。適宜対照したい。

高位段丘面群(H):最高位段丘(Ha)、高位段丘(Hb)、撓曲高位段丘(Hc)の各面に分ける。城郭遺跡周辺における人工改変的輪郭を呈す面に、-a (artificialの略記)を付す。

Ha面はかつて定高性をもつ隆起準平原面として認識された基盤岩山稜トップの小起伏面に相当する。丹波高地南縁域の最低位面にあたる。今回図幅4a・5a区の標高182.6mの大岩山周辺^(註1)の平坦~緩斜面を分区した。直接の年代情報をもたないが、第四紀断層ブロック運動以前の侵食性残丘面とみなせることで、京都盆地中央部に伏在する基盤岩の最深部との高低差約878mが盆地形成における変動履歴の総量にあたると推察される。

Hb面は丘陵地背面に分布する、開析が進行する段丘面として区分する。地質的には大阪層群上部(改正粘土層Ma6以浅「桃山礫層」:京都市,2006)の「くさり礫」含砂礫層・赤色風化堆積物として記載される。前記の大岩山周辺Ha面付近^(註1)から基盤岩深度分布に整合的に、放射状・ド

ム状に面高度を下げる。4a 区南端、標高 136 m 付近が面の最高点であり、プロファイル 2 断面が示すように、3a 区～4c 区にかけて北西-南東に走向し 3/4 区境界に谷中分水界をもつ直線的な開析谷（組織地形的な構造谷）にむけて一旦高度分布を下げる。ついで、木幡山伏見城の拠点である本丸・二の丸推定地の Hb 面群 100～105 m 標高点でふたたび高度を上げて、さらに西ないし南に高度を下げていく。

プロファイルは全体に傾斜階状構造を示していて、断層ブロック的変動履歴の存在が示唆される。傾動量は構造谷以東が約 40 m、以西が約 50 m と後者の落差が大きい。断層活動場の丘陵縁辺～低地側への遷移と変動量の増加が示唆される。

植村（2004）は変位基準（活断層を挟んだ地形面の高度差）にもとづく桃山断層の平均変位速度を 0.02～0.08 m /1000 年（H 面形成年代：30 万年前と仮定）と見積もる。他方、上記、Hb 面傾動量からの変位速度は 0.13 m・0.16 m /1000 年に見積もられる。他方、小滝ほか（2011）が推定する H 面形成開始期（断層盆地形成年代上限）約 47 万年前を援用し、0.09～0.11 m /1000 年の変位速度がえられる。

なお、丘陵背面 Hb 面を「鍵面」として京都盆地中央部に延伸した場合、小滝ほか（2011）の年代観を前提にして、宇治川断層調査地ボーリング成果（京都市地域活断層調査委員会編,2004）におけるカスリ火山灰（H=-132.1 m、Ma7 上位、470ka）もしくはサクラ火山灰（H=-143.61 m、Ma7 下位、520ka）前後の層準に対比しうる。また、宇治川断層調査地以南の深層ボーリング KD-0 地点におけるカスリ火山灰層準直下の海成層の深度は 137.1～142.3 m である。上記するよう、Hb 面上限高度 136.2 m と Ma7 層準深度との間の、隆起・沈降量の均衡性が示唆される（藤田,1977 の断層ブロックモデル）。高度差 268 m /47 万年に単純化する変動速度は 0.57 m /1000 年と算定される。この値は後述、桃山丘陵東方・黄檗断層 L 面（植村,2004）また京都盆地西縁断層帯（中塚,2021）において推定される断層変位速度に近似する。第四紀後期を通じての、広域かつ等速的な変動速度の存在の可能性が示唆される。

Hb-a 面（Hb 面改変想定面）は木幡山伏見城最高位面にあたる本丸・二の丸復原面周辺に配置される、直線状に堀として加工される開析谷縁辺の小規模の地形面として区分する。北堀遺構の南・北（3B 区）、今回調査地当方、内郭西縁（同）、本丸・二の丸南縁（3c 区）において小規模な平坦面が点在する。城郭造営にあたって、より高所の段丘構成層が切り崩され、平場の造成が必要とされる地点に土の資材として順次下方移動されたと推察される。切り盛り・ひな段造成における基本形であろう。『伏見御城郭并屋敷取之絵図』（京都市蔵、本文図 5）に記載される内郭施設群とステレオグラフの直接の比較が可能であるが、絵図で堀と記載される個所が土居状の凸面として写真判読されたり、通水困難な凸型斜面に堀が描かれるなど、絵図と判読成果の間に少なからず齟齬が生じている。今後、現地での再確認を要す。

Hc 面は丘陵西・南斜面を中心に分布する、Ha 面と連続する変動性の斜面（撓曲面）として区分する。今回調査地周辺の地形面にあたる。東西約 450 m で約 20 m の高低差である。プロファイルでは約 2.5° W、斜面上位の調査地では 5.0° W 前後の緩斜面である。調査地東約 300 m 地点に

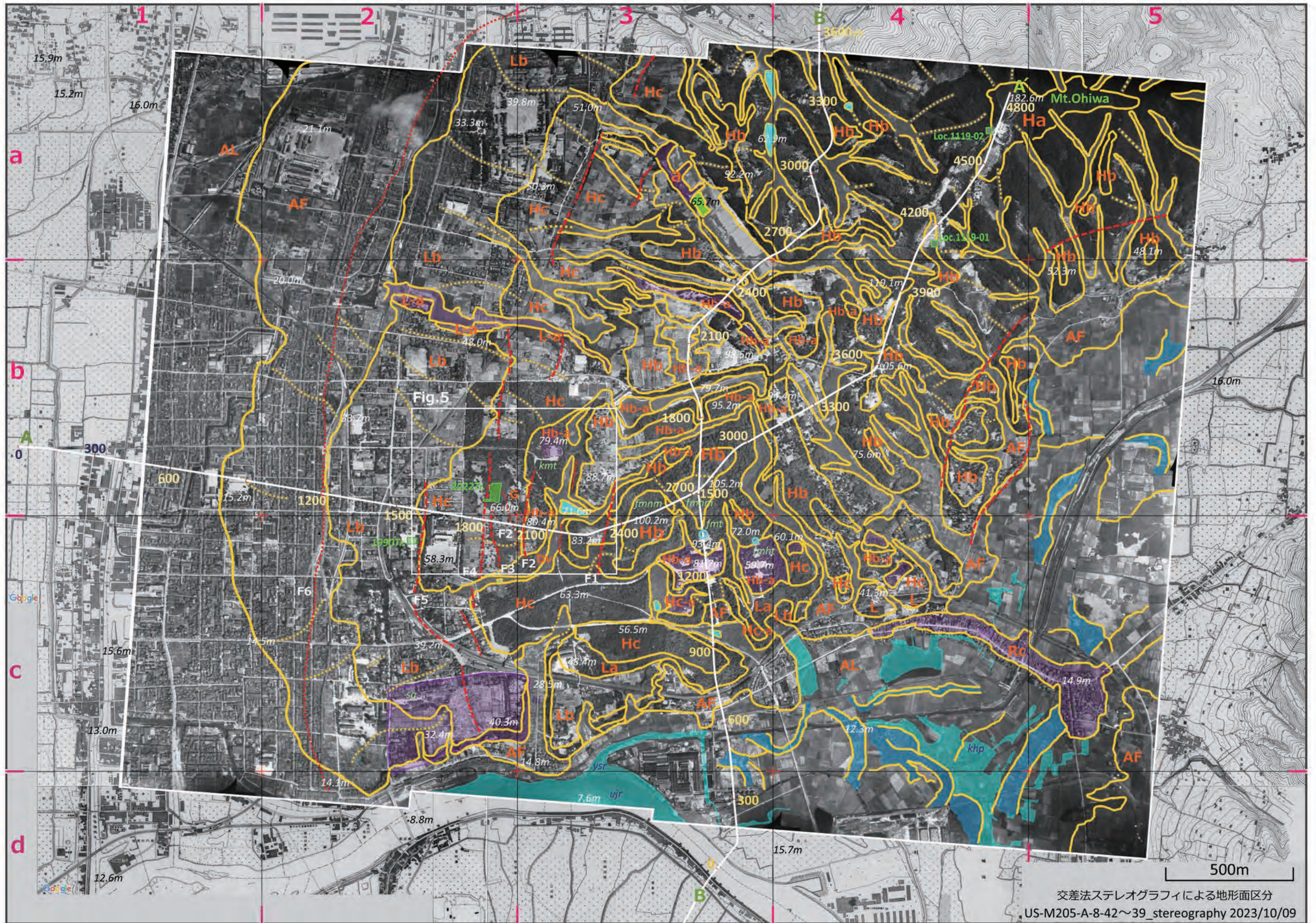


図3 地形面区分図-1

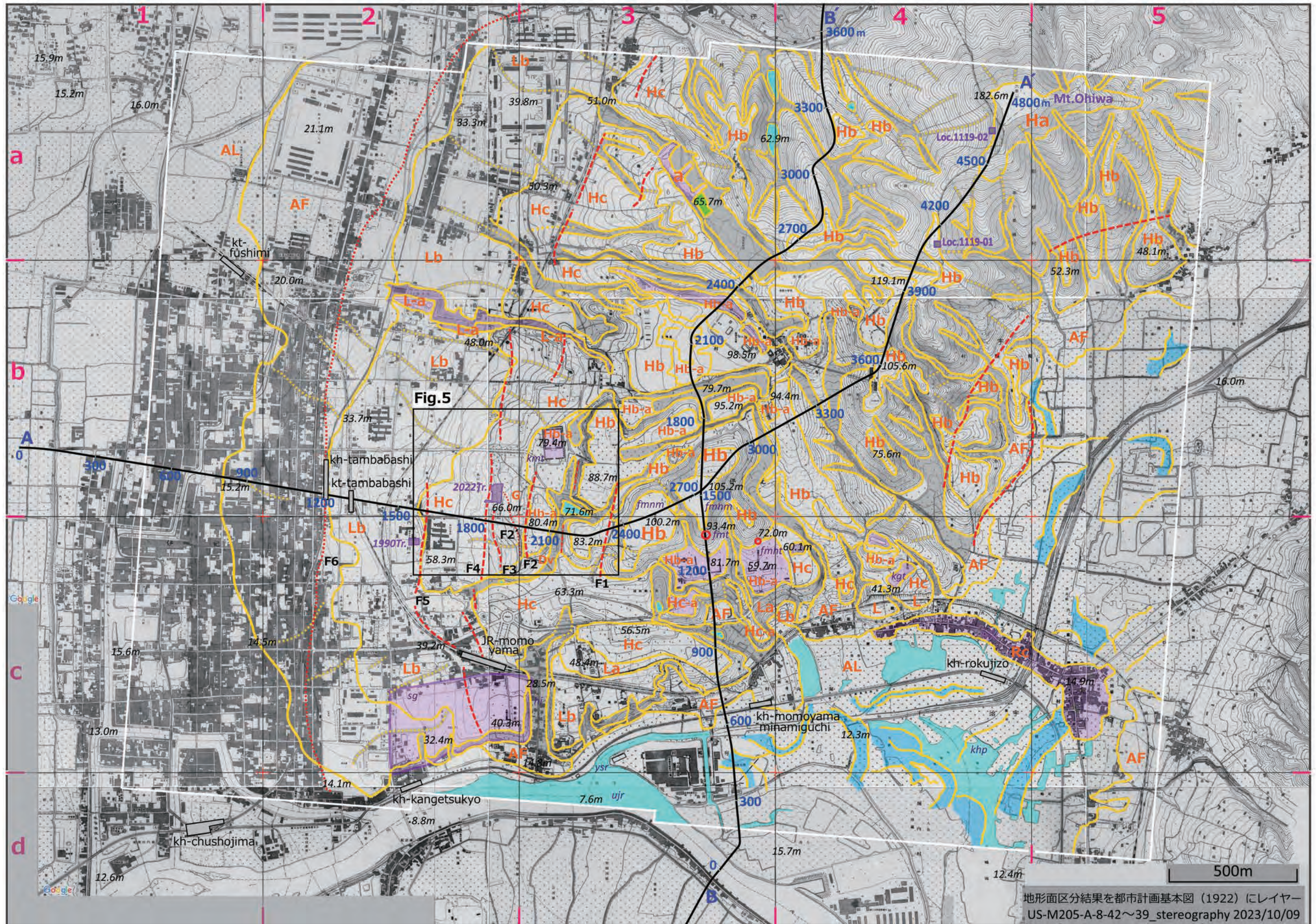


図4 地形面区分図-2

は調査地との比高約6mの、さらに東のHb-a面「治部少丸」(前掲絵図記載)から12m下位の開析谷中に、「治部池」が設けられる。東の水を集める開析谷は後述の南北性の断層地形条件にあわせて必従的に併行したのち、もう一度東に直交気味に折れ曲がり、Hc面を刻み下位のLb面への排水に至る。調査地周辺への直近からの谷水利用は困難であるが、周辺の地質ボーリング成果(図2(a))にみるように、G.L.4m付近に地下水位があることから、高台とはいえ井戸水利用を可能とする水文条件下にあると推測される。

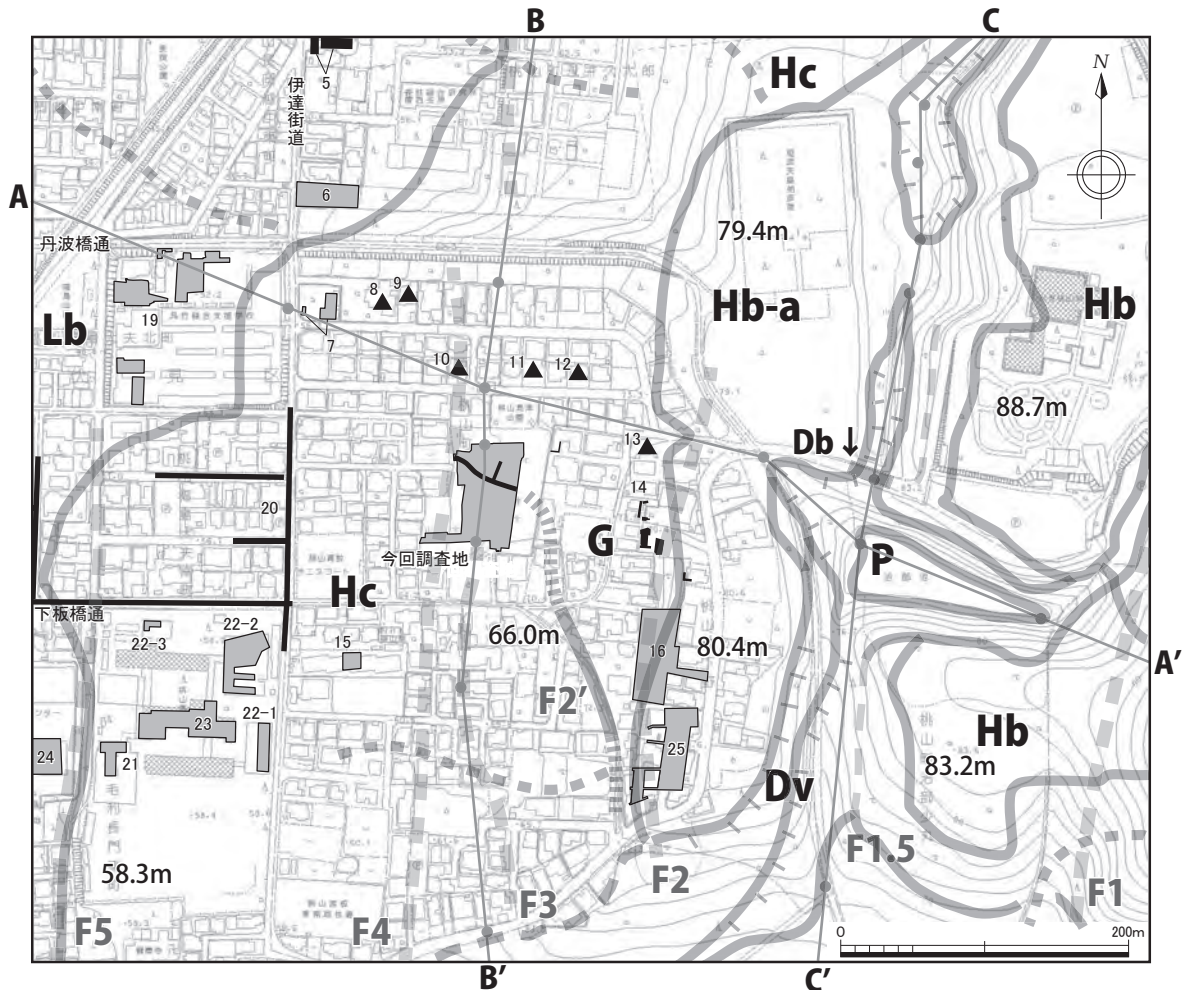
なお図幅北方、4a区から3a区にかけて、Hc面を下刻する北西向きの直線的で谷幅の広い開析谷が存在する。谷底を直角に横断して連結状に設けられる堰堤群(Dv-a)が写真判読される。治水にかかわる水制との類比から、近世以降の大形の土砂留め遺構に相当すると推察される。

低位段丘面群(L):高位段丘面群(H)から丘陵縁辺部に再堆積する碎屑物質で構成される地形面として認識される。浅い開析谷をとまなう開析扇状地面としての性格をもつ。高度分布から高低a・bの2面に区分する。丘陵南面は崖高おおきく、宇治川の側刻、下方侵食による河岸段丘の景観を呈す。他方、桃山断層帯側では約3°Wの緩斜面を呈する。L面に区分するが地質年代情報がなく、低位段丘時代に特定しえない。

図幅3b・2b区において、東のHc面から西の扇状地面に向け小規模の開析谷が延びる。谷頭は伏見城北辺の堀を設ける谷筋と谷中分水界をなす。西のLb面上において鍵の手状、直線的な加工、改変が施される。谷の南肩には不連続に土居状の高まり(L-a)を写真判読できる。前述『伏見御城郭并屋敷取之絵図』に記載される伏見総構の外濠に相当する。

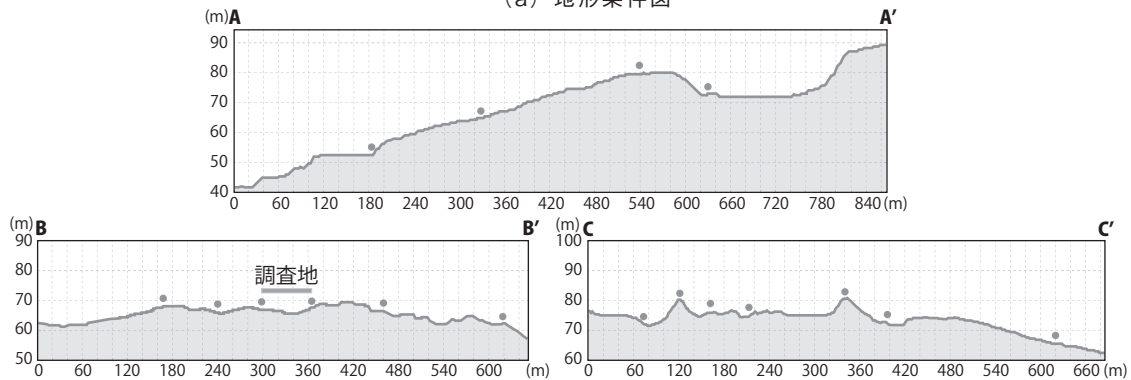
扇状地面(AF):低位段丘前縁に張り出し、低平な沖積低地面ALと接する緩斜面である。撓曲性の低崖をもつ。図幅西部では写真判読においてALとの境界を決め難く、都市計画図(1922年)に示される等高線の西回りんかくを扇状地西縁として区分する。既存の発掘調査地点の地質成果を参照することで、修整を要す。宇治川流路に臨む丘陵南辺(3c区)では、「指月城」復原域(sg.1592年「隠居屋敷」着工・1594年「新城」竣工)に東接する開析谷中から前縁の河畔にかけて、小規模の扇状地面を確認しうる。なお、近年の研究成果において復原「大手門」真南にあたるこの開析谷に「舟入」が復原されるが、谷底と宇治川流路の高低差がおおきく、水辺の条件をもたない。他方、後述、沖積低地面にプロファイルが連続する開析谷を、4c区西辺中央に確認できる。郭に接続する「舟入」想定地点である。

沖積低地面(AL):桃山丘陵を取り巻く、京都盆地・山科盆地の諸河川が形成する河成低地である。西から順に、伏見の街場西半部が立地する鴨川低地(1a~1d区)、宇治川低地(2c~4c区以南)、山科川低地(5区)である。宇治川は伏見の南玄関のひとつである豊後橋(2d区、河床標高8.8m、現観月橋)南詰以西の「小倉堤」と、同・以東の「槇島堤」の総称「太閤堤」(1594年・文禄3年着工、2d・3d区)によって、堆砂の進行する堤内地「巨椋池」から分離・川除され、伏見城直下に川港が建設された。曲流河川の滑走側に沿う槇島堤は宇治川右岸側(自然堤防北背後)の山科川河口縁辺に後背湿地(ラグーン、「木幡池」痕跡)を形成し、前述の「舟入」(4c区西縁)を立地させるに至ったと推察される。伏見遺構形成過程に直接かかわる考古学資料は不詳であるが、



*地形面コードほか:本文参照, ベースマップ:本文図16を引用.

(a) 地形条件図



(b) 地形断面プロファイル

図5 調査地周辺地形条件図(中塚・辻本原図)

上流側、槇島堤対岸で実施された宇治川護岸遺跡(太閤堤遺跡)の構築・埋没層準について、 ^{14}C 年代成果が得られている(中塚・釜井,2011)。暦年較正年代(下限)1620 cal ADから1660 cal ADにかけて、堆砂による顕著な河床上昇の履歴を記録する。河道固定化事業としての「太閤宇治川」の天井川化過程に相当する。下流側の伏見港周辺域での河況の悪化をもたらしたと推察される。

〔変動地形・変動微地形区分試案〕本章冒頭、図1に桃山丘陵東西両縁に分布する桃山断層の変位地形について、先行研究成果(国土地理院・産総研編)を含め3色に分け表示するが、図3・

4には赤色で今回の写真判読結果をしめす。断層帯南端に相当する調査地周辺域を中心に、上位Hb面から西端AF面の撓曲前縁まで、分布高度順にF1～F6のコードを付す。崖線は地形面の起伏に沿うように西に弓なりにはらむが、いずれも不連続な分布パターンを描く。図5^(註2)に調査地周辺の地形条件を示す。図5(a)の地形面区分は、米軍空中写真、国土地理院開示のカラー空中写真(1974年撮影)、同・DEMデータにもとづく陰影地形図3者によってクロスチェックをおこなった。地形面コードとして、P:谷池(治部池)、Dv:開析谷、F2'・G組み合わせ:断層線谷(グラーベン推定)を補う。基図および今回調査区検出の地形変換線は本文編図16を引用する。図(b)は、高位段丘撓曲面Hcを中心とする縦・横断プロファイルである。今回調査地はF3・F4の判読位置が重複する。それぞれ『都市圏活断層図』・『産総研地質図』に記載される。調査区南壁において、F3が約1.5mの砂礫層の落差と断面下部での正断層性の開口部として、他方、F4はきわだつ落差をもたないが、層序が複雑に剪断破壊される変動ゾーンとして確認された。後者は城郭基礎にかかわる基本層序第2層系を寸断し、地震動による変位を履歴する。各変動地形の垂直変位量について、国土地理院地図DEM(数値標高モデル)データを用い断面計測する。以下、概要を記す。

Hc面の変位地形について、F2(3C区西端、調査地東方):6.00m、F4(調査地東縁):3.95m、F3・F4北延長(2B区東端、森林総研敷地):7.23m、同(3A区、藤森駅):6.40m、Lb面についてF4南部(2C区東端、JR桃山駅近傍):5.09m、F5南端(2C区「指月城」):3.04m、Lb/AF境界におけるF6(2B区南端、京阪丹波橋駅):2.15m、の各変位量の計測値である。低位また新規の地形面ほど変位量を減ずる傾向を指摘しうる。

京都市編(2002,植村原図資料)は桃山断層帯北部におけるH面の垂直変位について、6.3～7.4m(西大谷地内)、6.8m(今熊野地内)、10.0m(東福寺)の各実測値を示す。今回の桃山断層帯南端域の垂直変位量と近似する。

なお、H面形成年代(植村採用の約300ka、今回の推定年代470ka以降、Ma7以降の離水=変動顕在化年代)と垂直変位量から推計される平均変位速度(いわゆるCクラスの活動度)と、H面高度(あるいは深度)分布にもとづく変動量・速度(Bクラス活動度)のあいだに桁違いの差異があることを再度確認しておきたい。

4. 小結

桃山断層帯の変動地形面(高位段丘撓曲面,Hc面)にあたる今回調査区において、強震動にもなって形成されたとみられる変形・変位痕跡を確認しえた。変動イベントは木幡山伏見城構築盛土過程のなかにあったと推察された。冒頭に記したように、1990年代の先行発掘調査成果(Lb/Hc面境界地点、毛利長門西町地内の桃山時代/江戸時代初期境界層準における逆断層群検出)との関係から、慶長伏見地震の起震断層としての桃山断層系の存在をあらためて指摘したい。これまで想定されてきた有馬高槻構造線活断層系ATLの当該期の古地震イベント、断層活動の実態とあわせて、断層末端が交わる両断層帯が共役的關係をもって同期に地震活動をおこなった可能

性が示唆される。文献資料の精査が要されるが、京都盆地東縁域・伏見～京三条間の地震被害の多さに留意すべきであろう（西山・原田,2022;「日本付近のおもな被害地震年代表」『理科年表』2022年版）。

外形・構成物質・形成機構・堆積（離水）年代の4つのセットで地形を単元に分ける地形面区分は、自然地理学・地形学の地形発達史研究における基本的手法である。地形面群の実態が景観構成にあたることから、景観変遷史を編もうとする人文地理学の分析方法にも通底する。地質的過去を含む地表形態分析的な、かつ、今回研究対象とした桃山丘陵のように濃厚な人間活動場における景観形成論的な領域双方からの、すなわち自然・人文複合的な調査研究の進展が要請される。

〔文献〕＊：補記

市原実「大阪層群と大阪平野－資料・第四紀の日本列島4－」『URBAN KUBOTA』No.11,p.p.26-29,1975年

植村善博「変位地形と地下構造からみた京都盆地の活断層」『京都歴史災害研究』第2号,p.p.7-28.

立命館大学歴史都市防災研究所,2004年

植村善博『京都の地震環境』ナカニシヤ出版,123P,2001年

木谷幹一・加茂祐介「京都盆地南部で掘削されたKD-0コア海成層層序の再検討」『地球科学』64,p.p.99-109,2010年

京都市地域活断層調査委員会編,2004「京都盆地の地下構造を南北に分ける宇治川断層の第四紀断層活動」『活断層研究』24,p.p.139-156,2004年

京都市消防局編『京都の活断層』第2版,P.272,2002年

小池寛「伏見城跡」『発掘された地震痕跡』p.p.764・765,埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会,1996年

小滝篤夫・加藤茂弘・木谷幹一「京都府南丹市,神吉盆地のボーリングコア中の大山起源の中期更新世テフラとその意義」『第四紀研究』50(1),p.p.35-48,2011年

寒川旭「伏見地震を引き起こした活断層」『秀吉を襲った大地震 地震考古学で戦国史を読む』平凡社新書,p.p.133-148,2010年

辻本和美・柴曉彦「伏見城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第44冊,p.p.95-106,財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター,1991年

＊桃山断層系における変動微地形検出の初例（本文・挿図未記載、小池,1996がカバー）

中塚良・釜井俊孝『長岡宮都図譜～都の自然景観と防災の考古学～』同朋舎,8P,2011年

中塚良「水辺の遺跡の自然地理学的研究－京都盆地北西部低地の変動と縄文・弥生時代地震履歴－」

『立命館文学』672,p.p.199－219,2021年

中塚良「京都盆地北部・平安京左京七条一坊十二町周辺の地形条件」『平安京左京七条一坊十二町発掘調査報告書』p.p.49-57,龍谷大学,2022年

＊本章図1:「京都盆地北部基盤岩類深度分布図・宮都配置図」を基図に調整。

西山昭仁・原田智也「1596年文禄伏見地震に関する地震像の検討－伏見・京都での地震被害を中心に－

『京都歴史災害研究』第23号,p.p.15－28,立命館大学歴史都市防災研究所,2022年

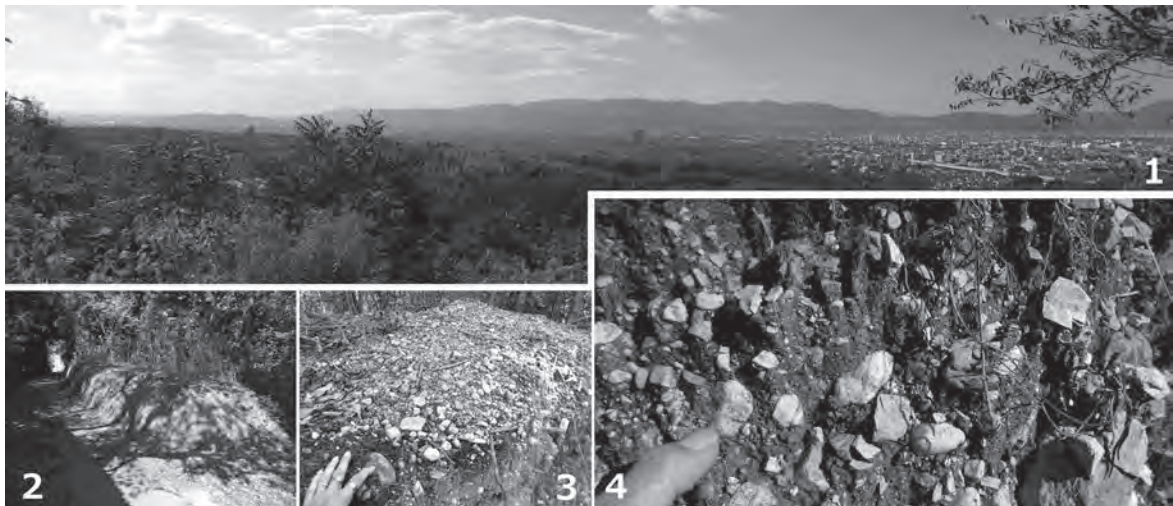
藤田和夫「近畿の第四紀地殻変動と地震活動」『地質ニュース』267,p.p.10-20,地質調査総合センター,1976年

吉岡敏和「京都盆地周縁部における第四紀の断層活動および盆地形成過程」『第四紀研究』26(2)p.p.97-109,1987年

〔註1・補記〕高位段丘（Hb面）の最高位地点における河成地形由来の碎屑物の確認について：

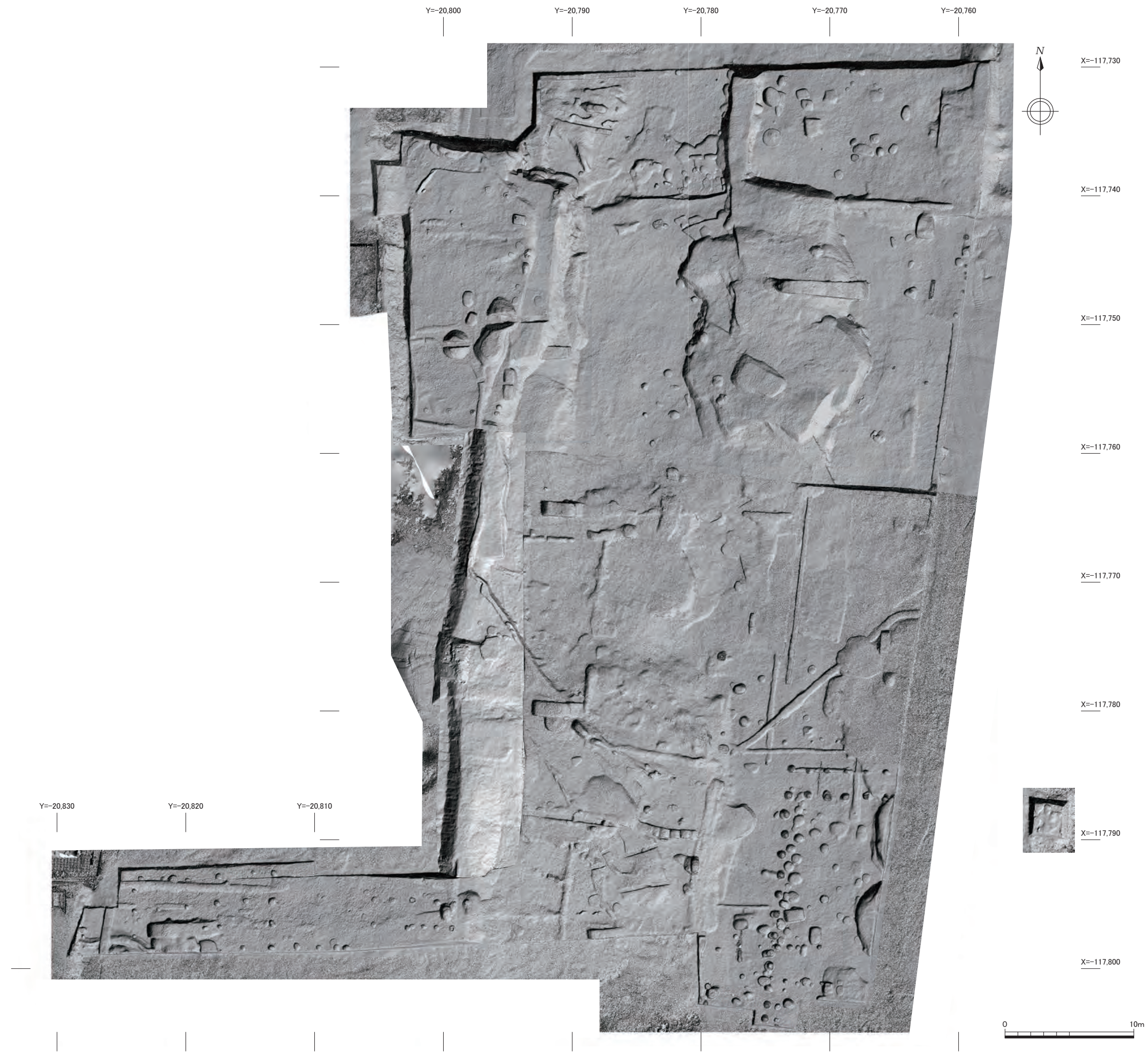
脱稿後、木幡山伏見城の北背後にあたる大岩山（最高位段丘Ha面に地形面区分、標高182m）周辺域において補足調査を実施した。バックグラウンドを含め遺跡にかかわる調査研究対象ととらえる。ステレオグラフによる地形面区分予察の成否を確認する作業の一環である。

図3・4の4a区に要点をプロットする（写真1：山頂直下 Loc.231119-02 からの景観）。緯経度 N34° 56' 47.99" ・ E135° 47' 27.28"（GPS実測値）、標高124.4 m（DEM値）地点。層状チャート・頁岩の基盤岩類を被覆する橙褐色系礫質壤土で構成される地表面において、小～中礫クラスのチャート・頁岩類主体で亜円～円形を呈す礫群の散布する状況を確認した（写真2～4：Loc.1119-01）。地形面区分におけるHa/Hb面境界レベル（約137～166 m）下位、Hb面トップレベルにおける露頭の状況に相当する。大阪層群上部層準（Ma6ないしMa7以浅）の最終堆積面（Hb面）における、領家帯花崗岩類主体の碎屑物から丹波高地基盤岩類碎屑物への、物質供給場の交代すなわち変動地形条件の変化が示唆される。Hb面形成下限年代（離水年代）について、京都盆地中央部と西縁山間盆地の堆積層序との比較によって、およそ470kyを想定する。つづく断層ブロック運動による傾動、撓曲プロセスにおいて、より高位の段丘面前縁に新規の堆積面を付加したと推察される。なお、Ha面構成層準の情報が得られず、形成年代について凡そ第三/四紀境界年代を推定するが、今後、緩傾斜して稜線に散在する小起伏面の直接の堆積層序をとらえうる可能性に留意したい。

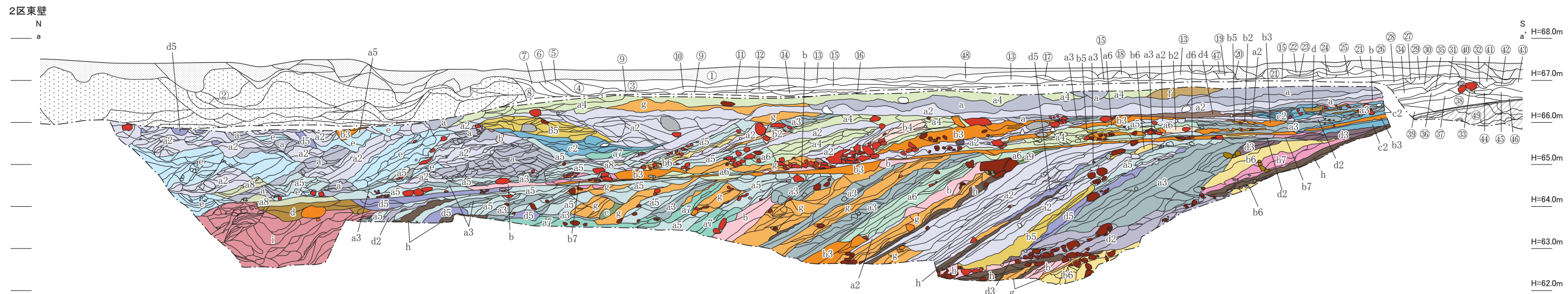


〔註2〕地形判読にあたって、カラー空中写真はCKK-74-15のC13-14～16の3点を利用した。大縮尺・高精度で情報量多く、米軍写真による図3・4の図5範囲について再判読を試みた。契機は本文図16に記載される、調査区を西北西に横断し真西に延伸復原される地形的落差と、調査区東方のHb面を切る谷地形の関係性、すなわち、谷池が設けられる開析谷（仮称治部谷）と調査区の落差の連続可能性の再確認である。調査区東方の地形条件は治部谷（南向き主谷）、F2、F2・Dvに縁どられるHb-a面が南北走向で併行に分布する。東西圧縮応力場における変動履歴が示唆される。主谷北方には鞍部をもつ谷地（地形的弱線における堀の普請か）が不連続に確認できる。二つの鞍部のうち、南が前記、『屋敷取絵図』（略記）に記される土橋（Db）を想起させる。さて、主谷に直交する東西向き「治部池谷」～Lb面のプロファイルA-A'には、Hc面の西への傾動条件が表現される。層序情報での検証が要されるが、Hb面における約10 m以上の埋め立て工事を想定しない限り、治部谷筋と調査区の落差を結びえない。他方、調査区南東にはF2から分岐し調査区に向けて延伸する微起伏（F2'、僅かに東落ちか）を判読しえた。圧縮場としての断層変位地形の上盤側は、浅谷状にたわむ傾向が知られる。F2・調査区斜面間におけるグラーベン（断層線谷）の形成を想定しておきたい。なお、グラーベンに沿って生じる湿潤な水文条件と、調査区内の切り盛りの再施工痕跡の関わりの可能性に留意したい。みずみちの伏在による地盤改良の必要の発生にあたる。即ち、水文条件に則した人工地形改変である。

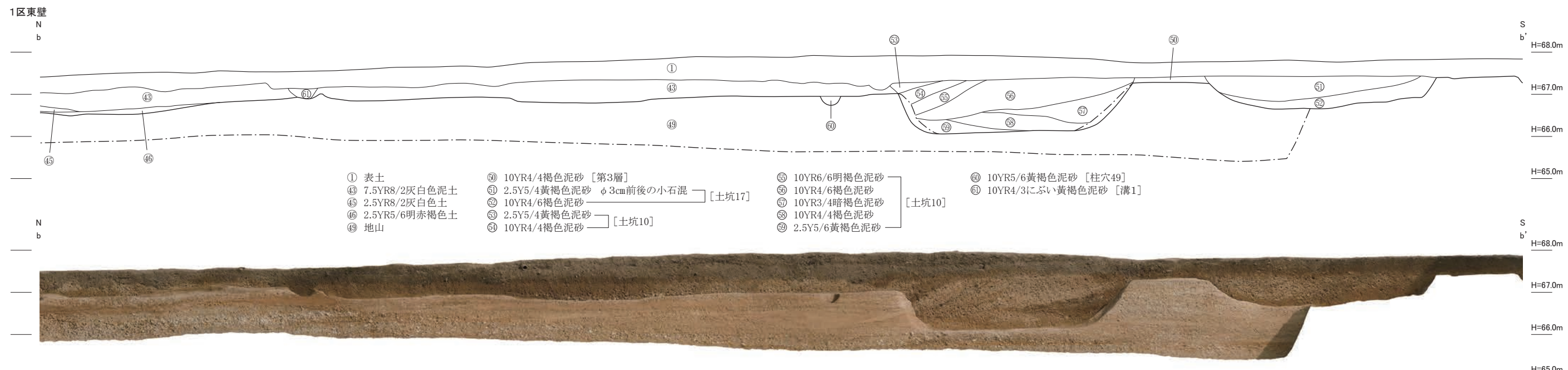
図 版



調査区陰影図 (1 : 300)



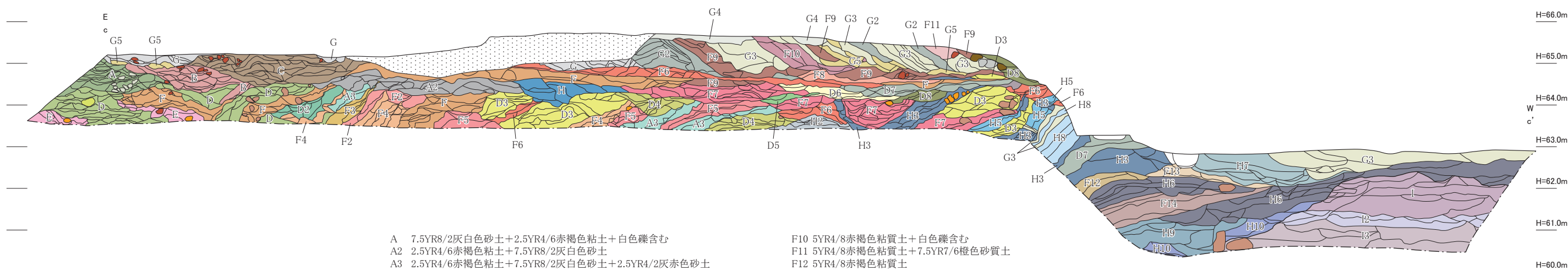
- | | | | | | | | |
|--------------------------------|--------------------------|-----------------------------|--------------------|--------------------|------------------------|-----------------------|------------------------|
| a 7.5YR8/1灰白色粗砂 | b2 5YR6/4にぶい橙色土+灰白色砂が混じる | d2 5YR3/4暗赤褐色土 | ① 表土 | ⑪ 5YR7/2明褐色砂土 | ⑳ 5YR7/2明褐色砂土 | ㉑ 5YR5/6明赤褐色土 | ㉒ 5YR4/1褐灰色土 |
| a2 7.5YR8/1灰白色粗砂小礫多く含む | b3 5YR6/4にぶい橙色粘土 | d3 5YR4/6赤褐色粘土 | ② 2.5YR7/3浅黄色砂土 | ⑫ 5YR7/2明褐色灰色粗砂 | ㉓ 2.5YR4/6赤褐色土 | ㉔ 5YR4/3にぶい赤褐色土 | ㉕ 7.5YR8/1灰白色土 |
| a3 7.5YR8/1灰白色粗砂+赤褐色粘質土小礫含む | b4 5YR6/4にぶい橙色土+灰白色砂土 | d4 5YR4/6赤褐色粘土+灰白色砂塊状に入る | ③ 2.5YR5/4にぶい赤褐色土 | ⑬ 2.5YR7/2にぶい赤褐色砂土 | ㉔ 10YR6/2灰黄褐色砂土 | ㉕ 5YR4/3にぶい赤褐色土+角礫含む | ㉖ 7.5YR8/2灰白色粘土 |
| a4 7.5YR8/1灰白色砂土わずかに赤褐色ブロック粒含む | b5 5YR6/4にぶい橙色土+灰白色砂多く含む | d5 5YR3/4暗赤褐色土+白色丸礫含む | ④ 2.5YR4/8赤褐色土 | ⑭ 5YR7/1明褐色灰色砂土 | ㉕ 10YR7/3にぶい黄褐色砂土 | ㉖ 7.5YR8/1灰白色粘砂 | ㉗ 5YR5/3にぶい赤褐色土 |
| a5 7.5YR8/1灰白色粗砂 | b6 2.5YR4/6赤褐色砂礫 | d6 5YR3/4暗赤褐色土+2.5YR7/1明赤灰砂 | ⑤ 7.5YR6/2 灰褐色砂土 | ⑮ 2.5YR5/4にぶい赤褐色土 | ㉖ 7.5YR5/4にぶい褐色砂土 | ㉗ 7.5YR8/2灰白色砂土 | ㉘ 2.5YR8/2灰白色土 |
| a6 7.5YR8/1灰白色砂+白色粘土ブロック含む | b7 5YR6/4にぶい橙色土 | e 2.5YR8/2灰白色砂 | ⑥ 7.5YR5/4にぶい褐色砂土 | ⑯ 7.5YR7/2明褐色灰色砂土 | ㉗ 7.5YR7/2明褐色灰色粗砂+礫を含む | ㉘ 7.5YR6/2灰白色粘砂 | ㉙ 2.5YR6/6橙褐色土ブロック土を含む |
| a7 7.5YR8/1灰白色細砂 | c 7.5YR7/1明褐色灰色粗砂 | f 5YR3/4暗赤褐色粘土ブロック状+灰白色粗砂 | ⑦ 5YR4/4にぶい赤褐色砂土 | ⑰ 7.5YR5/4にぶい褐色砂土 | ㉘ 2.5YR5/6赤褐色粘質土 | ㉙ 7.5YR7/2明褐色灰色砂土 | ㉚ 7.5YR5/6明褐色土 細い砂を含む |
| a8 7.5YR8/1灰白色粗細砂+角礫含む | +白色角ブロック粘土を含む | g 5YR3/4暗赤褐色粘土ブロック多く含む | ⑧ 5YR3/4赤褐色土 | ⑱ 5YR4/6赤褐色砂土 | ㉙ 2.5YR4/6赤褐色粘質土 | ㉚ 7.5YR5/6明褐色土 細い砂を含む | ㉛ 2.5YR6/3にぶい黄色砂土 |
| a9 7.5YR8/1灰白色砂土+赤褐色粘土ブロック | c2 7.5YR7/1明褐色灰色細砂 | h 10YR3/2黒褐色土 | ⑨ 5YR7/2明褐色砂土 | ⑲ 5YR5/4にぶい赤褐色土 | ㉚ 5YR7/6橙褐色粘土 | ㉛ 5YR4/6赤褐色土+白色砂を含む | ㉜ 2.5Y5/3黄褐色土 |
| b 5YR6/4にぶい橙色土 | d 5YR3/4暗赤褐色粘土砂混じり | i 2.5YR4/6赤褐色粘土+灰白色細砂塊状に入る | ⑩ 2.5YR5/4にぶい赤褐色砂土 | ⑳ 5YR7/2明褐色砂土 | ㉚ 5YR6/3にぶい橙色砂土 | ㉜ 5YR7/2明褐色土 | ㉝ 地山 |



- | | | | |
|------------------|------------------------------------|-----------------|-------------------------|
| ① 表土 | ⑤⑩ 10YR4/4褐色泥砂 [第3層] | ⑤⑤ 10YR6/6明褐色泥砂 | ⑥⑩ 10YR5/6黄褐色泥砂 [柱穴49] |
| ④③ 7.5YR8/2灰白色粘土 | ⑤① 2.5Y5/4黄褐色泥砂 φ 3cm前後の小石混 [土坑17] | ⑤⑥ 10YR4/6褐色泥砂 | ⑥① 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 [溝1] |
| ④⑤ 2.5YR8/2灰白色土 | ⑤② 10YR4/6褐色泥砂 | ⑤⑦ 10YR3/4暗褐色泥砂 | |
| ④⑥ 2.5YR5/6明赤褐色土 | ⑤③ 2.5Y5/4黄褐色泥砂 | ⑤⑧ 10YR4/4褐色泥砂 | |
| ④⑨ 地山 | ⑤④ 10YR4/4褐色泥砂 [土坑10] | ⑤⑨ 2.5Y5/6黄褐色泥砂 | |

1・2区東壁土層断面図 (1:100)





- | | |
|---|---|
| <p>A 7.5YR8/2灰白色砂土+2.5YR4/6赤褐色粘土+白色礫含む
 A2 2.5YR4/6赤褐色粘土+7.5YR8/2灰白色砂土
 A3 2.5YR4/6赤褐色粘土+7.5YR8/2灰白色砂土+2.5YR4/2灰赤色砂土
 B 7.5YR7/3にぶい橙色粘質土+2.5YR4/6赤褐色粘土ブロック少量含む
 C 2.5YR5/6明赤褐色粘砂+白色砂礫土含む
 D 5YR7/1明褐色粘質土+5YR4/8赤褐色粘土ブロック大含む
 D2 5YR7/1明褐色粘質土+5YR4/8赤褐色粘土+白色礫含む
 D3 5YR7/1明褐色粘質土+5YR4/8赤褐色粘土+白色礫少量含む
 D4 5YR7/1明褐色粘質土+5YR4/8赤褐色粘土+7.5YR4/4褐色土
 D5 5YR7/1明褐色粘質土+5YR4/8赤褐色粘土+10YR4/2灰黄褐色土
 D6 5YR7/1明褐色粘質土+白色礫
 D7 5YR7/1明褐色粘質土+5YR4/3にぶい赤褐色土+白色礫
 D8 5YR7/1明褐色粘質土+白色礫
 E 10YR6/6明黄褐色粘砂
 F 5YR4/8赤褐色粘質土
 F2 5YR4/8赤褐色粘質土+5YR5/8赤褐色粘砂
 F3 5YR4/8赤褐色粘質土+7.5YR7/3にぶい橙色砂土
 F4 5YR4/8赤褐色粘質土+7.5YR7/3にぶい橙色砂土+白色砂礫多く含む
 F5 5YR4/8赤褐色粘質土+5YR5/8赤褐色粘砂
 F6 5YR4/8赤褐色粘質土+5YR4/8赤褐色粘質土+10YR5/4にぶい黄褐色砂
 F7 5YR4/8赤褐色粘質土+白色礫多く含む
 F8 5YR4/8赤褐色粘質土+5YR7/3にぶい橙色砂土
 F9 5YR4/8赤褐色粘質土+5YR7/3にぶい橙色砂土+白色礫含む</p> | <p>F10 5YR4/8赤褐色粘質土+白色礫含む
 F11 5YR4/8赤褐色粘質土+7.5YR7/6橙色砂質土
 F12 5YR4/8赤褐色粘質土
 F13 5YR4/8赤褐色粘質土+5YR6/2灰褐色土砂礫
 F14 5YR4/8赤褐色粘質土+白色礫多く含む
 G 7.5YR8/2灰色砂+白色礫含む
 G2 7.5YR8/2灰色砂+円形白色礫多く含む
 G3 7.5YR8/2灰色砂+角白色礫多く含む
 G4 7.5YR8/2灰色砂土+角白色礫を細かく含む
 G5 7.5YR8/2灰色砂+2.5YR4/4にぶい赤褐色粘土+白色角礫多く含む
 H 2.5YR4/4にぶい赤褐色粘土礫+5YR8/1灰色粘土ブロック
 H2 2.5YR4/4にぶい赤褐色粘土+5YR3/3暗赤褐色土
 H3 2.5YR4/4にぶい赤褐色粘土5YR2/2黒褐色土
 H4 2.5YR4/4にぶい赤褐色粘土+5YR7/3にぶい橙色砂質土
 H5 2.5YR4/4にぶい赤褐色粘土
 H6 2.5YR4/4にぶい赤褐色粘土+5YR4/8赤褐色粘質土
 H7 2.5YR4/4にぶい赤褐色粘土+5YR4/8赤褐色粘質土+角礫含む
 H8 2.5YR4/4にぶい赤褐色粘土+5YR4/8赤褐色粘質土+下部に角礫含む
 H9 2.5YR4/4にぶい赤褐色粘土+5YR4/8赤褐色粘質土+赤褐色粘土ブロック多く含む
 H10 2.5YR4/3にぶい赤褐色粘質土+白色角礫を含む
 I 2.5Y7/3浅黄色砂土
 I2 10YR6/4にぶい黄橙土 [地山]
 I3 10YR4/3にぶい黄褐色土</p> |
|---|---|



2区東西断割り南壁土層断面図 (1:100)

南北断割り西壁

S
d

N
d'

H=67.0m

H=66.0m

H=65.0m

H=64.0m

H=63.0m

H=62.0m

東西断割り北壁

W
e

E
e'

H=66.0m

H=65.0m

H=64.0m

H=63.0m

H=62.0m

H=61.0m

H=60.0m

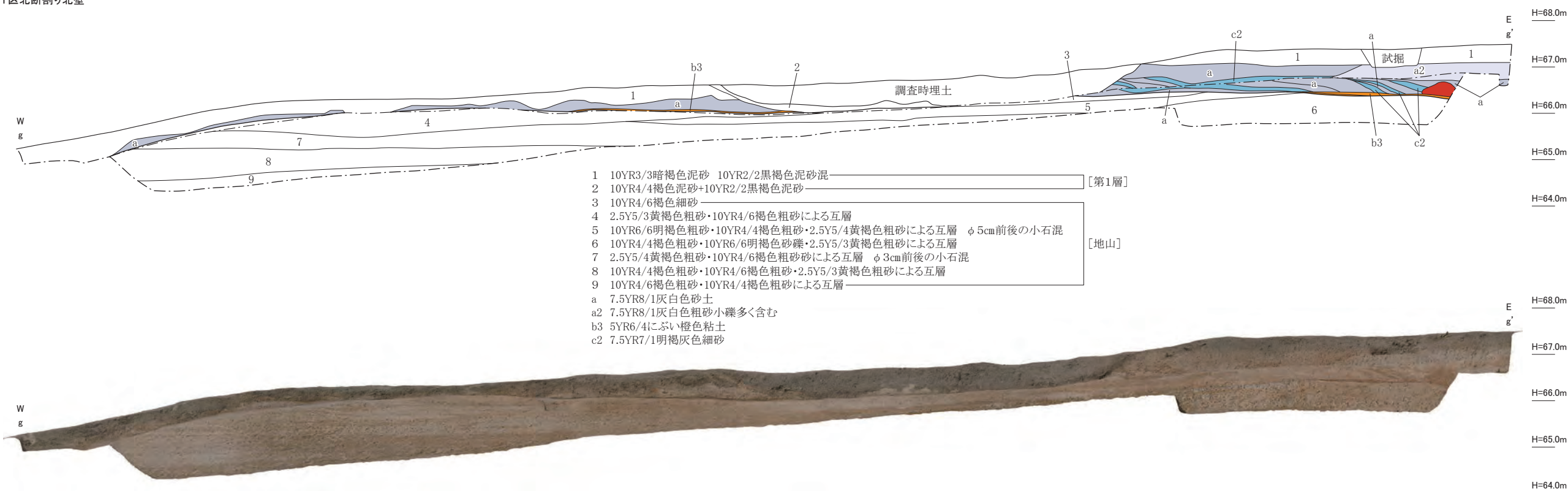


2区断割り断面オルソ画像 (1:100)

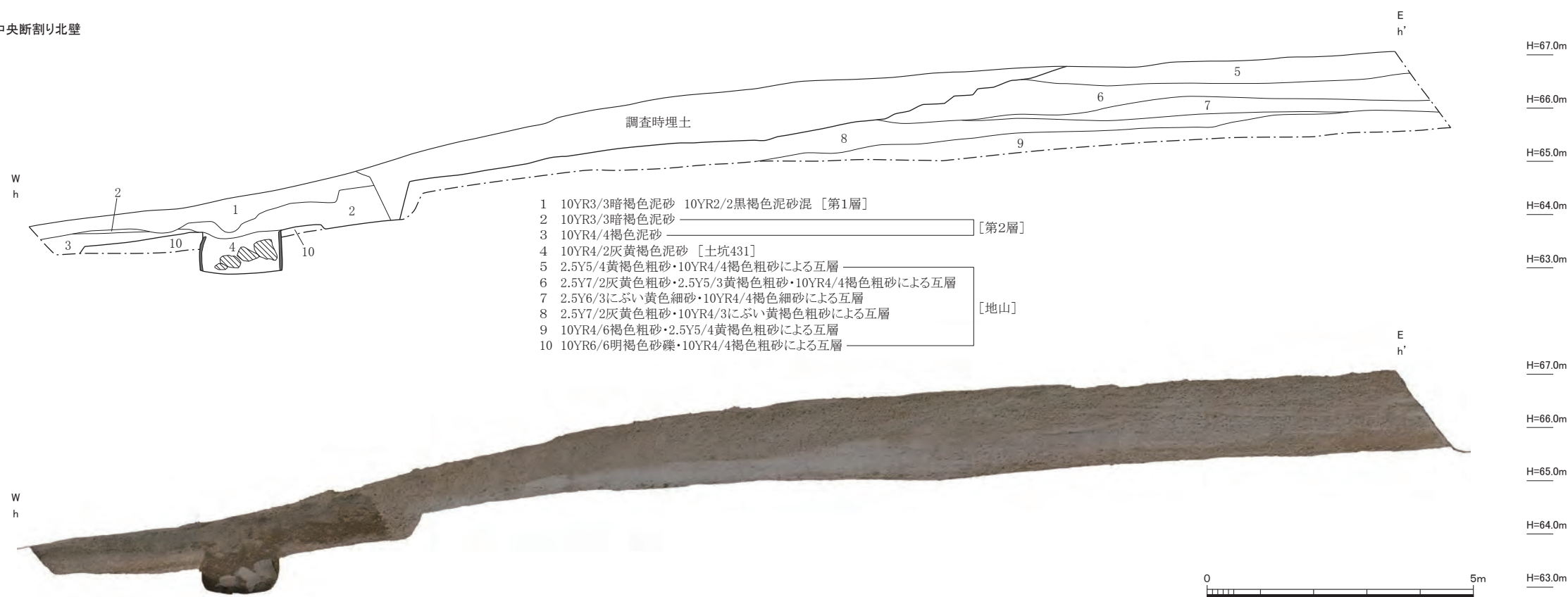


1区南壁土層断面図 (1:100)

1区北断割り北壁

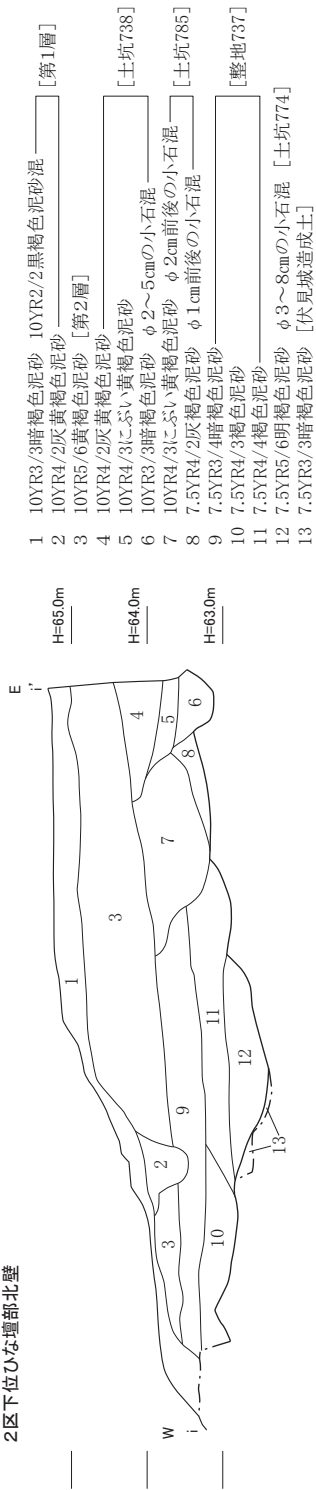


1区中央断割り北壁

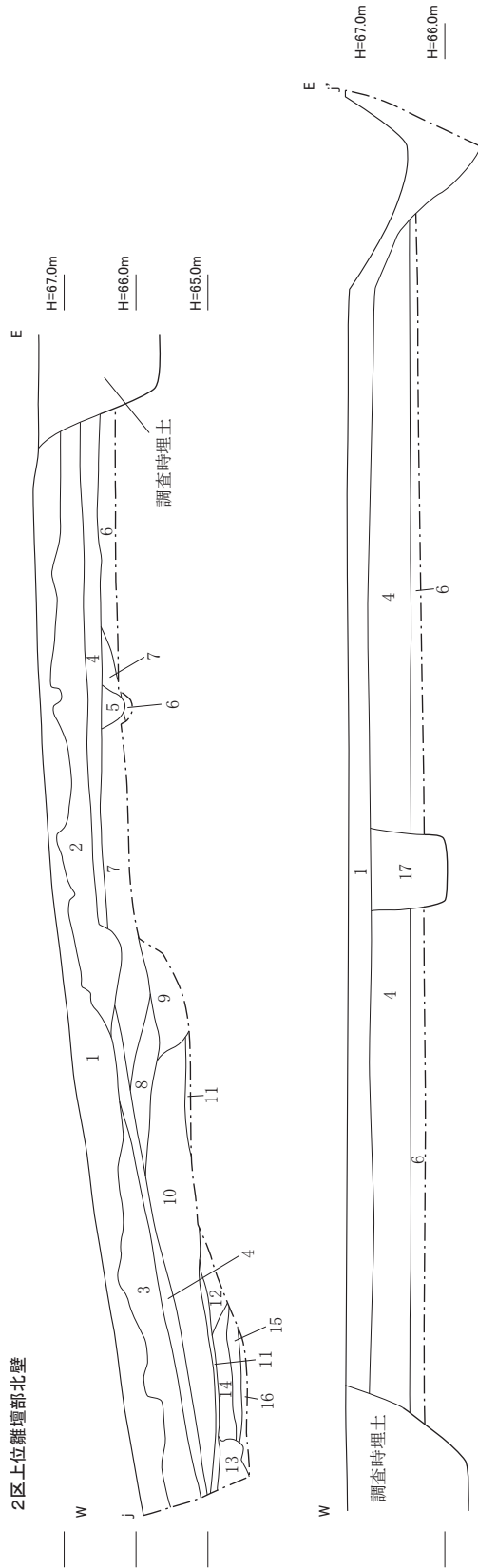


1区北・中央断割り土層断面図 (1:100)

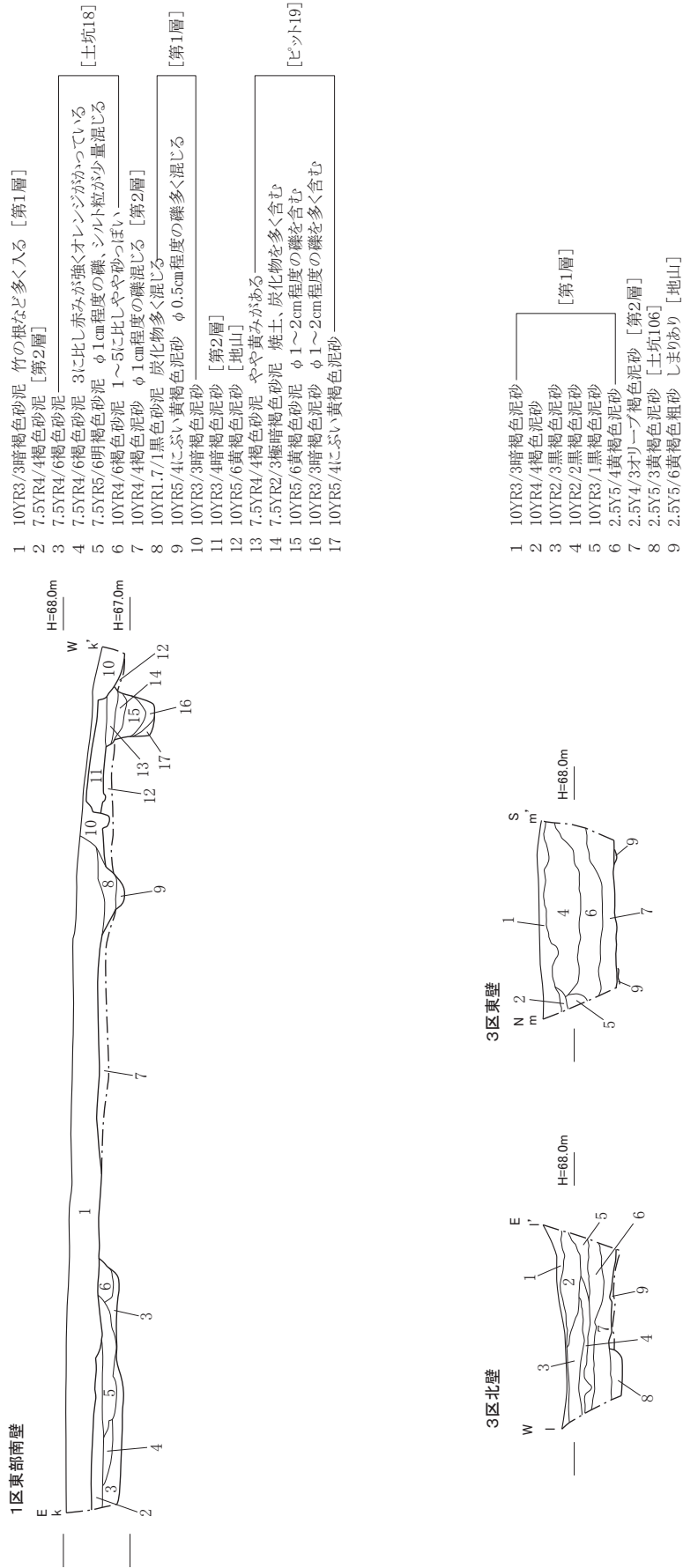
2区下位ひな壇部北壁



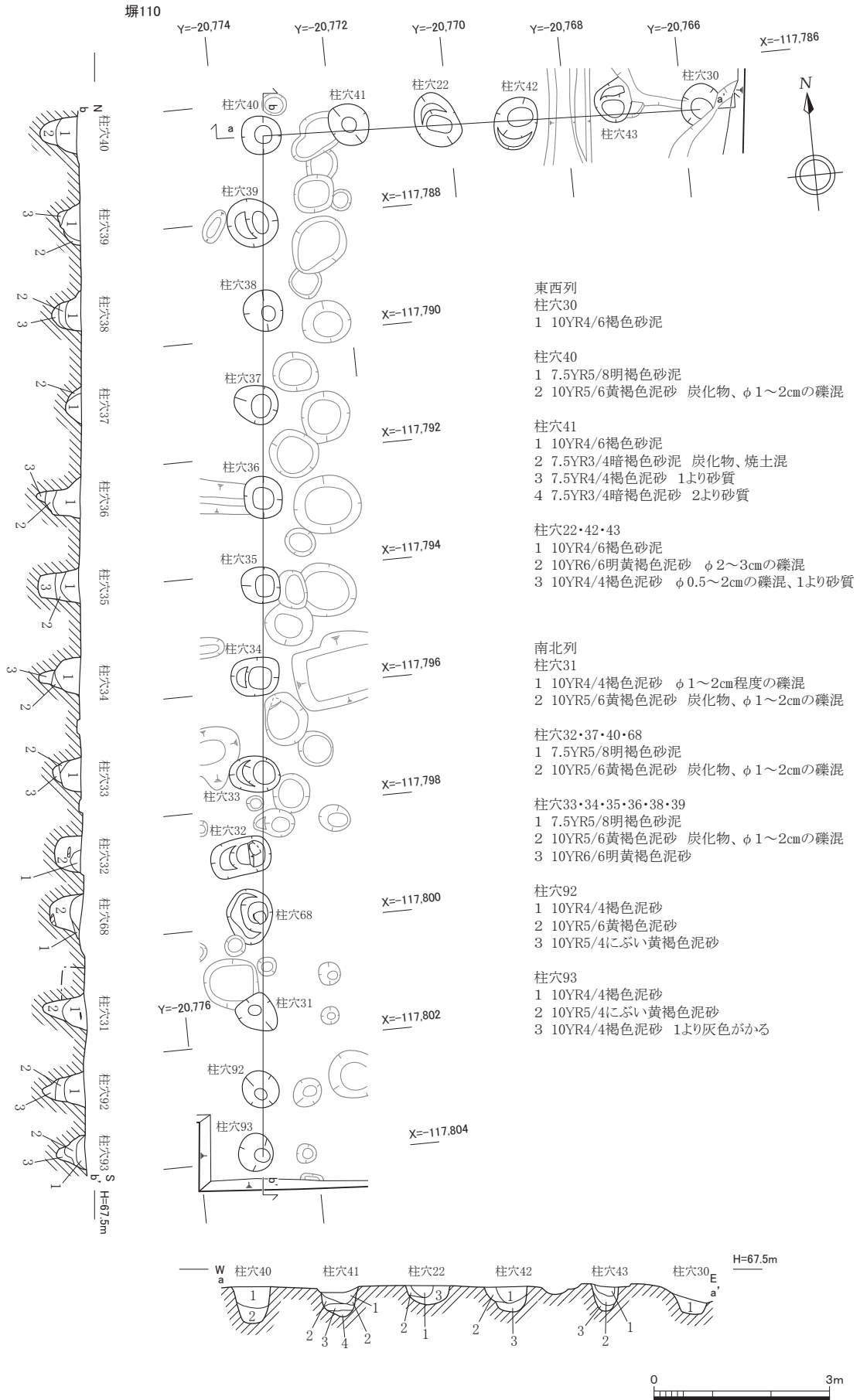
2区上位雑壇部北壁



2区北壁土層断面図 (1 : 100)

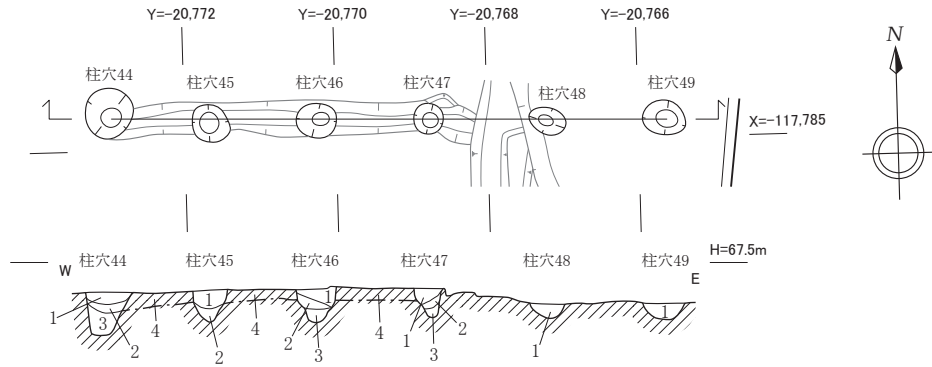


1区東部南壁、3区北・東壁土層断面図 (1:100)



塀 110 平面・断面図 (1 : 100)

柱列111



柱穴44

- 1 10YR4/4褐色泥砂 φ1~2cmの礫多く混
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 2よりやや暗い
- 4 10YR4/6褐色泥砂 φ1~4cmの礫多く混

柱穴45

- 1 10YR4/6褐色泥砂 φ1~2cmの礫混
- 2 10YR5/6黄褐色泥砂

柱穴46

- 1 10YR3/4暗褐色泥砂 黄味の強いブロックまばらに混
- 2 10YR4/4褐色泥砂 やや黄味が強い
- 3 10YR5/6黄褐色泥砂

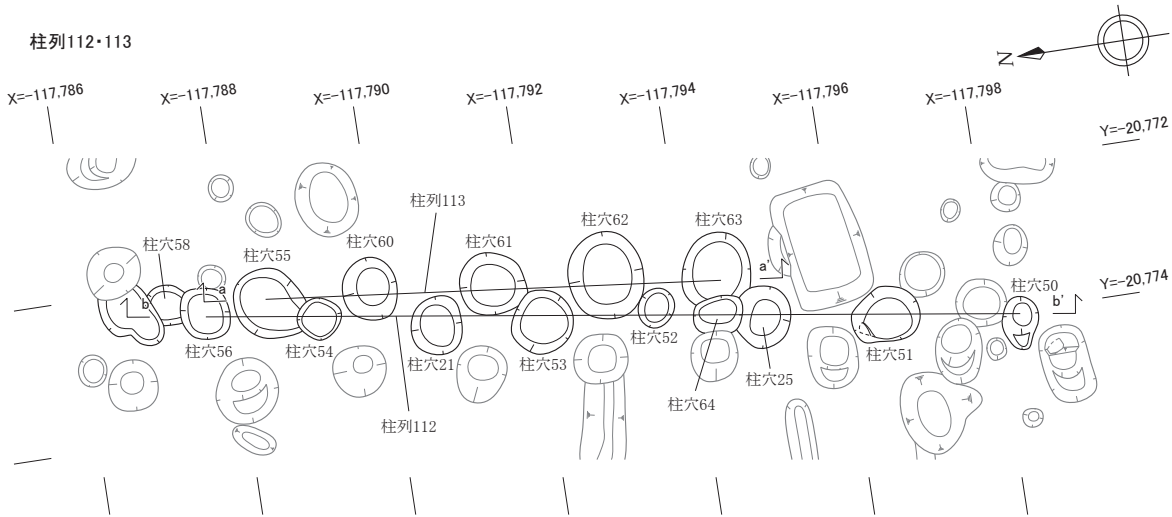
柱穴47

- 1 10YR4/6褐色泥砂
- 2 10YR4/4褐色泥砂 やや黄味が強い
- 3 10YR5/6黄褐色泥砂

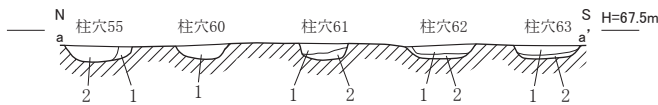
柱穴48・49

- 1 10YR5/6黄褐色泥砂

柱列112・113



柱列113



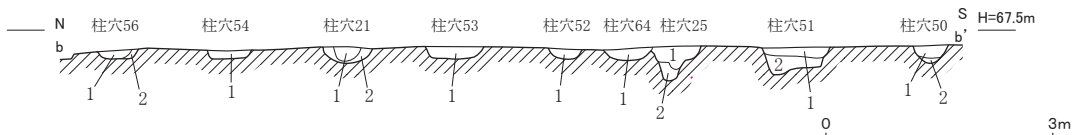
柱穴55・61~63

- 1 7.5YR5/6明褐色砂泥
- 2 10YR5/6黄褐色泥砂 φ1~2cmの礫混

柱穴60

- 1 10YR5/8黄褐色泥砂 φ1cmの礫混

柱列112



柱穴53・54・57

- 1 10YR6/6明黄褐色泥砂 φ2~4cmの礫混

柱穴56

- 1 10YR3/4暗褐色砂泥 焼土、炭化物含む
- 2 10YR6/6明黄褐色泥砂 φ2~4cmの礫混

柱穴21

- 1 10YR3/4暗褐色砂泥 焼土、炭化物含む
- 2 10YR4/6褐色泥砂 φ1~2cmの礫混

柱穴52

- 1 10YR3/4暗褐色砂泥 焼土、炭化物混

柱穴64

- 1 10YR4/6褐色泥砂

柱穴25

- 1 7.5YR4/4褐色砂泥 焼土、炭化物混
- 2 7.5YR3/4暗褐色泥砂

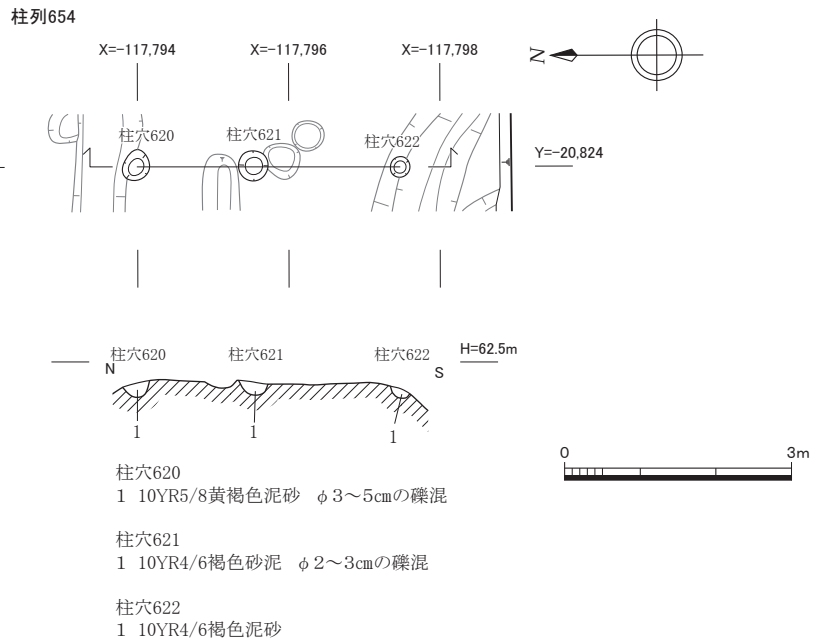
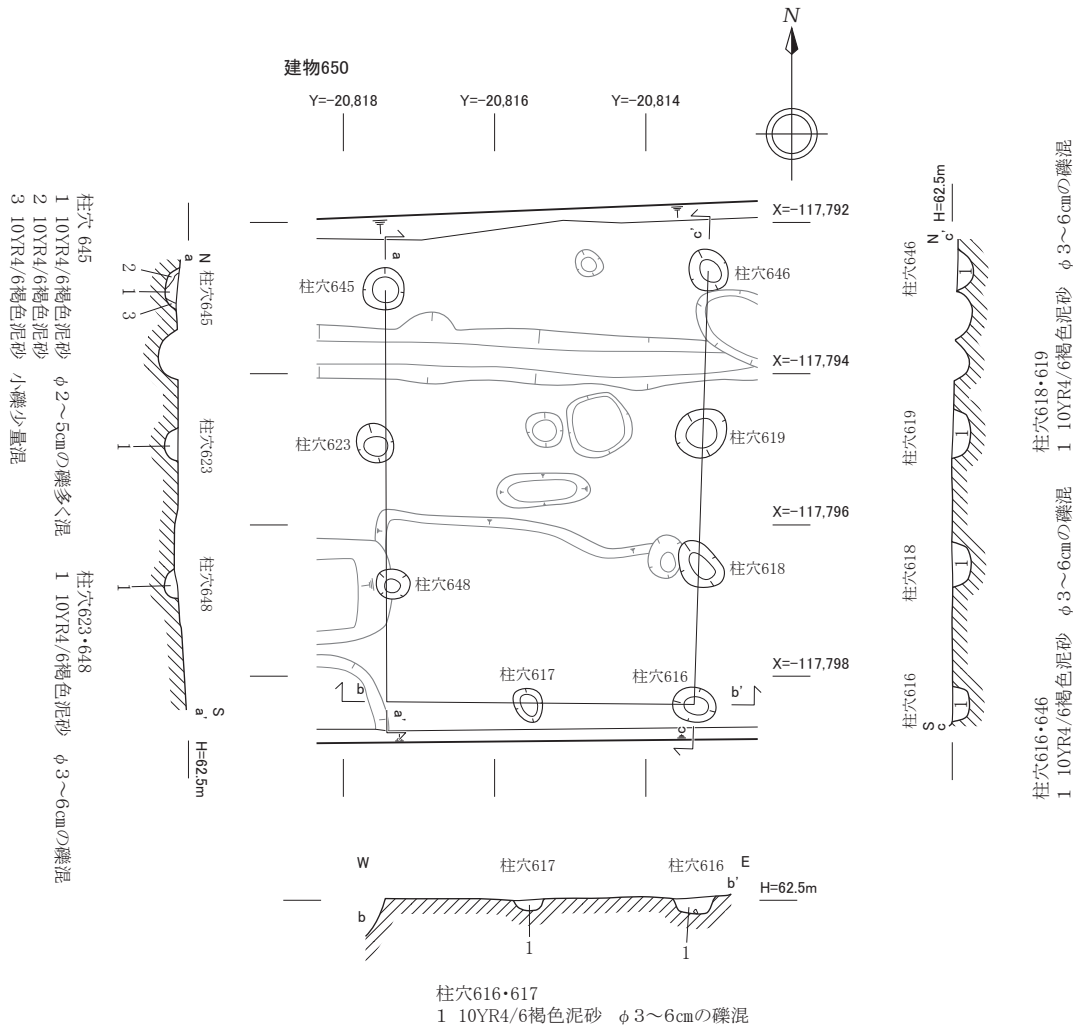
柱穴51

- 1 7.5YR4/6褐色砂泥
- 2 10YR6/6明黄褐色泥砂 φ2~4cmの礫混

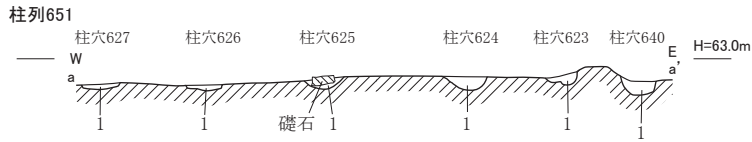
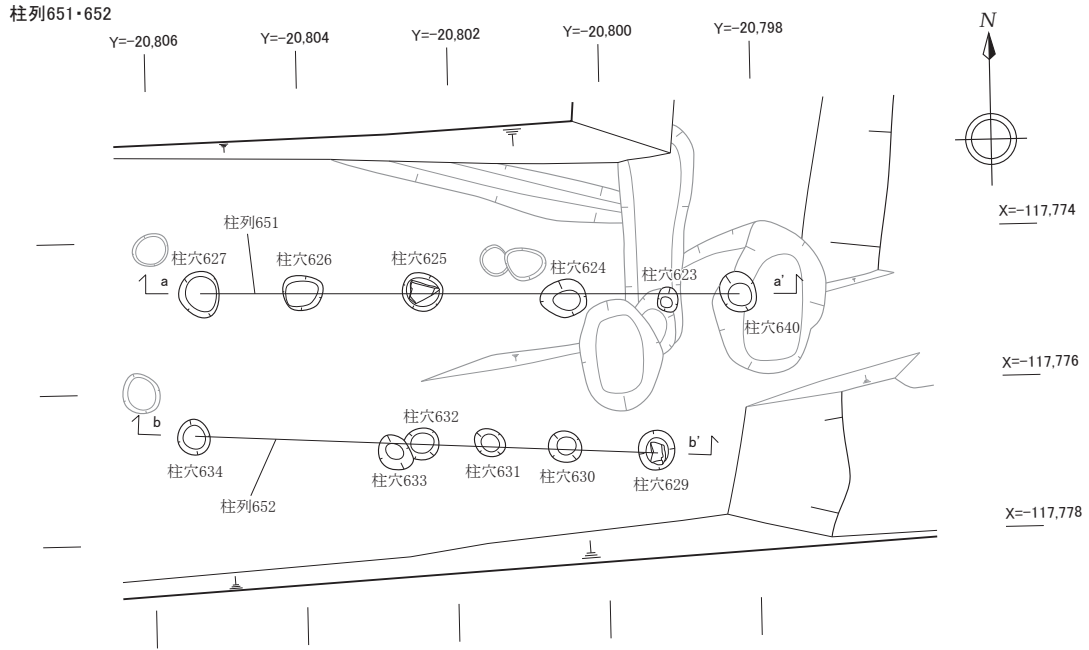
柱穴50

- 1 10YR5/6黄褐色泥砂 炭化物を少量混
- 2 10YR4/6褐色泥砂

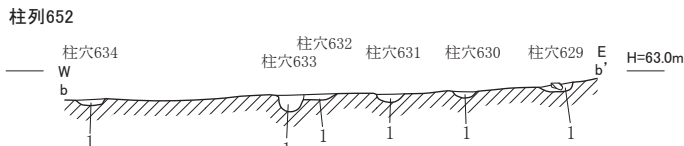
柱列 111・112・113 平面・断面図 (1:100)



建物 650、柱列 654 平面・断面図 (1 : 100)

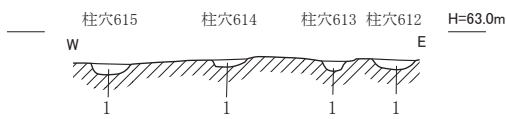
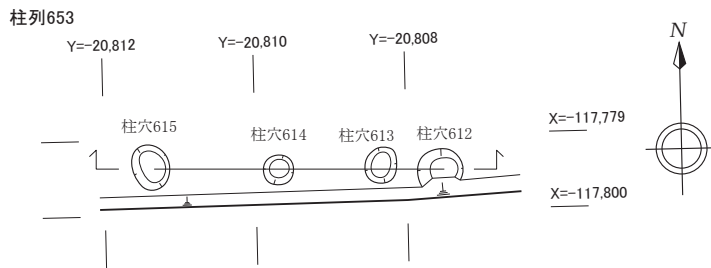


柱穴623～627・640
1 10YR4/6褐色泥砂 φ1～2cmの礫多く混



柱穴629～631・633・634
1 10YR4/6褐色泥砂 φ1～2cmの礫多く混、根石?あり

柱穴632
1 10YR4/6褐色泥砂

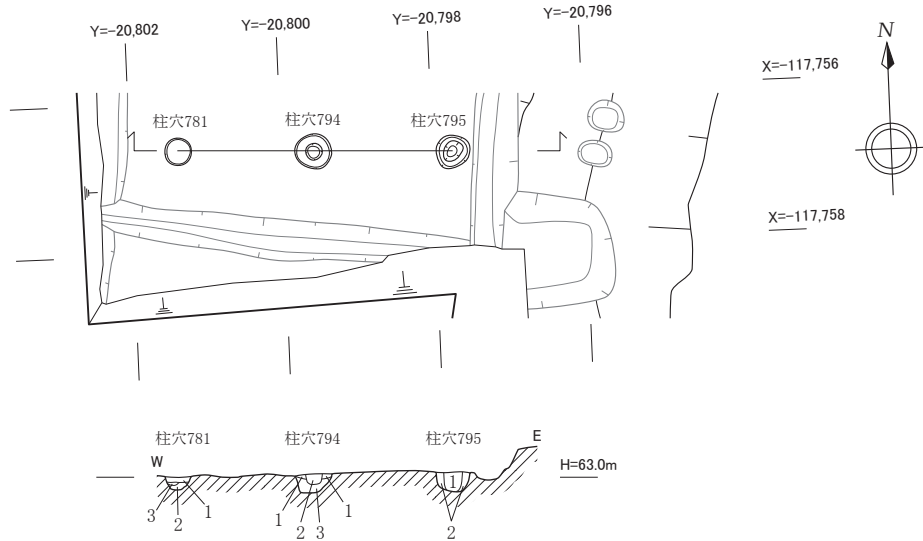


柱穴612～615
1 10YR5/8黄褐色泥砂 φ3～4cmの礫混



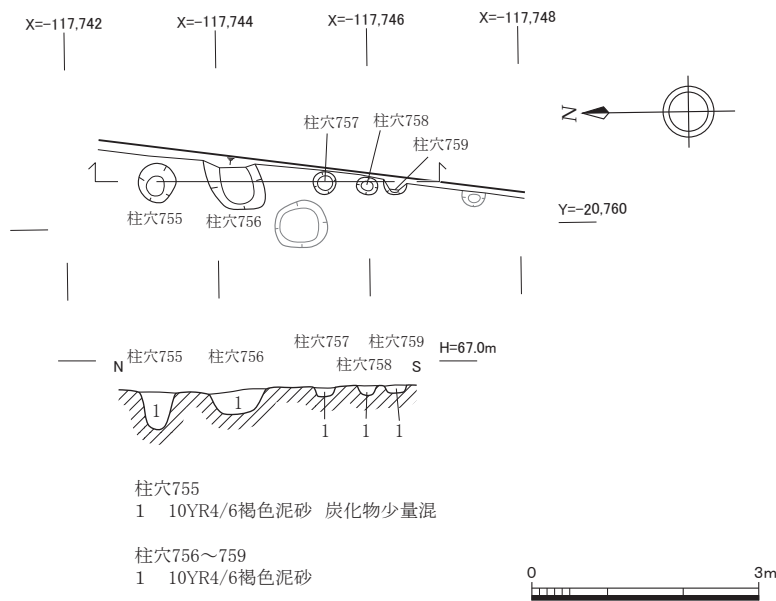
柱列 651・652・653 平面・断面図 (1:100)

柱列810



- | | | |
|----------------------|---------------------|----------------------|
| 柱穴781 | 柱穴794 | 柱穴795 |
| 1 5YR4/3にぶい赤褐色泥土 | 1 7.5YR4/4褐色砂土 礫混じり | 1 10YR4/3にぶい黄褐色土 |
| 2 5YR5/6明赤褐色泥砂 | 2 10YR4/3にぶい黄褐色土 | 2 7.5YR4/4褐色砂土 小石混じり |
| 3 7.5YR4/4褐色砂土 小石混じり | 3 5YR5/6明赤褐色土 | |

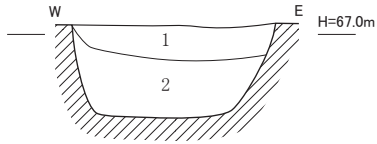
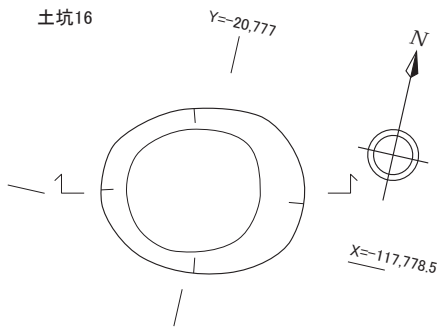
柱列811



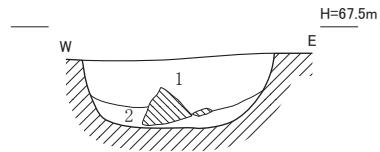
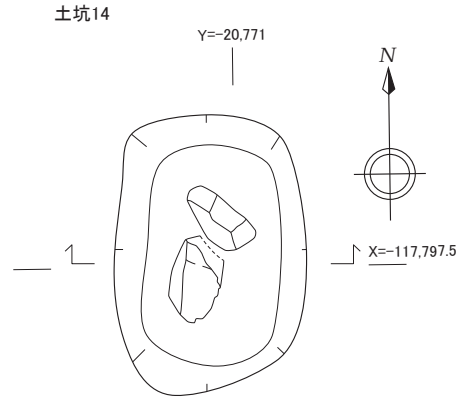
- 柱穴755
- 1 10YR4/6褐色泥砂 炭化物少量混

- 柱穴756~759
- 1 10YR4/6褐色泥砂

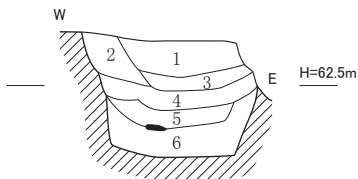
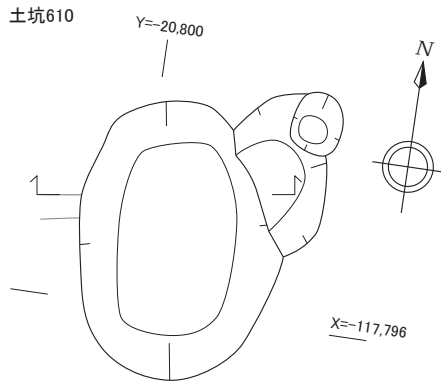
柱列 810・811 平面・断面図 (1 : 100)



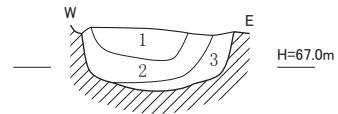
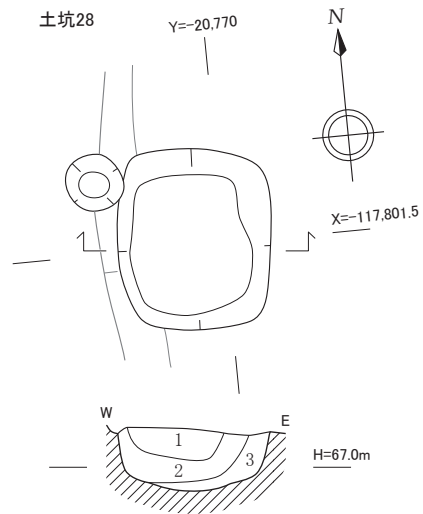
- 1 10YR4/6褐色泥砂 φ2~3cmの礫混
- 2 10YR4/4褐色泥砂



- 1 10YR4/6褐色泥砂 φ1~5cmの礫混
- 2 10YR5/8黄褐色砂泥

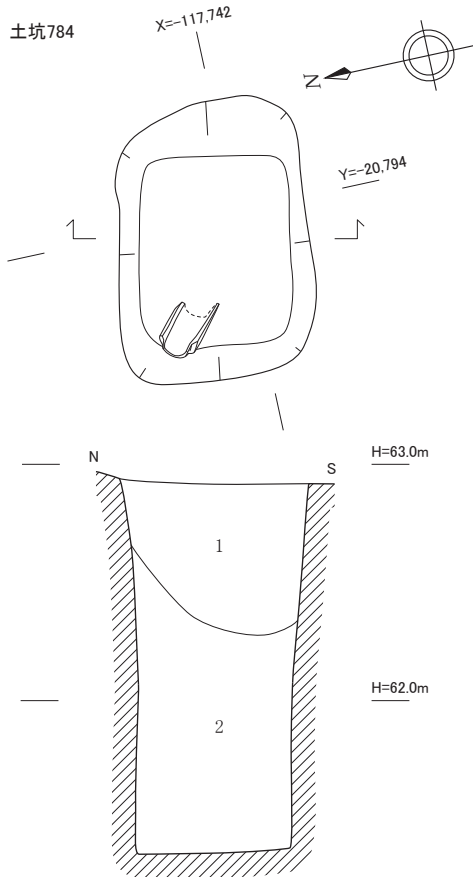


- 1 7.5YR4/6褐色泥砂
- 2 7.5YR3/4暗褐色砂泥 炭化物混
- 3 7.5YR5/6明褐色泥砂 φ5~10cmの礫混
- 4 5YR3/4暗赤褐色砂泥
- 5 7.5YR4/6褐色砂泥
- 6 5YR4/2灰褐色砂泥 焼土・炭化物多く混

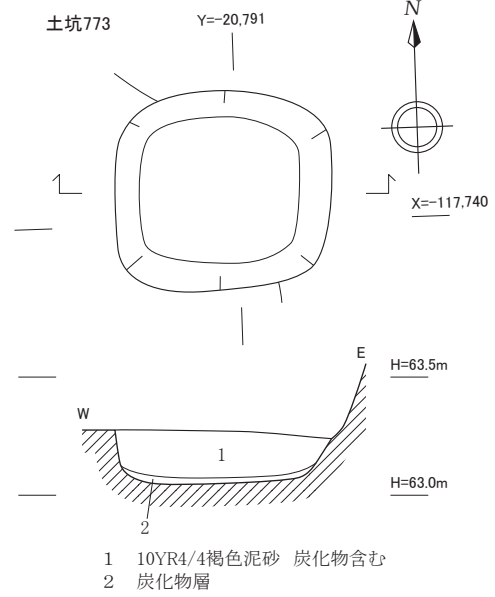


- 1 7.5YR5/6明褐色砂泥
- 2 7.5YR4/4褐色砂泥 φ2~3cmの礫少量混
- 3 10YR5/6黄褐色泥砂

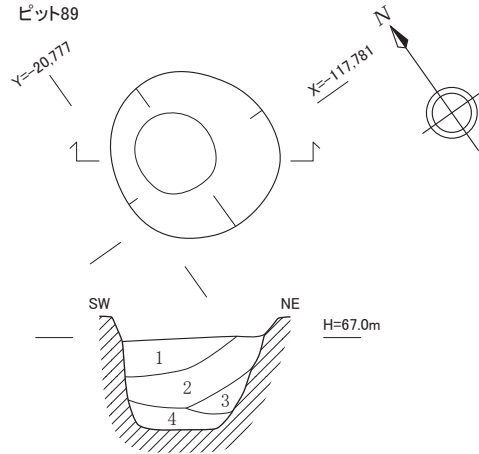




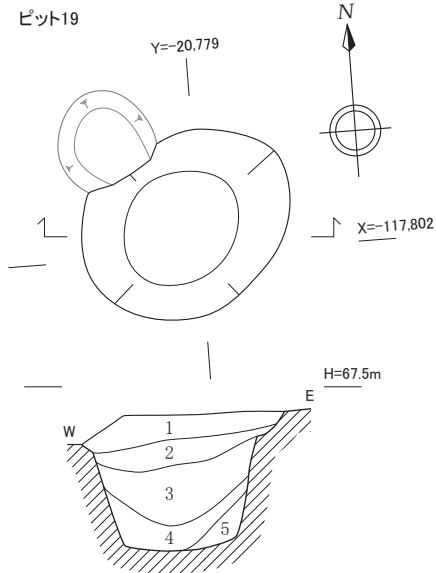
- 1 10YR4/6褐色砂泥 炭化物・砂泥少量含む
- 2 7.5YR4/4褐色泥砂



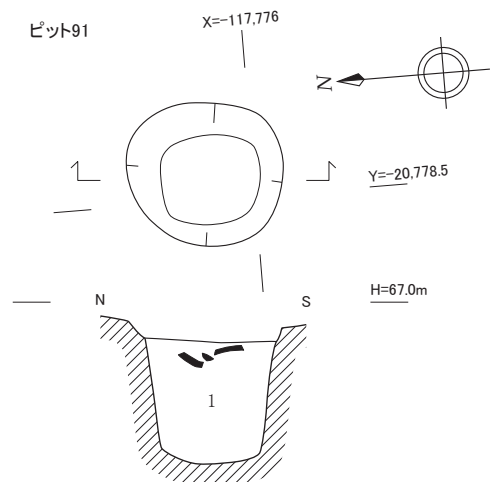
- 1 10YR4/4褐色泥砂 炭化物含む
- 2 炭化物層



- 1 10YR4/4褐色泥砂
- 2 10YR4/4褐色泥砂 1に比しやや暗い
- 3 10YR4/4褐色泥砂 炭化物混
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥

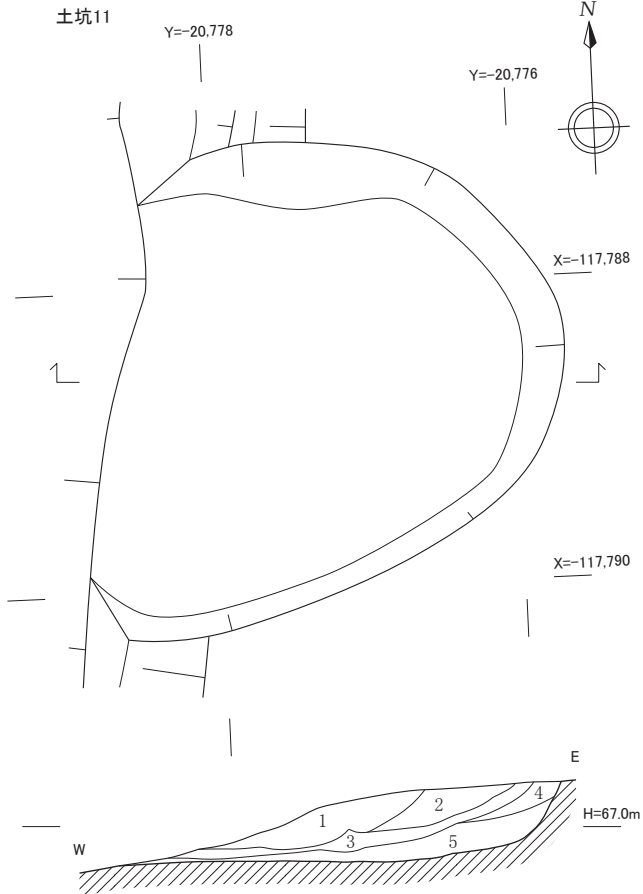
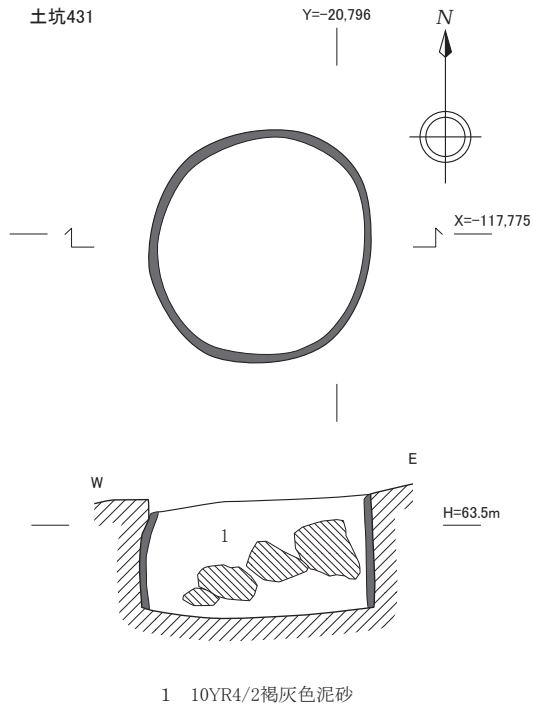


- 1 7.5YR4/4褐色砂泥 やや黄みがある
- 2 7.5YR2/3極暗褐色砂泥 焼土、炭化物多く混
- 3 10YR5/6黄褐色砂泥 φ1~2cmの礫混
- 4 10YR3/3暗褐色泥砂 φ1~2cmの礫多く混
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂

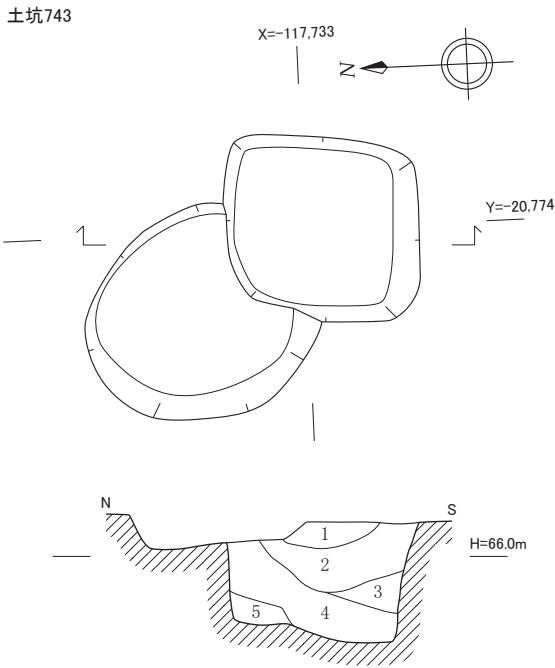


- 1 7.5YR3/4暗褐色砂泥 焼土・炭化物混

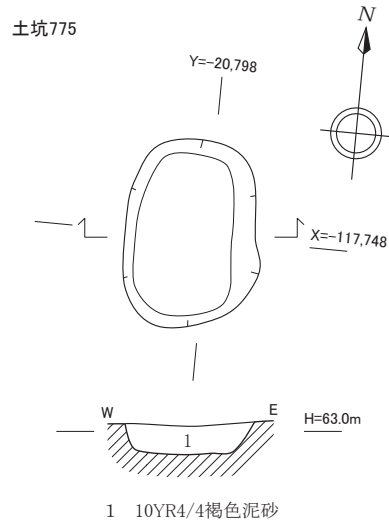
伏見城期土坑、ピット平面・断面図 (1 : 40)



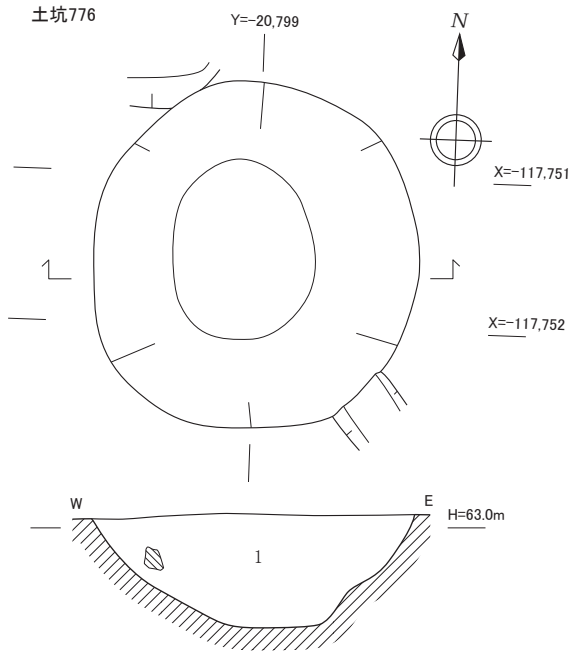
- 1 10YR4/6褐色泥砂 φ1~4cmの礫が混じる
- 2 10YR5/4暗褐色泥砂 炭化物少量、10YR5/8黄褐色粒混じる
- 3 10YR2/3黒褐色砂泥 焼土、炭化物混じる φ1~4cmの礫少量混じる
- 4 10YR4/6褐色砂泥 1より礫の混じりが少なく、粘度がやや高い
- 5 10YR5/6黄褐色泥砂 φ1~4cmの礫が多く混じる



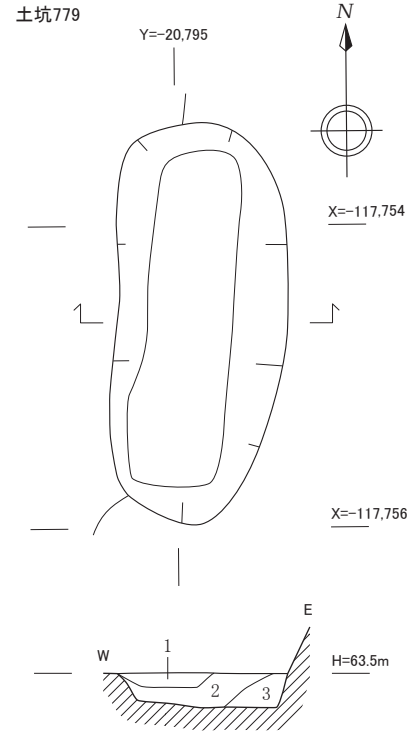
- 1 2.5Y5/6黄褐色粗砂 泥砂含む
- 2 2.5Y5/3黄褐色粗砂 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂多く含む
- 3 10YR5/6黄褐色細砂
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
- 5 10YR4/4褐色泥砂 2.5Y5/2暗灰黄色粘土ブロック少量含む



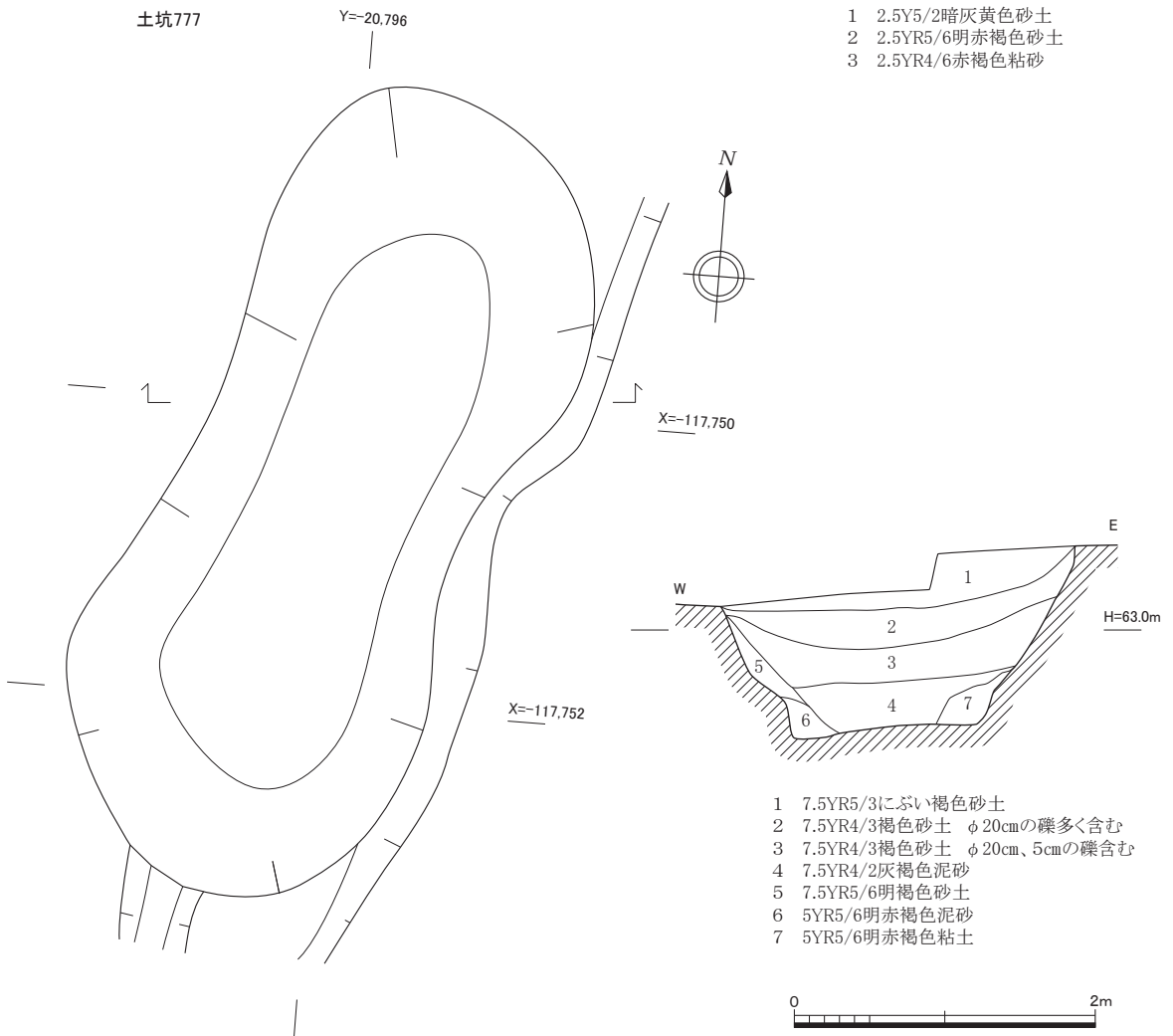
廃城後土坑平面・断面図1 (1:50)



- 1 10YR4/4褐色泥砂 7.5YR4/6褐色泥砂含む
φ20cm前後の礫、φ2~5cmの小石少量含む



- 1 2.5Y5/2暗灰黄色砂土
2 2.5YR5/6明赤褐色砂土
3 2.5YR4/6赤褐色粘砂



- 1 7.5YR5/3にぶい褐色砂土
2 7.5YR4/3褐色砂土 φ20cmの礫多く含む
3 7.5YR4/3褐色砂土 φ20cm、5cmの礫含む
4 7.5YR4/2灰褐色泥砂
5 7.5YR5/6明褐色砂土
6 5YR5/6明赤褐色泥砂
7 5YR5/6明赤褐色粘土



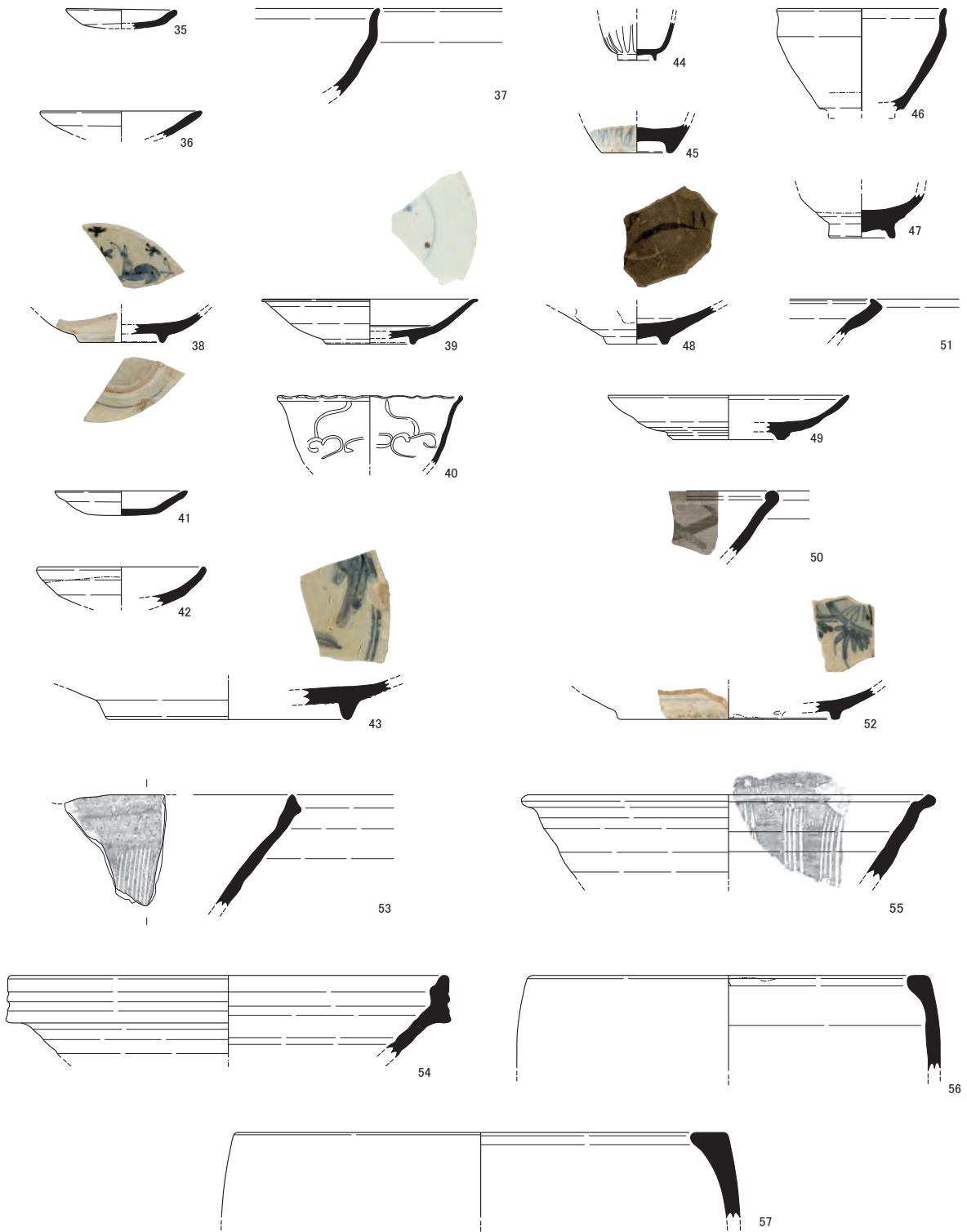
廃城後土坑平面・断面図2 (1:50)

図版
18
遺物



1・2・15:伏見城造成土 3:攪乱 4:溝403 5~7:土坑15 8:柱穴63
 9・10:土坑773 11~13:土坑784 14:土坑19 16:柱穴31 17・18:溝416
 19・20:土坑702 21・22:土坑735 23・24:土坑738 25:溝422
 26:土坑715 27:土坑785 28:土坑705 29~34:土坑777

0 20cm



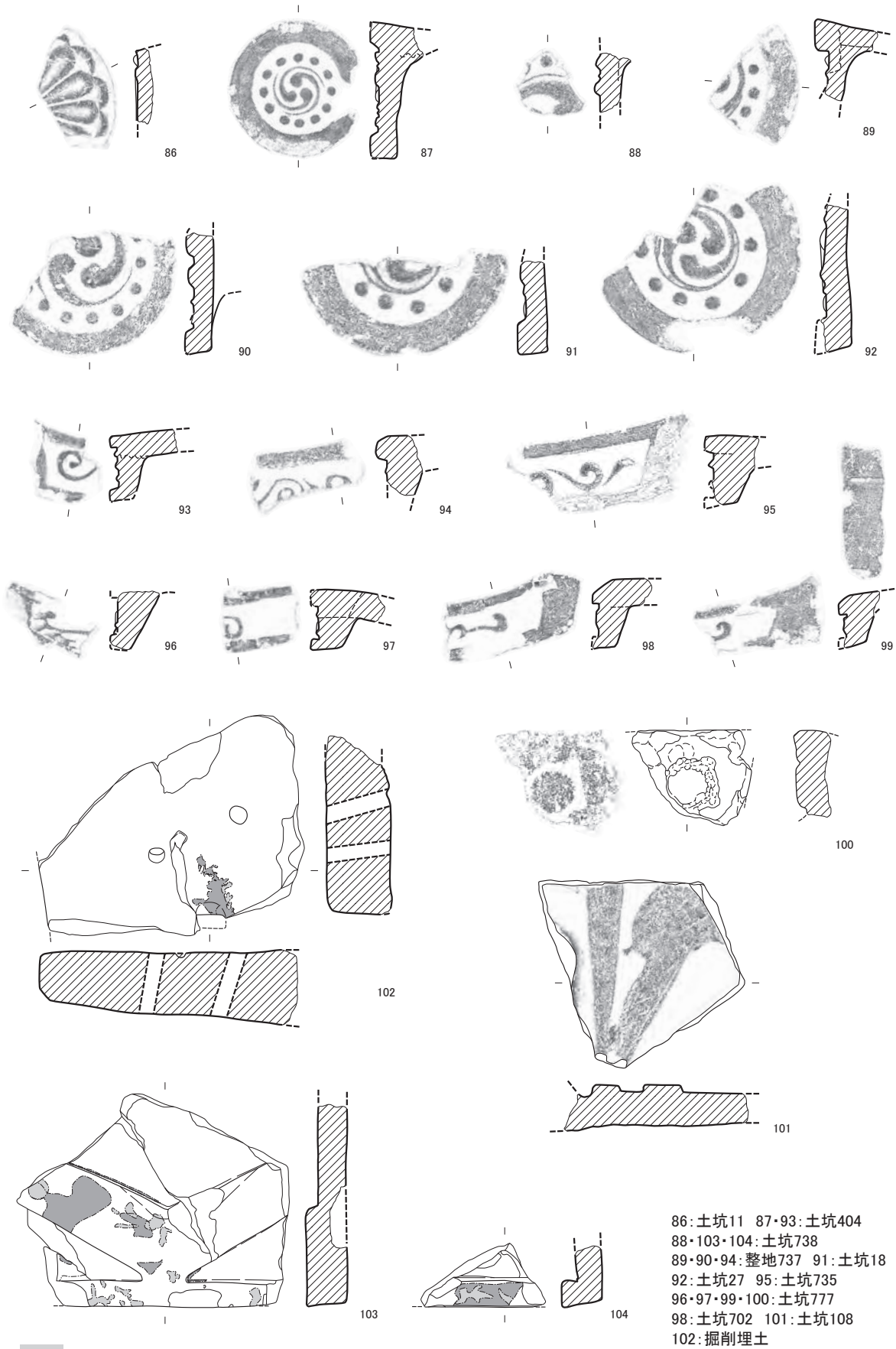
35~38: 整地701 39: 整地736 40: 整地26
41~43: 整地739 44~56: 整地737 57: 整地703

0 20cm



58:土坑702 59~62:土坑777 63:土坑715 64:溝403
65~67:土坑776 68:溝402 69:土坑11 70・71:土坑431
72~77:整地737 78・79:土坑608 80:溝422 81:整地739
82・83:整地701 84・85:溝405

0 20cm

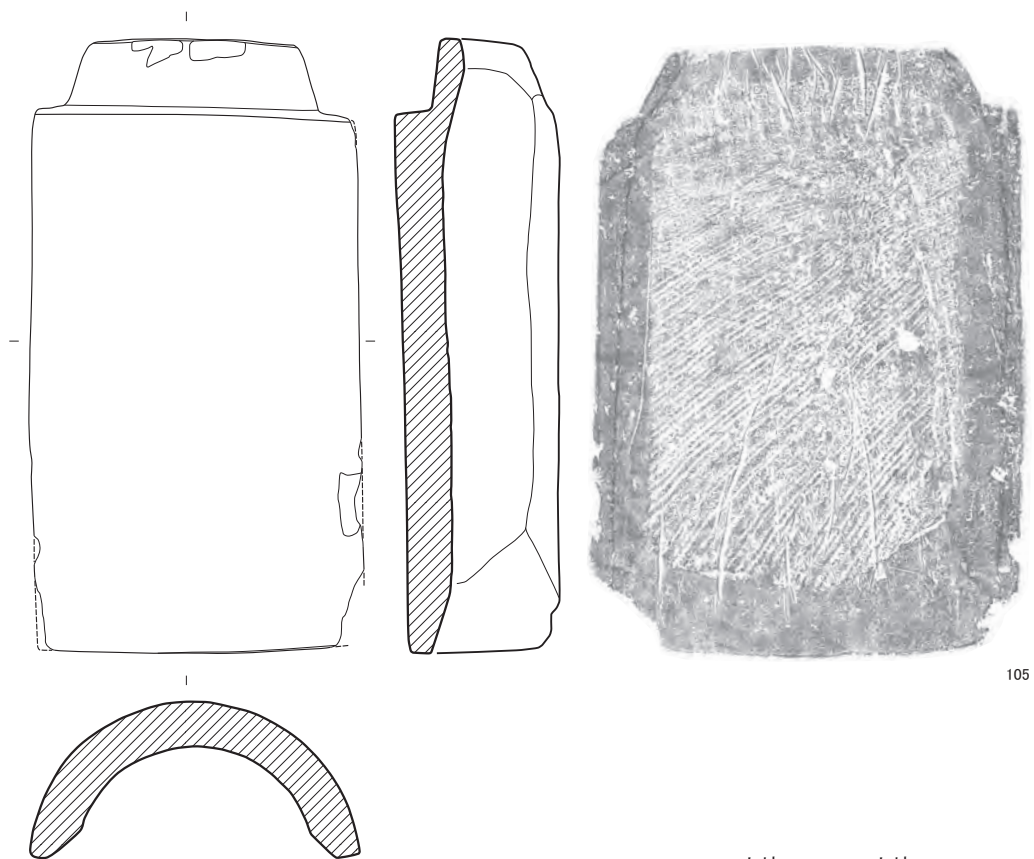


86: 土坑11 87·93: 土坑404
 88·103·104: 土坑738
 89·90·94: 整地737 91: 土坑18
 92: 土坑27 95: 土坑735
 96·97·99·100: 土坑777
 98: 土坑702 101: 土坑108
 102: 掘削埋土

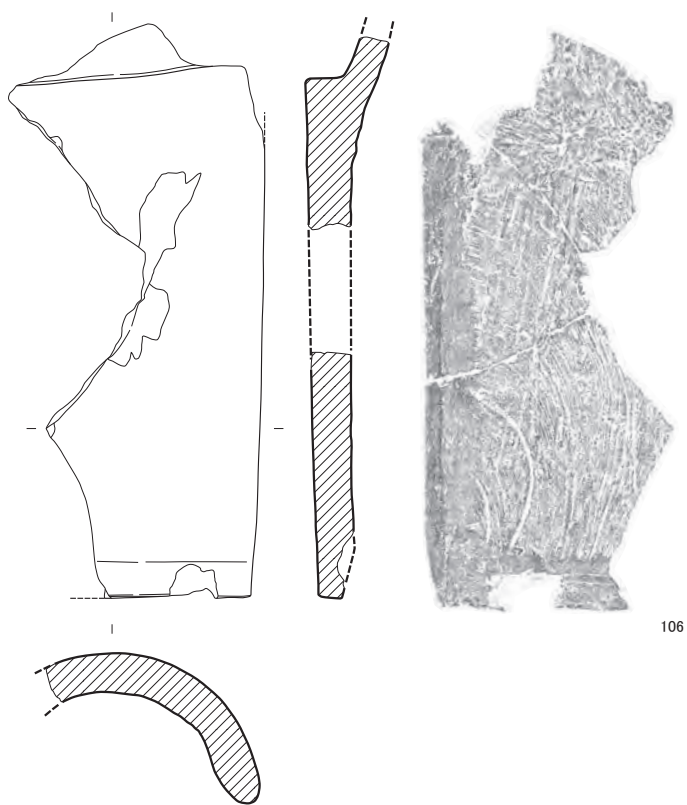
■ 金箔残存部
 ■ 黒漆残存部

0 20cm

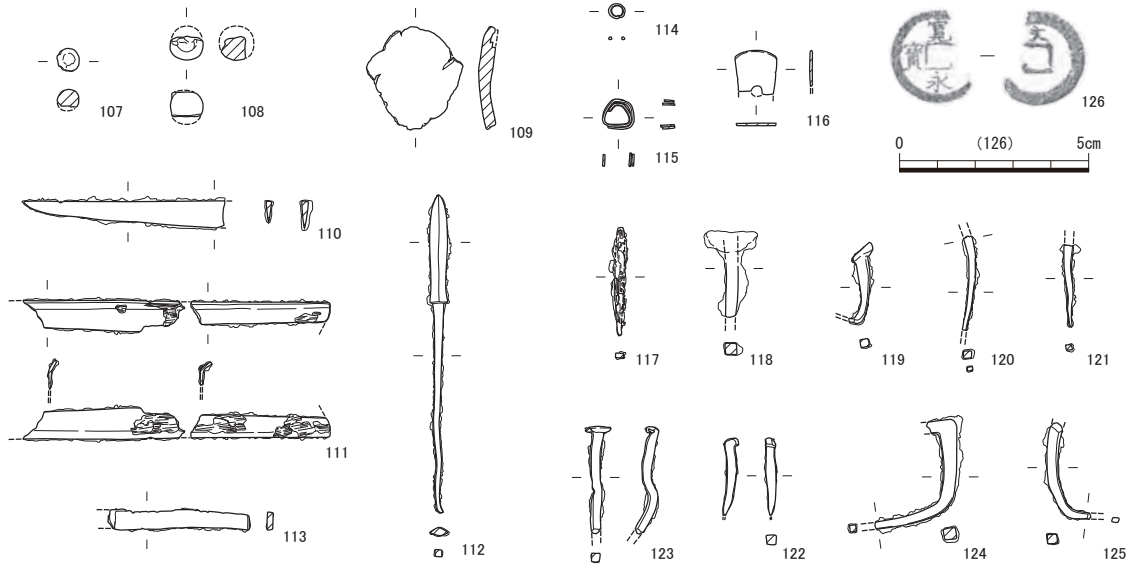
出土遺物 4 (軒瓦、道具瓦、金箔瓦 1 : 4)



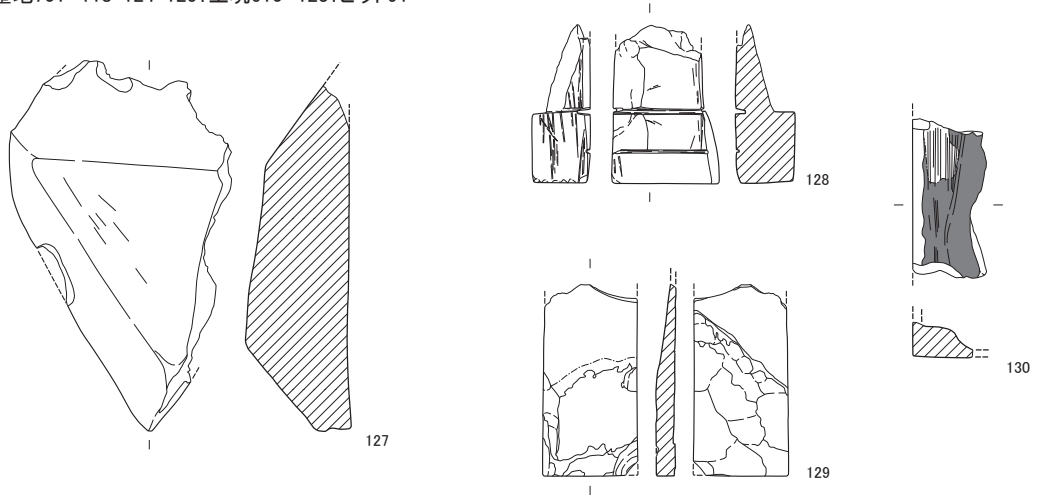
105:土坑784 106:土坑777



出土遺物5 (丸瓦 1:4)



107・111・115・117・119～121:ピット19 108:整地739
109・112・114・116・122・126:整地737 110:土坑10
113:整地701 118・124・125:土坑610 123:ピット91



127:土坑738 128:整地26 129:ピット91 130:整地737



1. 2区全景（上が北）



2. 1区全景（上が北）



1. 堀110、柱列112・113（南から）



1. 柱穴68 (西から)



2. 柱穴32 (西から)



3. 塀110北面、柱列111 (東から)



1. ピット19断面（北から）



2. 土坑14（南から）



3. 土坑28（北から）



1. 1区南西部（郭G・H）全景（西から）



2. 1区南西部（郭G）北側拡張後全景（南西から）



3. 柱列651・652（東から）



1. 建物650、柱列653・654（西から）



2. 土坑610（北から）



1. 2区北西部（郭I）全景1（北から）



2. 2区北西部（郭I）全景2（南から）



1. 柱列811 (南から)



2. 柱列810 (西から)



3. 土坑784 (東から)



1. 郭E・I間通路状遺構の状況1（南西から）



2. 郭E・I間通路状遺構の状況2（西から）



1. 2区断割り後全景（南から）



2. 1区断割り後全景（北から）



1. 2区南北断割り東壁断面（西から）



2. 2区南北断割り南端部 谷斜面の状況（北西から）



1. 2区東西断割り西半 北壁断面（南東から）



2. 2区東西断割り東半 北壁断面（南西から）



1. 2区北部（郭D）第1段階造成土上面の状況（南西から）



2. 2区北西部（郭I）東西セクション（北から）



1. 1区南壁 郭F・G間段差の状況（北から）



2. 1区断割り後の状況（北東から）



1. 土坑10・17 (南西から)



2. 土坑775・776・777・779・799 (南から)



3. 土坑431 (南から)



1. 3区全景 (西から)



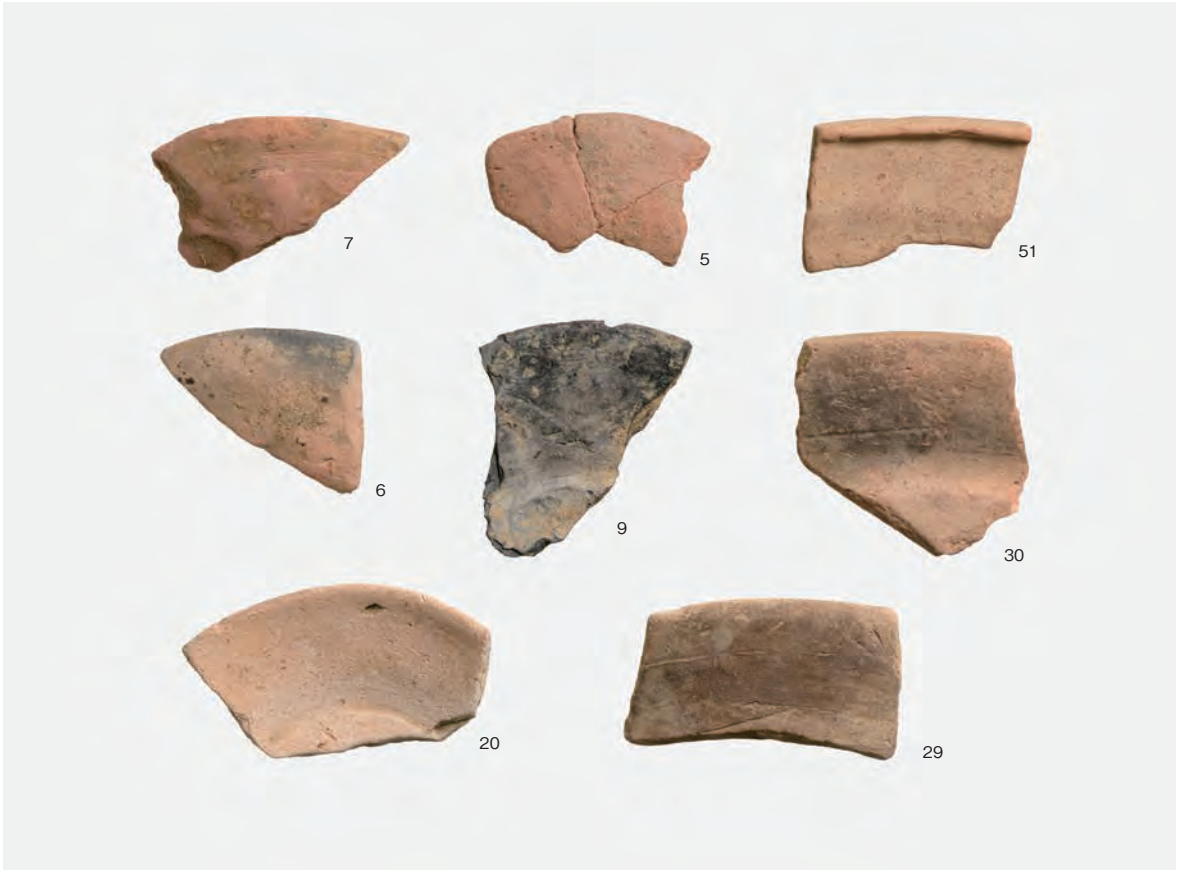
2. 3区北壁断面 (南から)



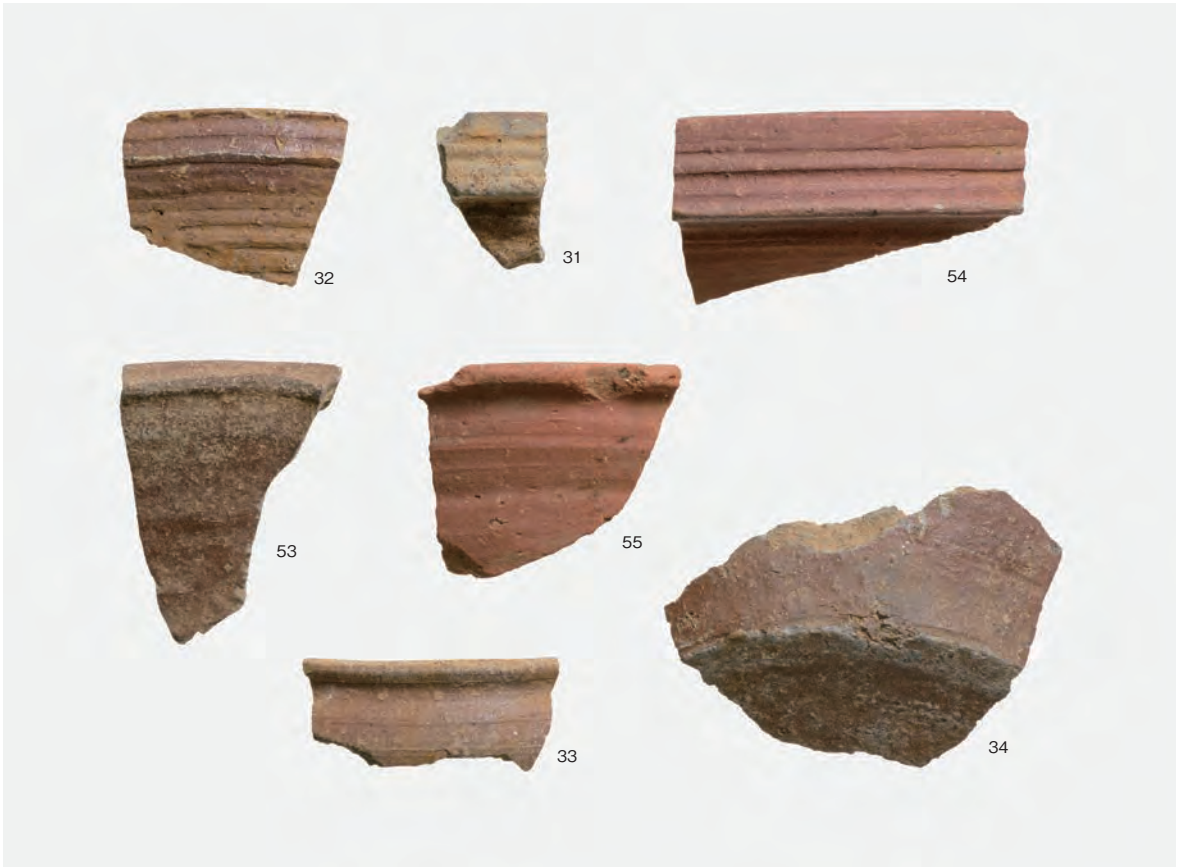
1. 出土遺物 1 (古墳時代土師器・須恵器、鎌倉時代土師器)



2. 出土遺物 2 (土師器皿)



1. 出土遺物 3 (土師器)



2. 出土遺物 4 (焼締陶器)



1 出土遺物 5 (青磁、白磁)



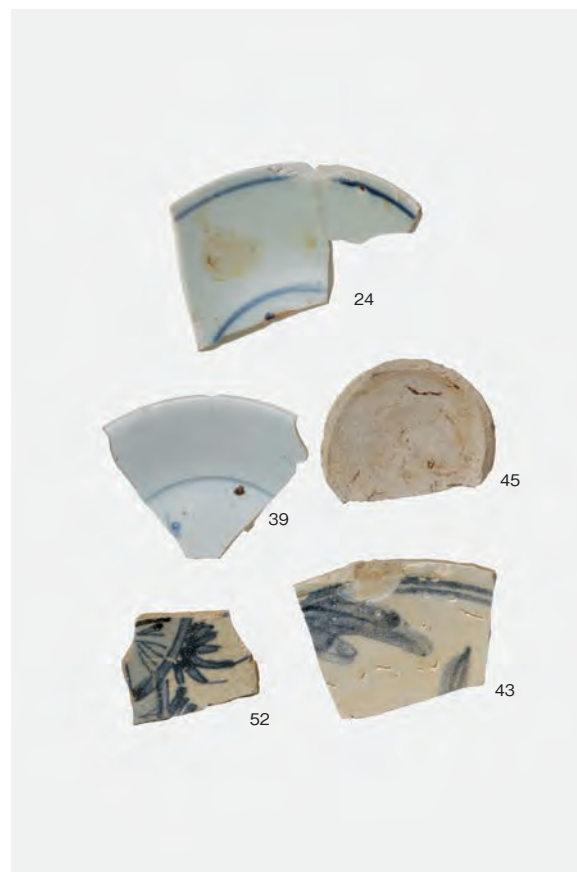
2. 出土遺物 6 (唐津)



3. 出土遺物 7 (瀬戸)

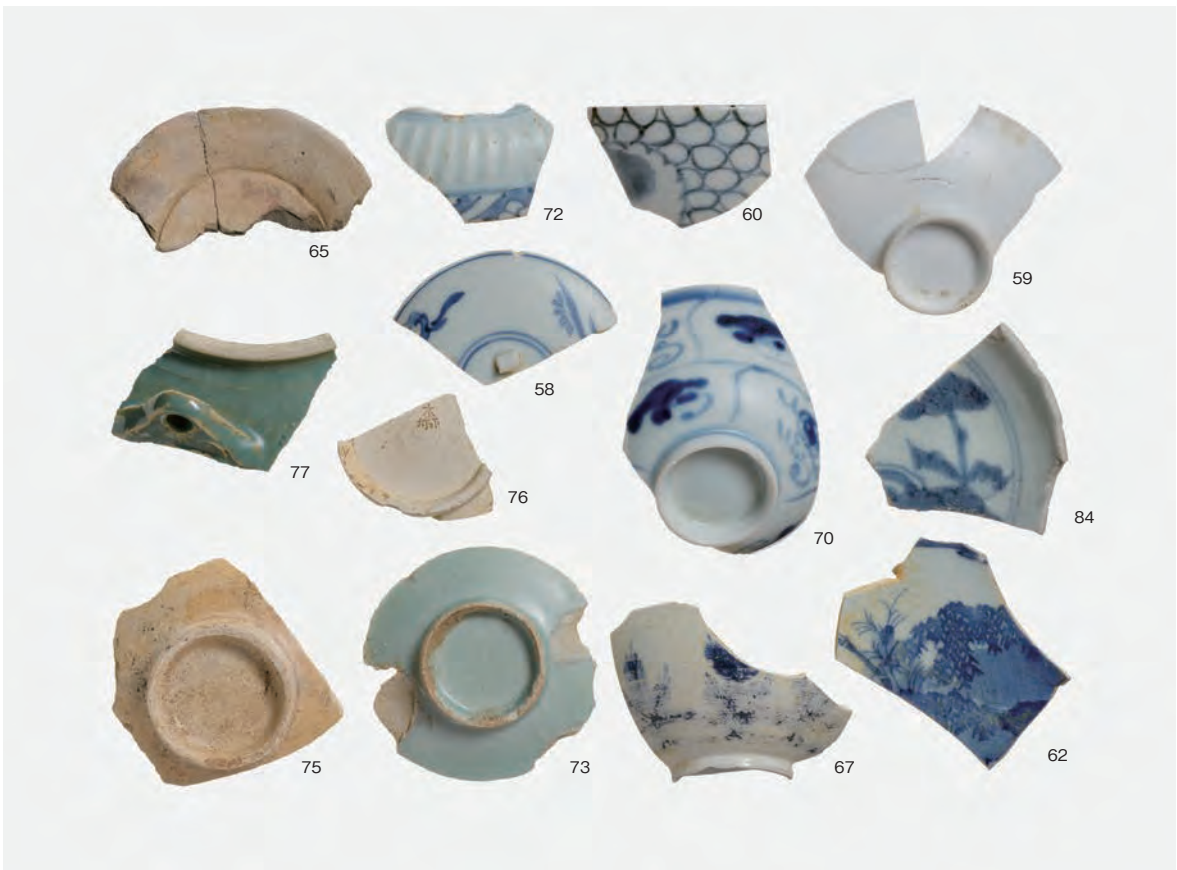


4. 出土遺物 8 (染付・表裏)





1. 出土遺物9 (施釉陶器)



2. 出土遺物10 (江戸時代後半)



1. 出土遺物11 (土製品)



2. 出土遺物12 (瓦質土器)



3. 出土遺物13 (染付)



5. 出土遺物15 (銭貨)



4. 出土遺物14 (染付)



6. 出土遺物16 (道具瓦)



1. 出土遺物17 (軒丸・軒棧瓦、道具瓦)



2. 出土遺物18 (軒平瓦)



1. 出土遺物19 (道具瓦)



2. 出土遺物20 (丸瓦・表裏)



1. 出土遺物21 (金属製品)



2. 出土遺物22 (石製品)

報告書抄録

ふりがな	ふしみじょうあとはくつちょうさほうこくしょ							
書名	伏見城跡発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第24集							
編著者名	大西晃靖 和氣清章 辻本裕也 中塚 良 中西佳奈江 吉川絵里							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒601-8127 京都市南区上鳥羽北花名町8番地							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2023年12月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふしみじょうあ 伏見城跡	きょうよふきやうとし 京都府京都市 ふしみくももやまちやう 伏見区桃山町 しまづ 島津76 51-2、53-4 54-4、55-1	26100	1172	34度 56分 17秒	135度 46分 20秒	2022年 11月24日 ～ 2023年 6月12日	2,892.1 m ²	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
伏見城跡	平城跡	伏見城以前		土師器、須恵器		<ul style="list-style-type: none"> ・本調査地は、伏見城跡の島津以久(嶋津右馬頭)屋敷推定地である。屋敷地は木幡山西麓に位置し、屋敷地内には西下がりひな壇が造成されている事を確認した。さらに、各ひな壇では、小段や柱列などにより複数の郭が構成されていることを確認した。 ・調査区北半では伏見城造成以前は北西方向に延びる谷が存在し、造成に伴い谷を埋めひな壇を構築するために大規模な造成を行っている事が判明した。 		
		伏見城期	塀、掘立柱建物、柱列、柱穴、土坑、造成盛土	土師器、青磁、白磁、施釉陶器、焼締陶器、瓦質土器、軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦、金箔瓦、丸瓦、平瓦、石製品、金属製品				
		江戸時代後半	溝群、土坑	土師器、白磁、染付、施釉陶器、焼締陶器、瓦質土器、土製品、銭貨				

文化財サービス発掘調査報告書 第24集

伏見城跡発掘調査報告書

発行日 2023年12月28日

株式会社 文化財サービス

編集 〒601-8127 京都市南区上鳥羽北花名町8番地

TEL 075-672-6800

三星商事印刷株式会社

印刷 〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273

TEL 075-467-5151